

茨城県土浦市

史跡 土浦城跡

—茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2002

土浦市教育委員会
土浦城跡調査委員会

茨城県土浦市

史跡 土浦城跡

—茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2002

土浦市教育委員会
土浦城跡調査会



(上)

常州土浦城図

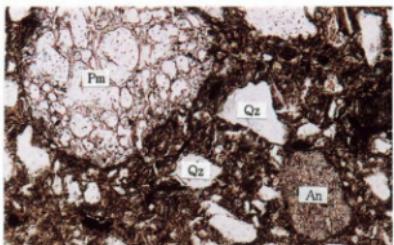
(成立: 1645(正保 2)年頃)

土浦市立博物館蔵

(下)

同 拡大

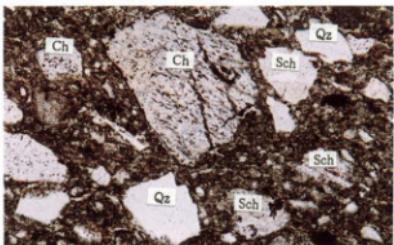




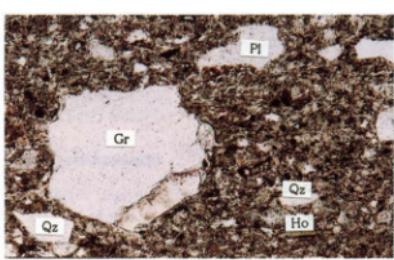
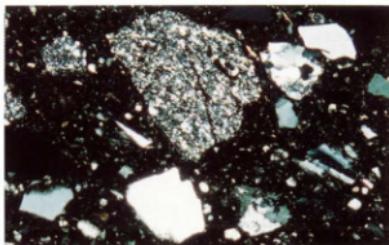
1. 板塀瓦86 (N 1区出土「前澤」刻印あり)



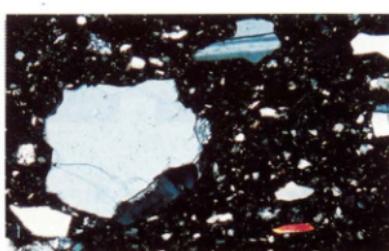
2. 板塀瓦96 (S区出土)



3. 軒平瓦5 (土星第3トレンチ出土)



4. 軒平瓦8 (東槽W 7トレンチ出土)



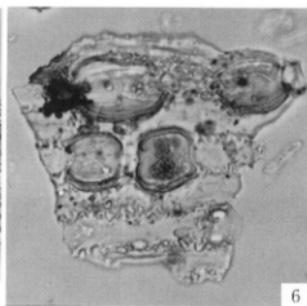
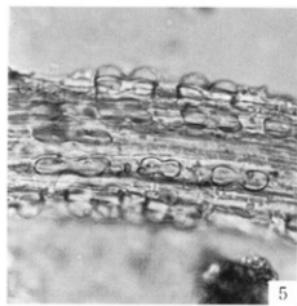
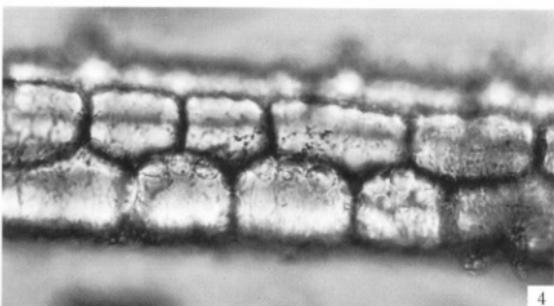
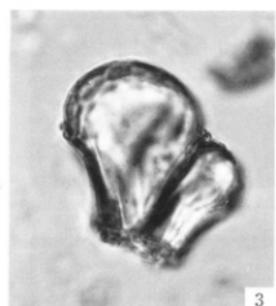
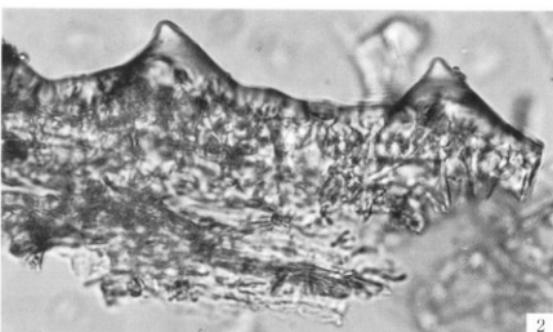
Q z : 石英. P 1 : 斜長石. Ho : 角閃石. Ch : チャート. Sch : 結晶片岩.

An : 安山岩. Gr : 花崗岩. P m : 輪石.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

卷頭図版3 植物珪酸体 (付編: 4参照)



50 μ mm

1. イネ属近細胞列 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)
3. イネ属微動細胞列 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)
5. ススキ属短細胞列 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)
7. 不明組織片 (木材?) (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 暗色部)

2. イネ属頸珪酸体 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)
4. イネ属微動細胞列 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)
6. ヨシ属短細胞列 (No. 126: 土壌トレンチ 26層; 明色部)

序

土浦市は霞ヶ浦の西端に位置し、北東に延びる新治台地と筑波稲敷台地の間を縫って流れる桜川の下流に位置する水と緑の豊かな都市です。

この桜川低地の中央に位置する土浦城跡は、室町時代に築城され江戸時代に整備されたと伝えられているもので、いわば土浦の発展の礎になった城跡です。城跡は、現在本丸及び二ノ丸の大半が茨城県指定史跡となっているほか、市民の憩いの場「亀城公園」としても親しまれています。旧城郭は広範囲な地域でありましたが、時代の変遷の中で江戸時代の遺構の多くは失われてきました。しかし、現在でも街は江戸時代の水戸街道及び町割の旧状を遺しており、その名残が街中に点在していることに驚かされます。

さて、このたび、土浦城址整備事業の一環として、土浦城跡の本丸土壘の発掘調査を実施したところ、土浦城の歴史に関わるいろいろな新しい発見をすることができました。これらの調査資料を土浦城跡の整備に活用していくことはもちろん、今後の常総地域の歴史の解明にも役立てて行きたいと思います。

最後になりますが、今回の調査にご協力・ご指導いただきました関係各位に感謝申し上げごあいさつをいたします。

土浦市教育委員会

教育長 尾見 彰一

例　　言

1. 本書は土浦城跡調査会が実施した土浦市中央1丁目1番地所在の土浦城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、土浦市の依頼を受けて、土浦城跡整備事業に伴う資料収集を目的とした学術調査として実施したものである。
3. 土浦城跡の現地の発掘調査は2000（平成12）年11月8日より2001（平成13）年2月17日まで実施した。その後出土品整理作業・報告書執筆作業等を2001年11月30日まで実施した。
4. 発掘調査は石川 功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、窪田恵一（土浦城跡調査会調査員）が補佐した。整理作業については石川が担当し、窪田、福山礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場埋蔵文化財調査臨時職員）、高野麻希（土浦城跡調査会調査員）が補佐した。総括・編集は石川が行った。
5. 発掘調査、出土品整理及び報告書の作成については、次の諸氏、諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を示したい。（五十音順、敬称略）

青木仁昌、秋山隆雄、雨谷 昭、池田晃一、石橋 充、磯部一洋、猪俣忠男、茨城県教育委員会、（財）茨城県教育財団、茨城県県南教育事務所、茨城ビデオパック、岩崎宏之、岩松和光、内山俊夫、大塚 博、小野正敏、小野 豊、川井正一、川崎純徳、瓦吹 堅、神戸信俊、国際航業（株）、小松崎猛彦、今平利幸、芹田克史、斎藤貢稚、斎藤順一、作山智彦、神野安伸、谷口 桂、高田 徹、千葉隆司、坂本福衛、土浦市都市整備部公園緑地課、土浦市文化財愛護の会、土浦市文化財保護審議会、土浦城址整備委員会、寺崎大貴、鳴田浩司、パリノ・サーヴェイ（株）、平田満男、（株）不二グリーン、星龍象、増山 栄、持山照夫、森山哲和、諸星政得、山本賢一郎、横田 茂、吉田恵二

6. 本書の執筆分担は次のとおりである。

北山 敏道 第1章

石川 功 第2章第2節、第3章第1節、第4章第1節、第5章第1～3節、第6章、
第7章1・2、第8章

窪田 恵一 第2章第1節、第3章第2節、第5章第4・7節、第7章3

石川・窪田 第4章第2・3節、第5章第5・6節

なお、第7章4についてはパリノ・サーヴェイ（株）【植木真吾、馬場健司、田中義文、矢作健二】より分析報告をいただいた。

7. 本書の写真は現場写真を石川、窪田が担当し、遺物写真は石川、比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。赤外線写真については（財）茨城県教育財団の協力を頂いた。

8. 本報告書にかかる出土品及び記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館に保管してある。

凡　例

1. 本書について、遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。

(遺構) SAH : 塙 SAD : 上塙 SB : 建物跡 P : 杖穴・ビット

(土層) K : 搗乱

2. 本書について、遺物の実測図中の表示は以下のとおりである。

赤彩□ タール■ 吸炭□

3. 土層観察と遺物における色調の同定は『新版標準土色帳』(小川正忠、竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4. 本書の遺構・遺物の指示は次のとおりである。

(1) 水系レベルは海拔高度を示す。

(2) 遺物番号は本文・挿図・表・写真図版とも一致する。

(3) 遺物出土状況図における記号は次のとおりである。

●: 瓦 ○: かわらけ・土師質土器 □: 磁器 ■: 陶器 *: 炭化米 ▲: 鉄製品

(4) 出土遺物一覧表における瓦等の部位の名称及び計測箇所は次頁のとおりである。

(5) 遺構の縮尺は基本的には1/50である。それ以外については個々のスケールを参考のこと。

(6) 遺物の縮尺は原則として瓦が1/4、土師質土器・陶磁器・石器その他の遺物は1/2とした。

(7) 遺物観察表中の()は実測値、[]は推定値を示す。

(8) 遺物観察表中の胎土中の混入物等の割合については主観的なものである。

土浦城跡調査会組織

会長	須田 靖之	土浦市文化財保護審議会会長
副会長	五瀬 英明	土浦市教育委員会教育次長
専務理事	岩沢 茂	土浦市教育委員会文化課長
理事	飯沼 正勝	土浦市都市整備部建築指導課長
理事	大塚 博	土浦市文化財保護審議会委員
理事	土肥 敏郎	土浦市教育委員会教育経理課長
監事	宮川 卓久	土浦市監査事務局補佐(平成12年度)
監事	山本 類一	土浦市監査事務局補佐(平成13年度)
事務局次長	宋柄 稔	上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長
事務局係長	加藤 寛治	上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長
事務局員	北山 敏道	土浦市教育委員会文化課課長補佐兼文化財係長
事務局員	黒澤 泰彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	閑口 満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	比毛 君男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事
事務局員兼出納員	石川 功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹・係長(担当)

調査組織

調査主任	石川 功
調査員	窪田忠一
調査作業員	朝日志一、池田寛治、横戸隆彦、大坪美知子、岡田正夫、鈴木孝行、閑 土枝
事務員	宮本常男、渡辺公子

整理作業

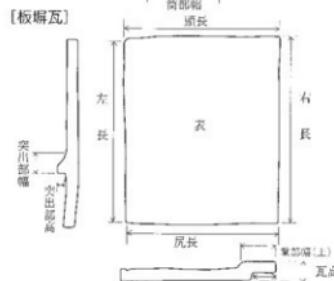
調査主任	石川 功
調査員	窪田忠一、高野麻希、横田礼子
整理作業員	大谷暎了、新井栄子、瓶川二美、石山泰美、横戸隆彦、人久保敦子、大坪美知子、小松崎廣子、長嶽道子、中野富美子、長谷川はるみ、浜田久美子、渡辺公子



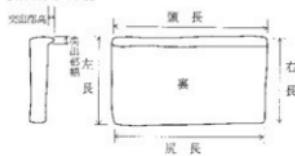
[丸瓦]



[平瓦]



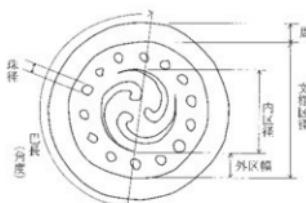
[板縛瓦]



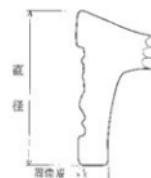
[板縛契斗瓦]



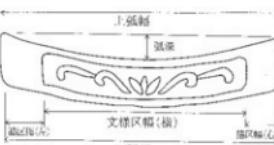
[軒違瓦]



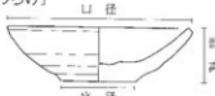
[軒丸瓦]



[軒平瓦]



[かわらけ]



[古銭]

各種瓦・かわらけ・錢貨の部位の名称 (計測箇所)

史跡 土浦城跡

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 地理的環境と土浦城跡の沿革	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
1. 原始・古代・中世初期	4
2. 土浦城の沿革	7
(1) 近世以前の土浦城	7
(2) 近世の土浦城	8
(3) 近代・現代の土浦城	11
(4) 土浦城関係の発掘調査記録	11
第3章 調査の経過	13
第1節 調査の経過	13
第2節 調査区の設定	14
第4章 検出された遺構	15
第1節 調査の概要	15
第2節 土壘の成り立ち	18
1. 土層	18
2. 土壘内部の遺物出土状況	22
第3節 土壘上面の遺構	23
1. 土壘	23
2. 墓跡	29
3. 建物跡	30
4. その他の遺構	31
5. 土壘上面の遺物出土状況	32
第5章 出土遺物	36
第1節 瓦類	36
1. 軒丸瓦	36
2. 軒平瓦	36
3. 丸瓦	39
4. 平瓦	45
5. 棟瓦	45
6. 輪造瓦	50
7. 板聯瓦	51
8. 板聯熨斗瓦	60

9. 特殊瓦・不明瓦	61
第2節 上器類	72
1. かわらけ類	72
2. 土師質土器・瓦質上器・土製品	73
3. その他の土器類	82
第3節 陶磁器類	86
1. 陶器	86
2. 磁器	86
第4節 石器類	90
第5節 金属製品	90
第6節 炭化物	93
第7節 その他の出土品	93
第6章 考 察	95
第1節 遺構	95
1. 上堀の構築方法	95
2. 土堤の「葺石」について	96
3. 推定される堀	97
4. 文獻史料・古絵図等との整合	100
第2節 遺物	102
1. 板堀瓦について	102
2. かわらけについて	104
第7章 付 編	108
第1節 土浦城大手門跡で発見された地下地業について	108
第2節 土浦城跡内施設整備工事に伴う工事立会いの概要	111
第3節 土浦城・外丸御殿跡出土の「鉄鉛石」	112
第4節 土浦城跡出土品の自然科学分析報告	114
第8章 調査のまとめ	119
参考文献	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 土浦城周辺の地形図	3
第3図 周辺の遺跡	6
第4図 上浦城跡・発掘調査箇所と主要施設（門）の位置	10
第5図 調査区設定図	14
第6図 龜城公園全体図	16

第7図	本丸東側土壘全体図	17
第8図	土壘土層断面図	19
第9図	土壘トレンチ調査場所位置図	22
第10図	土壘内部の遺物出土状況図	23
第11図	北区北壁土層断面図	24
第12図	土壘上面の遺構配図図（南区および南区西壁上層断面図）	24
第13図	土壘上面の遺構配置図（北区）	25
第14図	土壘葺石状遺構確認場所	27
第15図	土壘葺石状遺構平面・見通・断面図	28
第16図	S A H・P-2（控柱）土層断面図	29
第17図	S B-1・P-2 S A H・P-1上層断面図	31
第18図	S B-1・P-1土層断面図	31
第19図	北区土壘上面遺物出土状況図	33
第20図	南区土壘上面遺物出土状況図	35
第21図	出土瓦類実測図（1）軒丸・軒平瓦	37
第22図	出土瓦類実測図（2）軒丸瓦	38
第23図	出土瓦類実測図（3）丸瓦1	40
第24図	出土瓦類実測図（4）丸瓦2	41
第25図	出土瓦類実測図（5）丸瓦3	42
第26図	出土瓦類実測図（6）丸瓦4	43
第27図	出土瓦類実測図（7）丸瓦5	44
第28図	出土瓦類実測図（8）平瓦1	46
第29図	出土瓦類実測図（9）平瓦2	47
第30図	出土瓦類実測図（10）平瓦3	48
第31図	出土瓦類実測図（11）棟瓦1	49
第32図	出土瓦類実測図（12）棟瓦2	50
第33図	出土瓦類実測図（13）輪違瓦	51
第34図	出土瓦類実測図（14）板扉瓦1	53
第35図	出土瓦類実測図（15）板扉瓦2	54
第36図	出土瓦類実測図（16）板扉瓦3	55
第37図	出土瓦類実測図（17）板扉瓦4	56
第38図	出土瓦類実測図（18）板扉瓦5	57
第39図	出土瓦類実測図（19）板扉瓦6	58
第40図	出土瓦類実測図（20）板扉瓦7	59
第41図	出土瓦類実測図（21）板扉瓦斗瓦1	63
第42図	出土瓦類実測図（22）板扉瓦斗瓦2	64
第43図	出土瓦類実測図（23）特殊瓦・不明瓦1	65

第44図	出土瓦類実測図（24）特殊瓦・不明瓦.2	66
第45図	出土かわらけ類実測図（1）	74
第46図	出土かわらけ類実測図（2）	75
第47図	出土かわらけ類実測図（3）	76
第48図	出土かわらけ類実測図（4）	77
第49図	出土かわらけ類実測図（5）	78
第50図	出土上師質土器実測図（1）	80
第51図	出土上師質土器・瓦質土器実測図（2）	81
第52図	出土土製品・その他の土器類実測図	82
第53図	出土陶器実測図	87
第54図	出土磁器実測図	88
第55図	出土石器類実測図	91
第56図	出土石器類・金属製品実測図	92
第57図	その他の出土品実測図	94
第58図	上塁構築方法概念図	96
第59図	検出された跡跡と東橋の関係	99
第60図	土浦城跡出土かわらけの位置付け	107
第61図	大手門跡で発見された地下地業	109
第62図	工事箇所及び実施年度	112
第63図	外丸御殿出土の独鉛石	113

挿表目次

第1表	土浦城の整備記録	9
第2表	瓦の種類別出土場所傾向	32
第3表	軒丸瓦・軒平瓦観察表	67
第4表	丸瓦観察表	68
第5表	平瓦・棟瓦・輪違瓦観察表	69
第6表	板扉瓦観察表	70
第7表	板扉菱斗瓦・特殊瓦・不明瓦観察表	71
第8表	かわらけ類観察表（1）	83
第9表	かわらけ類観察表（2）	84
第10表	土師質土器・瓦質土器・土製品・その他の土器類観察表	85
第11表	陶・磁器観察表	89
第12表	石器類観察表	92
第13表	金属製品観察表	92
第14表	その他の出土品観察表	93

写真図版目次		図 版12:1	遺物出土状況（1）
卷頭図版1（上）	常州土浦城図	2	遺物出土状況（2）
（下）	同 拡大	3	遺物出土状況（3）
卷頭図版2	胎土薄片	図 版13	軒丸瓦
卷頭図版3	植物珪酸体	図 版14	軒丸瓦・棟瓦
図 版1:1	東槽周辺古写真	図 版15	丸瓦
2	調査前現況	図 版16	丸瓦・平瓦
3	北区北壁東側土層断面及び堀跡検出状況	図 版17	輪違瓦・不明瓦・特殊瓦
図 版2:1	N 1 区堀跡及び遺物出土状況	図 版18	板扉瓦
2	N 1 区北側遺物出土状況	図 版19	板扉瓦・板扉熨斗瓦
3	N 4 区遺物出土状況	図 版20	かわらけ類
図 版3:1	堀跡（N 1・2 区）	図 版21	かわらけ類
2	堀跡（N 1・2 区）	図 版22	土師質土器・瓦質土器・土製品・ その他の土器類・陶器
3	堀跡（N 3・4 区）	図 版23	磁器・石器・金属製品
図 版4:1	SAH・控堀 1 検出状況	図 版24	炭化物・その他の出土品
2	SAH・P-2 土層断面		
3	SAH・P-3 検出状況		
図 版5:1	SAH・P-4 検出状況		
2	建物跡（SB-1）全景		
3	SB-1・P-1 検出状況		
図 版6:1	SB-1・P-1 半截及び土層断面		
2	SB-1・P-2 及び SAH・P-1 土層断面		
3	SB-1・P-3 土層断面		
図 版7:1	葺石状遺構検出状況		
2	葺石状遺構及び堀跡検出状況		
3	葺石状遺構上面遺物出土状況		
図 版8:1	南区土層断面		
2	南区全景		
3	南区 P-2 検出状況		
図 版9:1	土堤トレント上層断面全景		
2	土堤上層断面（1）		
3	土堤上層断面（2）		
図 版10:1	土堤土層断面（3）		
2	土堤土層断面（4）		
3	土堤土層断面（5）		
図 版11:1	土堤土層断面（6）		
2	深掘部全景		
3	炭化物出土状況		

第1章 調査に至る経緯

土浦は、近世に土浦藩の城下町として栄え、以来繁栄を紡ぎ現在に至っている。城下町としての姿は明治以降時代の流れの中で姿を変えてきたが、近年の経済成長の中で急速に姿を消している。このような状況の下、城下町であった土浦が育んできた文化や文化遺産を保護・保存して次の世代に継承していくという気運が高まり、本市の歴史のシンボルとともにまちづくりの一環として土浦城の復元整備に取り組むこととなった。

1984（昭和59）年に土浦城址整備検討委員会が立ち上がり、1986（昭和61）年には土浦城址整備委員会が発足した。また、専門的な調査を進めるため歴史専門委員会・建築専門委員会・環境整備専門委員会を設置し各種の検討を行い、土浦城址整備委員会としての意見を1996（平成8）年に『土浦城址整備基本計画報告書』としてとり纏めている。土浦城址整備委員会が組織されたのとほぼ同時に建造物の解体修理・復元整備を開始し、1986・87（昭和61・62）年の土浦城跡櫓門や藩校郁文館の正門の解体保存修理をはじめ、1989～91（平成元～3）年には西櫓復元工事を施工し1991年8月31日に竣工した。引き続き1996（平成8）年度からは地域文化財保全事業として東櫓復元工事を3ヶ年で実施し1998（平成10）年10月22日に完成した。

1999（平成11）年度に入り、次の土浦城址整備事業として土浦城の堀の復元を目指し検討を始めた。しかし堀について確認されている資料は極めて少なく、発掘調査や文献調査・痕跡調査などの多角的な調査を行ない資料を収集して復元に努めることになった。発掘調査は、堀の土台となる土壠を面的に調査して堀の位置・形状や形態を確認する学術調査として実施する方針を立てた。土壠は、土浦城跡が明治維新以後新治県庁・新治郡役所・亀城公園と変遷する過程で幾度かの大幅な改変が加えられ、昔の姿と大きく変わっているため造構の攢乱が大きいのではと危惧されたが、攢乱の可能性があるても調査し確認する必要があると考え、比較的改変が少なく、また堀の復元の予定地でもある東櫓脇の土壠部分の調査位置を設定した。

発掘許可の申請については、土浦市教育委員会が茨城県教育委員会に2000（平成12）年9月28日付土教委発第690号で茨城県指定史跡「土浦城跡および櫓門」の現状変更許可申請を提出し、茨城県教育委員会から同年10月12日付文指令第21号で茨城県指定史跡「土浦城跡および櫓門」の現状変更（堀復元のための発掘調査）についての許可を得た。また幸いなことに発掘調査が茨城県の緊急雇用対策事業に認められ、同年10月31日付労政第1536号で補助金交付決定通知書を受け、発掘経費については全額補助で実施することができるようになった。また文献史料や建築痕跡など資料の調査研究と、今回得られる発掘調査資料を多角的に検討するため、歴史専門委員会・建築専門委員会の中から2000年5月26日にワーキンググループを組織し、同年6月2日に初会合以来、文献・痕跡・考古調査研究を開始した。さらに、発掘調査後は建築学の専門家や地質学の専門家等の意見を聴取できるよう体制を整え、同年11月2日に土浦城跡調査会と発掘業務委託の契約をし、土浦城跡調査会が11月8日から発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 調査区位置図

第2章 地理的環境と土浦城跡の沿革

第1節 地理的環境（第2図）

土浦城跡はJR常磐線土浦駅から北西に1kmに位置する。周辺には土浦警察署、土浦消防署、検察庁土浦支部など国・県の行政機関施設が集中している。さらに旧国道6号線であった国道125号線や同354号線に挟まれた交通の要所でもある。

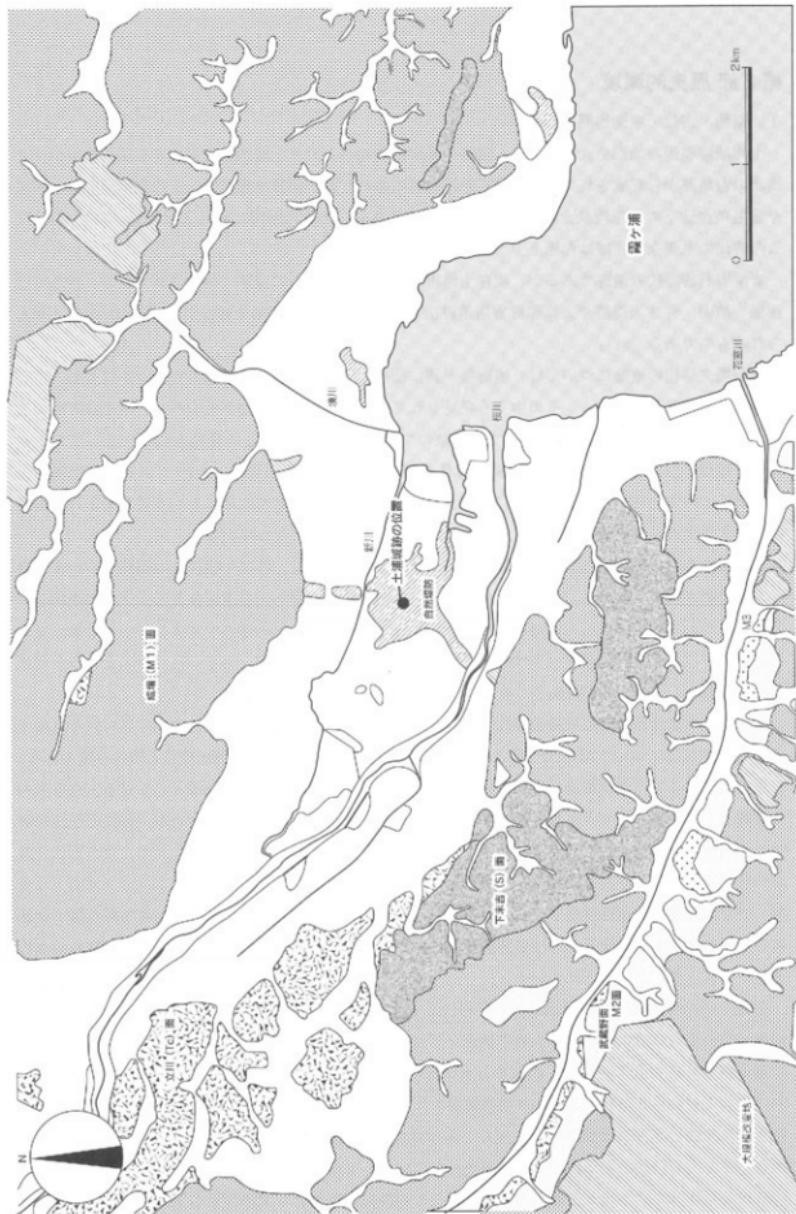
地形環境では、筑波山塊南側に広がる新治台地と筑波縦敷台地に区分されている更新世台地を、南北に大きく二分する桜川低地内に形成された自然堤防地形の上に立地する。桜川では古鬼怒川が現在より2万年前頃、関東造盆地構造による地盤沈降で西に流路移動を起こしたことと、更新世最寒冷期による海水面の標高低下が契機となって桜川低地の下刻が生じた。更新世終末期から完新世移行期以降の温暖化現象によって、海水面が上昇し桜川開析谷が内海化を起こしていく。現在の霞ヶ浦は最大水深7.3m、平均水深3.4mと水深が浅い湖水であるが、厚いシルト層の下には桜川の下削作用で形成された埋没谷が隠れている。霞ヶ浦町少崎沖では基底礫層までの深度が50mほどでかなり急峻な谷であった。そうした谷地形に、海面の上界で土浦入りと高浜入りには大量のシルトが堆積した。

土浦城の構築された自然堤防地形は、霞ヶ浦と桜川低地を区分するように、まるで桜川を塞ぐ状態に形成されている。自然堤防の中心に土浦城が構築され、南北に細長く砂嘴状に伸びている。北側は真鍋町を抜けて、土浦一高の台地下に接続する。南側は大町から南に伸び桜川によって一部が分断されているが、錢龟橋付近から常福寺下に接続する。この南北の砂嘴地形を利用して、江戸時代に整備された水門街道がその上を走っていた。この砂嘴地形付近で低地幅は2.2kmを測るが、錢龟橋－真鍋町間の砂嘴地形を中心として、上流下流ともに低地幅が広くなり都合いい堤防ではなく、まさにこの砂嘴地形が桜川の最も渡河地点であったことが理解できるのである。

土浦城跡付近では地表面下5m付近に礫層が存在することがボーリング調査によって確認されているが、礫層形成時期はまだ明らかになっていない。礫層が古鬼怒川時代の土浦礫層なのか、桜川の基底礫層なのか詳細が不明なのである。しかし、礫層が上浦礫層である可能性が考えられる資料があり、周辺の台地上の遺跡から示されている。桜川左岸台地にある常名町の神明遺跡と同川右岸台地の上高津貝塚では、縄文時代中期～後期の集落が調査されたが、そこでは石英斑岩や安山岩類が石器や焼き礫の素材として持ち込まれていた。これらの礫は円礫の形状で検出され、角礫ではない。

土浦礫層は古鬼怒川が堆積した石英斑岩が多く含まれる礫層で、基底礫層は花崗岩質礫が主要石材の礫層であり種類が明確に異なる。石斧等大型な石器製作や焼き礫に使用する目的の礫を獲得するのに採掘してまでとは考えにくく、当時露出していた礫層あるいは礫床から採取していたと考えられ、自然堤防で確認されている礫層が上浦礫層起源の可能性が高いと考えられるのである。

自然堤防の形成時期についての検討は、いつ頃から人間活動の場所であったのかを認識する基礎的な検討作業である。そして土浦城の構築時期の検討作業にも繋がる問題点である。今回の調査ではその問題点に明確な回答を出せなかったが、この点は今後の調査に期待せざるを得ない。



第2図 土浦城周辺の地形図

第2節 歴史的環境

1. 原始・古代・中世初期（第3図）

土浦城跡周辺の地形を大別すると、前述の地理的環境のとおり土浦城跡が存在する桜川低地部分と南北の台地部から形成されている。桜川低地部分においては、矢作や飯山といった微高地部分、宍塙や常名の台地下の河岸段丘を除けば、現在のところ原始・古代の遺跡はほとんど発見されておらず、この時代の重要な居住域は台地上であったと想定される。

まず旧石器時代の遺跡であるが、現在土浦市域において54ヶ所の遺跡が確認されている。常名町北西原・神明・弁才天遺跡や上高津町寄居遺跡出土資料は武藏野編年第Ⅳ層段階、約25,000年前と考えられるものである（註1）。

次の縄文時代の遺跡については、当時霞ヶ浦に面していた高津側・真鍋側の台地上をはじめ、市内の各所から発見されている。の中でも発見されているのは中期の遺跡が最も多く、木田余町御笠遺跡・東台遺跡や桜ヶ丘町六十原遺跡では多数のフ拉斯コ土坑が群集して発見されている。また上高津・宍塙町に広がる上高津貝塚は、縄文時代後期～晩期の大規模貝塚で、4.4ヘクタールが国指定史跡となっている。1995（平成7）年には『上高津貝塚ふるさと歴史の広場』として貝塚および考古資料館約5ヘクタールが整備され、埋蔵文化財保存・活用の拠点となっている。

しかし弥生時代の遺跡については現在のところ発見例が少なく、特に中期以前の遺跡についてはほとんど発見されていない。この近辺では木田余町宝積遺跡、宍塙町宍塙遺跡などでは後期の集落跡が発見されており、広大な桜川低地よりも小規模な谷津を利用した水田耕作が営まれていたと推定される。なお今回の出土遺物の中にも弥生土器かと思われるものもあるが、あるいはこのあたりから運ばれた土に混入していたものであろうか？

古墳時代の遺跡については縄文時代の遺跡と同様、比較的台地上ではボビュラーに見られる遺跡である。まず古墳については前期古墳としては手野町下堀・后堀古墳、常名町常名天神山古墳があり、後期古墳としては下高津町高津天神山古墳群や宍塙町宍塙古墳群、終末期古墳としては木田余町東台古墳群などがあり、いずれも霞ヶ浦や桜川を望む台地上に展開している。また一方、矢作町矢作稻荷神社古墳や宍塙町竜王山古墳など、台地下の微高地にも遺跡が見られるようになってくるのもこの時代の特徴である。集落跡としては木田余台（初買場・御灵・東台・宝積遺跡）や常名台（神明・北西原・弁才天遺跡）の遺跡群などでは大規模な集落跡が確認・調査されている。また常名町八幡下遺跡のような台地下の河岸段丘でも住居跡が発見されているほか、飯田・矢作・宍塙寺前など微高地の遺跡からも土器片が表採されている。

奈良・平安時代は、この地域は桜川を境にして北が茨城郡、南が信太郡などに組み込まれていた。桜川河口のこの地域には郡境でもあり郡衙などは置かれていなかったが、国府に向かう官道については高津側から桜川低地を横断したとする考え方もある（註2）。また霞ヶ浦を利用した物資集散地である「津」と思われる遺跡も田村・沖宿遺跡群などで発見されている。常名町弁才天遺跡では和同錢を伴う奈良時代の集落跡が調査されたほか、木田余台（初買場・宝積）、上高津町寄居、うぐいす平遺跡などでもこの時代の集落跡が発見・調査されている。また前述の八幡下遺跡などの河岸段丘でも住居跡が発見されているほか、飯田・矢作遺跡などの微高地などでも遺物が採集されており、古墳時代

に引き続き人々の居住域の拡大が進んだものと思われる。

最後に、土浦城存在以前のこの周辺の中世遺跡について概述したい。この周辺の中世遺跡は上高津周辺の台地部や、宍塙・矢作・飯田などの微高地のほか、虫掛・佐野子・田中八幡などの自然堤防上に確認されている。その中でも特筆されるものとしてまず宍塙町の般若寺跡がある。般若寺は現在も存在するが、鎌倉時代においてはつくば市三村山極楽寺跡とともにこの地域の西大寺系律宗の拠点として栄えた寺院である。現在でも建治元（1275）年銘の梵鐘（国指定文化財）や、実道房源海の同忌供養塔と考えられる石造五輪塔（県指定文化財）などが存在するほか、「般若寺五重塔瓦也」と刻書のある瓦なども出土しており、往時の繁栄を偲ばせている。なお五重塔については佐野子宮前遺跡にも室町時代頃のものと考えられる大型の五輪塔（市指定）もあり、周辺の墓石群とともに悲劇を思わせる風景を見せていている。また上高津町高井城跡は1341（興國2・慶応4）年に南北朝の争乱に伴い高師冬が攻めた「高井城」とも言われるが、現在城跡の大半が失われており詳細は不明である。

市町村 遺跡番号	遺跡名	遺跡の年代				市町村 遺跡名	遺跡の年代			
		古墳	古墳	古墳	古墳		古墳	古墳	古墳	古墳
93	小松	●	●	●	●	170	川面	●	●	●
94	池の台	●	●	●	●	171	上郷後	●	●	●
95	国分	●	●	●	●	172	出シ山所在塚	●	●	●
98	中高津西原	●	●	●	●	174	上郷後古墳	●	●	●
99	弁天社東	●	●	●	●	176	根本	●	●	●
100	下高津小学校	●	●	●	●	177	源助窓	●	●	●
101	寄居	●	●	●	●	178	上高津八幡	●	●	●
102	うぐいす平	●	●	●	●	179	不動後	●	●	●
103	新町	●	●	●	●	195	宝瓶	●	●	●
104	高津天神山古墳群	●	●	●	●	197	弓削	●	●	●
115	上高津貝塚	●	●	●	●	199	御又	●	●	●
116	宍塙古墳群	●	●	●	●	200	御賀場	●	●	●
117	矢作橋荷神社古墳	●	●	●	●	201	八坂前	●	●	●
118	矢作ドンドン塚古墳	●	●	●	●	202	浅間塚古墳	●	●	●
119	飯田	●	●	●	●	209	西真鍋	●	●	●
121	宮脇A	●	●	●	●	210	難卑	●	●	●
122	宮脇B	●	●	●	●	211	八幡台	●	●	●
123	宮脇庚申塚	●	●	●	●	212	天神脇	●	●	●
124	出シ山	●	●	●	●	233	常名天神山古墳	●	●	●
125	幕下女塚古墳	●	●	●	●	234	瓢箪塚古墳	●	●	●
126	宍塙	●	●	●	●	235	山川古墳群	●	●	●
127	般若寺跡	●	●	●	●	236	弁才天	●	●	●
128	竜王山古墳	●	●	●	●	237	神明	●	●	●
129	瓢箪	●	●	●	●	238	北西原	●	●	●
130	宍塙小学校内古墳	●	●	●	●	239	羽黒後	●	●	●
131	貝塚南	●	●	●	●	240	坂の上	●	●	●
132	日光入	●	●	●	●	241	小坂の上	●	●	●
133	難田	●	●	●	●	246	どんどん塚	●	●	●
134	向山	●	●	●	●	249	藩校御文館の門	●	●	●
135	グミヌキ	●	●	●	●	250	浅間塚西	●	●	●
136	穂屋久保A	●	●	●	●	254	八幡下	●	●	●
137	穂屋久保B	●	●	●	●	255	真鍋愛宕神社古墳	●	●	●
138	穂屋久保C	●	●	●	●	261	大宮前	●	●	●
139	馬場先	●	●	●	●	262	東台古墳群	●	●	●
145	房谷	●	●	●	●	264	殿里古墳	●	●	●
149	六十原	●	●	●	●	266	上浦城跡	●	●	●
151	六十原A	●	●	●	●	276	殿里台古墳	●	●	●
155	小松貝塚	●	●	●	●	277	貞掛二又	●	●	●
156	天王山古墳群	●	●	●	●	278	出中八幡	●	●	●
157	中高津古墳	●	●	●	●	288	東中八幡所在塚	●	●	●
160	高井城跡	●	●	●	●	289	東真鍋八幡前	●	●	●
162	五斗崎	●	●	●	●	292	東台	●	●	●
163	勢至久保	●	●	●	●	297	王塚古墳	●	●	●
164	佐野子宮前	●	●	●	●	298	后塚古墳	●	●	●
165	大久保	●	●	●	●	299	立	●	●	●
166	新町貝塚	●	●	●	●	300	五斗溝	●	●	●
167	佐野子新田	●	●	●	●	431	手野城跡	●	●	●
168	宍塙寺前	●	●	●	●	447	木田余城跡	●	●	●
169	矢作	●	●	●	●					



第3図 周辺の遺跡

2. 土浦城の沿革（第4回）

（1）近世以前の土浦城

土浦城は一説には平安時代に平将門によって築かれたとも言われるが、もちろん伝説である。遺跡の立地を見ると、奈良・平安時代の遺跡は微高地までしか確認できず、古代の段階で桜川低地の自然堤防がどの程度陸地化していたか自体が不明である。しかし中世になると自然堤防上などにも人々の居住域が造られてきたようで、上高津のような台地上の遺跡のほか、佐野子・虫掛・田中八幡など低地部にもいくつかの遺跡が確認されるようになってくる。現在旧市内で確認される古碑としては東崎町鷺宮の弘治3（1557）年銘の地蔵塔^(註3)が最も古いことから考えても、土浦城跡周辺の三角州に人が住み始めたのは鎌倉ないし室町時代頃のことと推定され、その開発領主の館として土浦城の前身が築かれたのではないかと推定される。

ところで、文献上に見られる「土浦」の初出は、『東寺百合文書』中にある1329（元徳元）年の結解状と呼ばれる年貢納入状況報告書で、年貢の錢納を示す文書である。また1435（永享7）年に、鹿島神宮の修理費用を調達するための賦課台帳として作成された『常陸國富有人注文』には、信太庄「土浦郷若泉三郎」という富有者の名が残されている^(註4)。この頃の常陸国南部の支配体制としては、鎌倉時代常陸国守護であった旧御家人の小山氏が最も大きな勢力であったが、1386（元中3・至徳3）年に小山若丸の乱に関係して失脚し、代わって山上杉氏系の上岐氏が代官として信太庄を支配した頃にあたる。上杉氏は足利氏の姻族で強大な勢力を誇ったが、上杉憲秀の乱などの鎌倉府との紛争などから次第に影響力が衰弱し、信太庄は次第に実質土岐氏の領土となっていった。土浦の位置は地理的には信太庄の北邊で、小田氏領である南野庄との境に当たる軍事的要地であるとともに、富有者も存在する霞ヶ浦に面した経済的要地であったとも考えられる。なお信太庄と南野庄の境界は桜川であったと考えられるため、この頃の桜川の本流は土浦城よりも北側であったと想定される点が興味深い^(註5)。

土浦城については、1516（永正13）年に小山氏の配下である菅谷勝貞が若泉（今泉？）五郎右衛門から攻めとったとされる記述がある^(註6)。これが『土浦城』の名の初出である。若泉五郎右衛門は前述の若泉三郎の末裔と考えられることから、土浦城は以後土岐氏の領土から小田氏の領土の一帯となつたと考えられる。菅谷氏は15世紀後半頃に小山氏に使えたと思われ、川越合戦にも菅谷隱岐守が参陣するなど以来小山家の有力武将として活躍している。その後菅谷氏は政貞、範政と土浦城を基盤とし、重臣として小田家を盛り立てたものの、次第に没落していく小田氏を支えることは出来なかつた。土浦城は1556（弘治2）年以来、小山城落城後の詰の城としてしばしば利用され、結城氏や佐竹氏など小田氏に対抗する勢力と対峙したり、あるいは小田城奪還のための出撃地ともなつたが、最終的には1590（天正18）年小田原北条氏討伐に伴い徳川家康に接収され、小田氏および菅谷氏による土浦城の支配は終わりを告げることとなった。ところでこの時代の土浦城の施設や規模はどのようなものであったのであろうか。状況的には本丸およびその周辺を城域とする、周辺を沼や川に囲まれた近世と比べれば小規模なものであったろうと推定される^(註7)が、現在のところ資料がなく詳細は不明である。

なおこの時代の近隣の遺跡としては、代表的なものに木田余城跡と手野城跡がある。木田余城跡は木田余町の水田中の自然堤防上に存在した城で、築城年代は不明だが、小田氏の重臣であった信太氏の居城であった。1570（永祿13）年内紛により信太氏が誘殺された後は、小田城を失った小田氏治の

居城となった。1578（天正6）年佐竹氏に攻められて落城し、再利用できないように徹底的に破却されたと伝えられている。現在遺跡の大部分はJR常磐線の鉄道線路敷地になっているが、城跡のはずれに信太範宗一族の墓と伝えられる五輪塔（市指定）が残されている。手野城跡は木田余城跡に比較的近い、手野町の台地西端の舌状部に存在する城跡で、現在でも空堀などが残されている。小田氏の臣下中根氏の居城と言われるが史料は少なく、事跡については不明である。なお近年の研究で、これらの城跡に近い木田余町で1ヶ所、手野町で最低3ヶ所ほど15世紀末から16世紀のものと考えられる埋蔵鏡が発見されていることが明らかとなった。これらと城などとの関係は不明であるが、当時のこの地域の流通経済状況を探る貴重な資料である。この他城跡については常名新田に「常名城」の伝承もあるが、現在遺跡としては確認できない。その他の中世関係の遺跡としては、寺島誠貞氏が記録した「のうさい寺」（入西寺・能濟寺）がある。この寺跡は土浦・高北方あるいは田中地内の虫掛飛地が遺跡地といわれているもので、明治40年頃布図のある巴文瓦や唐草瓦、人骨などが出土したと伝えられている。出土品から中世寺院の可能性も考えられるが、現在場所が確認できず、また出土品も不明である。

（2）近世の土浦城

1590（天正18）年、小田原北条氏の滅亡以降関東の大部分は徳川氏の領土となった。常陸国の大半は佐竹氏の領土となったが、土浦城およびその周辺は徳川家康の庶子である結城秀康の所領となった。秀康の居城は結城城であるため、この時代の土浦城は代官支配となったようである。この時代の事跡としては「結城城跡」が有名であるが、城郭の修築などの記録は残されていない。

1600（慶長5）年の関ヶ原の合戦後、結城秀康は越前北ノ庄に転封となり、土浦城は（藤井）松平信一の所領となった。この松平信一から了の信吉の時期が、城内および城下町などの近世土浦城の骨格となる整備が行われた時期と考えられている。1617（元和3）年松平信吉は高崎に転封となり、翌年西尾忠永が城主となった。西尾氏は忠永・忠照の2代約33年にわたり土浦を治め、土浦城についても東・西櫓や、今回調査対象になった鐘楼などの城内主要施設の整備を行ったことが記録に残されている。1649（慶安2）年には西尾忠照は駿河田中城に転封となり、代わって朽木種綱が城主となった。朽木氏は種綱・種昌の2代約21年間土浦を治め、本丸櫓門の改築などのほか、本丸の塀を瓦葺に改築するなどの整備を行っている。この他の大きな整備としては（大河内）松平信興の治めた1682（天和2）年からの5年間に、北門・南門などの整備が行われている。

なお、これらの江戸時代前期の大名は概ね3～4万石程度の比較的小藩であったため、その後土浦藩主として有名な土屋氏が加増によって9万5千石になると、藩士の増加に伴い城内の施設も手狭になってきたようで、1723（享保8）年に武家地として立田郭が築かれたほか、江戸時代中期以降に藩主の居住場所として外丸御殿が建てられたりしている。

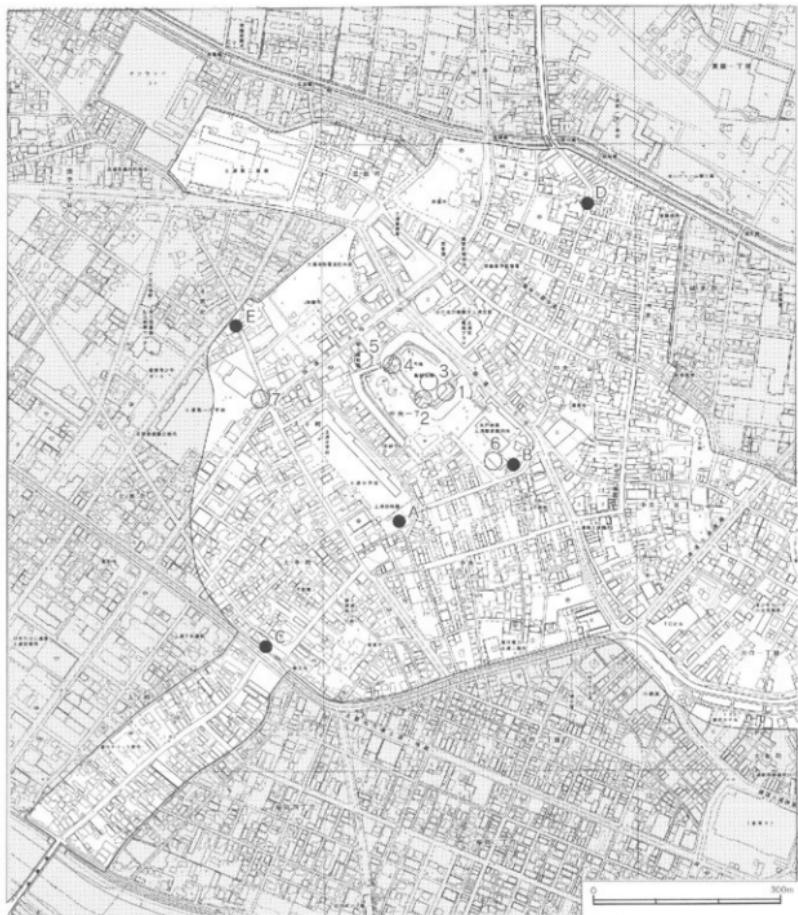
以上これらの整備によって、近世土浦城は概ね現在の形になったものと考えられる。その後、土浦城の城郭としての整備については施設の修築記録が残されているのみであるが、総郭内には次第に人が集まり、土浦の町を形成・拡大していくものと推定される。

なお今回調査対象となった本丸の「塙」であるが、1664（寛文4）年に瓦葺に改修されたことが史料に残されている。ただし1645（正保2）年のものと推定される『常州土浦城図』にも白壁状の塀の表現が見られることから、整備がもう少しさかのぼる可能性も想定される。また、同絵図では霞門が

漆を渡った直後にあり、外枠形が表現されていないなどの他の絵図や現状と異なる特徴が見られる（巻頭図版1参照）。震門周辺については、土浦城記の貞享年間に整備の記録があるので、これ以前は同絵図のような形態だったのかも知れない。

西暦	年号	整備内容・その他	城主名	出典
1603	慶長8	二ノ丸仕切門、黒門（二ノ門）、南・北・西門を建てる	松平信一	土浦城記
1612	慶長17	土浦城本丸を建てる	松平信吉	土浦史備考
1620	元和6	東・西櫓を建てる（史備考では元和2～3年）鐘楼を建てる	西尾忠永	土浦城記
1622	元和8	大手門を櫓門に改める	西尾忠頼	土浦城記
1656	明暦2	本丸の門を櫓門に改める	朽木種綱	土浦城記
1658	万治元	武具庫、焼硝庫を建てる	朽木種綱	土浦城記
1659	万治2	福手門、外記門を瓦葺きに改める	朽木種綱	土浦城記
1664	寛文4	土壁上の櫓を瓦葺きに改める	朽木種綱	土浦城記
1666	寛文6	賣子橋の門（南門）を瓦葺きに改める	朽木種昌	土浦城記
1671	寛文11	築地に足輕町を造成	土屋政義	土浦城記
1678	延宝6	二ノ丸に米倉を建てる	土屋政道	土浦城記
1682	天和2	城内の土塁を補築する（～貞享元：1684年）	松平信興	土浦城記
1683	天和3	城内土塁上の大木を切り倒す	松平信興	土浦城記
1684	天和4	巽郭、大手門脇、二ノ郭等の土塁を整備する	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	外記門周辺の土塁を築く	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	乾郭を築き二ノ丸より武具庫を移す	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	兵庫門の門、不破口の門を建てる（～説に貞享2）	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	外丸築城	松平信興	土浦市史
1685	貞享2	二ノ丸に馬廐を建てる	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	本丸四隅を架け替える	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	賣子橋前に角馬出を築く	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	二ノ丸に馬廐を建てる	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	馬廐口に馬出を築く	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	龜井郭の土塁、振手門脇、米倉後の土塁を整備する	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	殿門の土塁を築く	松平信興	土浦城記
1687	貞享4	殿門の構造り初め	松平信興	土浦城記
1687	貞享4	多計剥の土塁を新築する	松平信興	土浦城記
1691	元禄4	火災により真鍋口門、振手門、前川門、田町口門焼失	土屋政義	土浦城記
1692	元禄5	土浦城修復	土屋政義	土屋家文書
1694	元禄7	本丸・振手門櫓を架け替える	土屋政義	土浦城記
1695	元禄8	米蔵を修理する	土屋政義	土浦城記
1696	元禄9	土浦城修復	土屋政義	土屋家文書
1702	元禄15	扇手門・同構を建て替え・架け替える	土屋政義	公事小言
1704	元禄17	土浦城修復	土屋政義	土屋家文書
1707	宝永4	東橋筋復	土屋政義	西川家文書
1716	享保元	本丸・二ノ丸・三ノ丸の濠を浚渫する	土屋政義	土屋家文書
1718	享保3	東・西櫓を改築する	土屋政義	土浦史備考
1722	享保7	本丸・二ノ丸・三ノ丸の濠を浚渫する	土屋政義	土浦城記
1723	享保8	立田郭を築く	土屋政義	土浦城記
1724	享保9	外丸を築く	土屋政義	土浦城記
1732	享保17	二ノ丸・三ノ丸の櫓と土塁を修理する	土屋政義	土浦城記
1734	享保19	（櫓門に新構櫓もあり）	土屋政義	稲門木札
1736	享保21	大手門・船門・鹿門を修理する	土屋政義	土浦城記
1761	寛文元	寅鉢井より城内へ上水道を設置（寛文年中：～72年）	土屋政義	土浦市史
1766	明和3	東櫓と城の周りの堀を修理する	土屋政義	土浦史備考
1767	明和4	土浦城浚渫	土屋政義	土屋家文書
1799	寛政11	城内に桜文館設置	土屋政義	土浦市史
1803	享和3	大手櫓・屋根修復	土屋政義	土屋家文書
1808	文化5	土浦城附櫓門の修理向を提出する	土屋政義	土屋家御系譜
1810	文化7	大手門・西櫓の修理向を提出する	土屋政義	土屋家御系譜
1811	文化8	闇2月に始められた櫓の修理が8月に完成する	土屋政義	土浦史備考
1816	文化13	火災により外丸御廊焼失	土屋政義	松門墨書
1828	文政11	櫓門に修理記録あり	土屋政義	土浦史備考
1839	天保10	萬松軒文館新築	土屋政義	土浦史備考
1845	弘化2	大手門建て替え	土屋政義	土浦史備考
1852	嘉永5	城内住居の修理向を提出。文化7年向の櫓1ヶ所を修理	土屋政義	土屋家御系譜
1852	嘉永6	御城御形櫓上	土屋政義	御城内御定法書
1855	安政2	地震・大風雨のため城内外郭が破損する	土屋政義	土屋家御系譜
1858	安政5	火災のため城内御家中方焼失	土屋政義	土浦史備考
1859	安政6	御門要築立始まる	土屋政義	土浦史備考
1861	文久元	大手門修復	土屋政義	御城内御定法書
1862	文久2	前川門を新築する	土屋政義	前川門墨書
1863	文久3	外丸御殿新築	土屋政義	外丸棟札

第1表 土浦城の整備記録



第4図 土浦城跡・発掘調査箇所と主要施設（門）の位置

1. 東櫓（1988） 2. 樞門（1987） 3. 本丸（1985） 4. 西櫓（1988・89） 5. 二ノ丸（1985）
6. 外丸御殿（1993） 7. 郁文館の正門（1987）

A. 大手門 B. 握手門 C. 南門 D. 北門 E. 田中口

(3) 近代・現代の土浦城

1871（明治4）年の廃藩置県および1873（明治6）年の太政官布令以降、土浦城についても城郭としての主要施設は多くが破却または売却されて姿を消した。大手門・搦手門などの建造物が1873年に入札・売却によって姿を消し、土浦城の特徴的な施設であった南門の「枡形」（角馬出）や北門の2重馬出なども、1871年段階では確認できるものの、1873年の絵図では直線的に改修されているなど、明治初期のうちに土浦城の城郭としての形状は急速に変化したと思われる。ただし本丸御殿は新治郡役所、外丸御殿は新治郡裁判所として引き続き使用されたほか、本丸および二ノ丸の櫓門・籠門・東・西櫓など本丸周辺の施設は残されていたが、本丸御殿と東櫓は1884（明治17）年、外丸御殿は1905（明治38）年に火事で焼失し、西櫓も1949（昭和24）年のキティ台風による破損のため取り壇されてしまった。なお本丸・二ノ丸は郡役所敷地として利用されていたが、1897（明治31）年に土屋氏より土浦市に寄贈されたことを契機に、都市公園「亀城公園」として整備され、現在でも市中心部の公園として市民の憩いの場になっている。ちなみにこの公園部分が1952（昭和27）年に「土浦城跡および櫓門」として茨城県指定史跡となった。

ところで、今回の調査にかかる部分に存在していた堀および鐘楼についてであるが、これらについては撤去等を示す記録は発見されておらず、東櫓を東側から撮影した古写真（図版1-1）が唯一の資料である。この写真には東櫓と鐘楼は写っているが、堀については全く写っていないことから、1884年の東櫓焼失より以前に堀は存在しなかったことが明らかである。鐘楼については、この鐘楼で使用されていた梵鐘が現所有者の等覚寺に移されたのが1884年と伝えられていることから考えれば、東櫓の焼失・撤去と同じ頃に撤去された可能性が想定される。

なお土浦市では1986（昭和61）年以降「土浦城址整備事業」を進めている。現在までに櫓門・郁文館の正門の解体修理（1986・87）をはじめ、西櫓（1989～91）・東櫓（1996～98）の復元工事を実施した。整備事業については今後も継続される予定である。

(4) 土浦城関係の発掘調査記録

近世に整備された土浦城は、総郭としては北が真鍋町、南が大手町にも及ぶ現在の土浦中心部旧市街の大半を占めている大規模なものであった。その後この部分は近現代に引き続き市街化したため遺構の保存状態は決して良いとはいえないが、東光寺境内に土塁の一部が残されているほか、街道沿いの町割りや路地などにも昔の地割が踏襲されている部分が数多く見られる。

さて、土浦城の地下遺構に発掘調査のメスが初めて入ったのは1985（昭和60）年のことで、土浦市立博物館の建設にともなう事前調査として、二ノ丸および本丸の調査が行われたのが嚆矢である。このときの調査では建物跡が検出されたほか、瓦や陶磁器、土師質土器などが出土し、土浦城の歴史解明のために発掘調査が必要であることが確認された（註8）。その後土浦城址整備事業の一環として、1986・87（昭和61・62）年に櫓門と郁文館の門の解体修理工事が行われ、修理に伴って基礎部分が改修されることになったことから、この部分の発掘調査が行われた（註9）。このときの調査ではそれぞれの建物の特徴ある基礎工法や、さまざまな出土品が発見されたが、特に櫓門においては礎石下の盛土層より江戸時代前期頃のものと考えられる大量の破碎された、あるいは完形のかわらけがまとまって出土し、状況から櫓門の建築祭祀に伴うものではないかと推定されている。続く1988（昭和63）年

には東・西櫓の建物復元のための資料収集等を目的に、東・西櫓および上層の発掘調査が行われ、東・西櫓の建物の基礎工法に違いが確認されたほか、建物規模・構造等を知るための資料を収集することができた。また遺物としては、土壘の盛土下より純文後期の土器片が確認されたことと、土浦城と江戸遺跡出土の軒平瓦の対比が試みられた点が特に注目される（註10）。なお西櫓については、1989（平成元）年に復元工事に伴い建物基礎に相当する部分の発掘調査が再度行われ、建物内側に土間用と推定される盛土が存在していたことも確認された（註11）。また、発掘調査以外の調査として1991（平成3）年には地中レーダー探査も行われ、特に本丸跡では建物礎石と思われる地下遺構の存在が多数確認されている（註12）。

その他に開発事業に伴う調査として、公園東側に隣接する水戸地方裁判所土浦支部の施設増築に伴い、1993・4（平成5・6）年に外丸御殿跡の発掘調査が行われ、絵図に残されていた建物遺構が発見されたほか、建物下の盛土層から瓦のほか陶磁器や土師質土器など江戸時代後期～幕末・近代の遺物が多数出土している（註13）。この他にも近年の公園整備に伴った立会い調査（註14）や、1979（昭和54）年に土浦幼稚園の園舎建て替えに伴い地下遺構が発見されたほか（註15）、真鍋地区などで水道管といわれる木樋等が発見されたこともある（註16）。

このように、今までの発掘調査等によって、文献では確認されなかった土浦城の新知見もいろいろと明らかになってきた。出土品の研究についても、瓦については近世霞ヶ浦水運を利用した江戸近郊地城等との物流が窺われる資料が見つかってきた（註17）ほか、今後の地域研究の中で手がかりになりそうな資料もいくつか見られる。これら新たな資料の調査・研究・検討が進められれば、土浦の成り立ちのほか、霞ヶ浦地域の歴史の解明に新たな1ページが加えられることになるだろう。

（註1）霞ヶ浦一氏より御教示。

（註2）木下氏らの研究による。木下氏は高津→田中→真鍋を通る道を古代官道とし、曾祢駅場を真鍋地区附近に比定している。しかし、現在のところそれらしい遺跡は発見されていない。ただしこの地区は比叡古くから市街化した場所であり、調査費用が少ないと認められない可能性もある。

（註3）現物不明、拓本のみ保存。露宮にはこの地にも弘治4年の地図草（拓本のみ）や永禄7（1564）年頃の渡辺塙なども存在する。

（註4）これについては、美濃の安土に道を指しているとの考え方がある。詳細は小森正明氏「『美濃』に當有人と文の基礎的研究」参照。

（註5）桜井の河岸の付け基点については、若林氏・菅谷氏・結城氏などが上げられているが現在のところ小明である。寺島駿氏は松谷等の松の根駿から水正14年頃と推定し、菅谷氏の事跡と考えている。

（註6）若林氏の滅亡については小畠治幸・小泉耕家の争いに關係するという考え方もある。若林は桃崎祐輔「常陸地域の中世陶磁器と土器」参照。

（註7）「中城」を城内に含むとする考え方もあるが、そうすると城域がかなり大きくなってしまうことから、中城段階の土浦城の中に含まれるかどうかは今後の課題としたい。なお寺島氏によると土浦城の基を信太氏と想定し、坂上・浦ノ高殿地としている。

（註8）詳細は「土浦城二の丸・小丸施設調査 報告書」1998参照。

（註9）詳細は「専門保存修復工事業報告書」1988参照。

（註10）詳細は「土浦城延縄調查報告書」1989参照。

（註11）詳細は「防衛省第二工事報告書」1993参照。

（註12）詳細は「土浦城延縄地内レーダー測量報告書」1991参照。

（註13）詳細は「土浦城（外丸御殿跡）発掘調査報告書」1996参照。

（註14）今回報告。詳細は第7章「参考」。

（註15）今回報告。詳細は第7章「参考」。

（註16）円形状の角柱と板材が組み合わされて蓋状になるもので、江戸遺跡等で確認される上水道管と形態は類似している。伝承によれば市内真鍋の青龍寺から拾いされていた上水道管ともいわれている。他には祠なども発見されているが、工事中の不時発見のため詳細は不明。實見は土浦市立博物館に保管されている。

（註17）詳細は「土浦城の近世瓦」1990参照。

第3章 調査の経過

第1節 調査の経過

2000（平成12）年

- 11月8日 現状地形測量（～10日）。
- 14日 土壌上に調査範囲を設定し、表土除去を開始（～24日）。
- 28日 北区に調査グリッド設定。
- 29日 北区において石敷列を発見。
- 30日 石敷列を確認するため調査区を濠側に拡大。
- 12月2日 石敷列の精査を開始。石敷列は堀基礎と推定する。
- 5日 石敷列平面図作成開始。遺物出土状況図作成開始。
1988年調査時のトレント跡（旧トレント）を確認。
- 9日 旧トレントの掘削開始。
- 12日 旧トレント断面精査中に地業を発見する。
- 13日 石敷列精査中東櫓寄りに2ヶ所の突出部が発見され、堀の控堀と推定される。また先日の地業は鐘楼跡と推定される。
- 14日 トレント精査中に漆喰の入ったピットが発見され、堀の控柱と推定される。
- 20日 調査区全体図の修正。北区全景写真撮影。鐘楼跡北東角の地業を半截。
- 21日 鐘楼跡の中央柱を発見し半截する。
- 22日 南区の精査完了。堀基礎などは発見されず。2000年現場作業終了。

2001（平成13）年

- 1月10日 現場作業再開。
- 11日 土墨トレントの掘削開始。
- 12日 土墨トレント掘削中に石敷列が濠側斜面にも拡大し、葺石状になっていることが確認される。また土墨盛土中に旧土墨があることが確認される。
- 13日 土墨盛土中より握り飯状の炭化米出土。
- 14日 持田照夫氏より現地指導を受ける。
- 18日 現場記者発表。南区拡張区発掘開始。
- 21日 現地説明会。
- 23日 南区調査完了。
- 24日 機材撤収。土壌トレント上層断面図作成（～25日）。
- 2月3日 考古造形研究所による土層断面剥ぎ取り実施（～4日）。
- 14日 土墨トレントに盛土ドを確認するためテストピット掘削（～15日）。
- 17日 小野正敏氏、磯部一洋氏より現地指導を受ける。
- 28日 調査区埋め戻し、現場復旧完了。

第2節 調査区の設定（第5図）

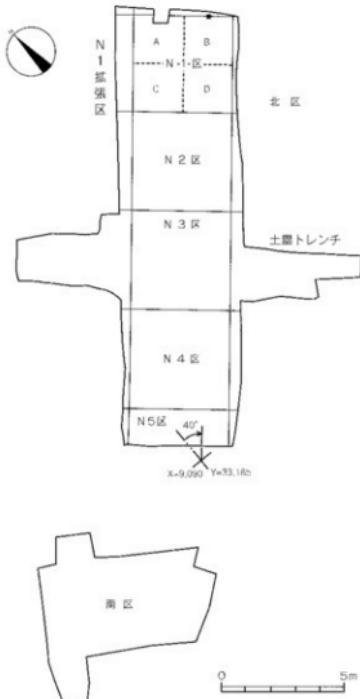
今回の調査では調査区全体に平面直角座標を採用している。この座標系においては、第IX系に属している。第IX系は北緯36度、東経139度50分（千葉県野山市付近）を原点（X=0、Y=0）として、土浦市は第1象限に位置するためX座標値・Y座標値ともに+表記となる。土浦城跡の調査では、今回の調査までこの座標表記を使用していなかった。この座標表記を今後使用していくけば、分査調査や継続調査が実施される遺跡内で調査地点位置の確認がスムーズに行われる様になると考えられる。

調査区は土壘上という細長い調査区であることや、立木や現存設置物に必要以上の影響を与えないことを前提として調査区を設定せざるを得ず、東側寄りを北(N)区、西側寄りを南(S)区として調査区を分割した。調査区面積は北区108.68m²、南区30.44 m²の合計139.12m²である。

調査区設定後に、平面直角座標は調査対象地に対して斜交しており、石敷造構などセンチ単位の精度を要求される記録作成に際しては利便性が少ないと考え、微細図作成が多く予想されるN区に対し、平面直角座標とは別の方眼実測用造り方杭の設定を行った。直角座標のX=9.090、Y=33.185交点を基準点として、トランシットにより東に40度振り調査区北東角に見通し杭を設定、この2点間を基準線として方眼を設定し東西3m、南北4mを中グリッドとした。その後調査が進展し石敷造構の範囲を明確にするなどを目的に、東側に調査範囲を1m拡張したため、最終的には東西4m、南北4mの範囲を中グリッドと変更した。この中グリッドは北東壁際に設置した杭を原点とし、北から南に向かってN1区、N2区、…N5区と呼称した。さらに中グリッドを東西2m、南北2mを単位とする小グリッド(a・b・c・d)に4分割して、一括遺物の取り上げで使用している。

土壘上面の調査終了後に土壘構築状況の確認を目的として、1988年の調査によって掘削され埋め戻されていた旧トレンチ（N3区中央付近）を利用して、やや拡張した形で本丸側から濠側に渡る「土壘トレンチ」を設定し一部基底層まで掘削調査を実施した。このトレンチ部の記録作成にも、平面直角座標ではなく土壘上面調査で使用した方眼を、トランシットを使用し延長して設定した。

S区では造構・遺物の記録作業に平面直角座標をそのまま使用した。調査区は台形になったが、一部縦を使用した基礎地業の範囲確認部分と、西壁セクション観察箇所で濠側にトレンチ状に拡張している箇所がある。



第5図 調査区設定図

第4章 検出された遺構

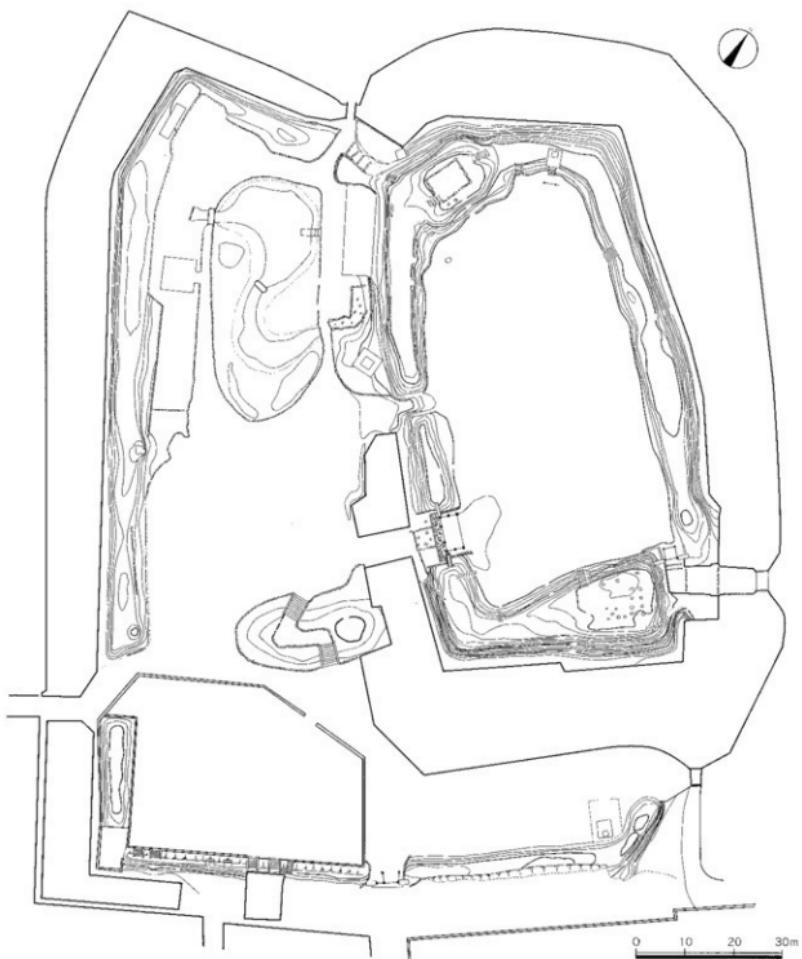
第1節 調査の概要

今回の調査では、(1)土壘上面における遺構の確認、(2)土壘構築状況の確認、の2つが主目的として設定されていた。その2つの目的を達成するため、今回の調査では本丸東側土壘を選定し調査区を設定した。この部分を調査区として選定した理由は、1988（昭和63）年に行った調査のときに一部ではあるが礎基礎と思われる遺構を検出していたためと、同年の調査実績から考えると、他の部分では土壘上面の遺構の遺存があまり良くないと想定されたためである。ただし、この部分は1996～98（平成8～10）年度に東櫓の復元工事に伴う周景整備のために既に盛上がされていたため、現況では以前の調査区を直接確認することができなかった。そこで今回の調査に当たっては、今後の調査・整備も考慮して、まずは座標設定のうえ整備後現況の測量を実施して整備前の地形を確認し、その後発掘調査に移行することにした。今回の発掘調査前の地形と、整備前の地形（原図：1985年作成）の違いについては第7図を参照されたい。

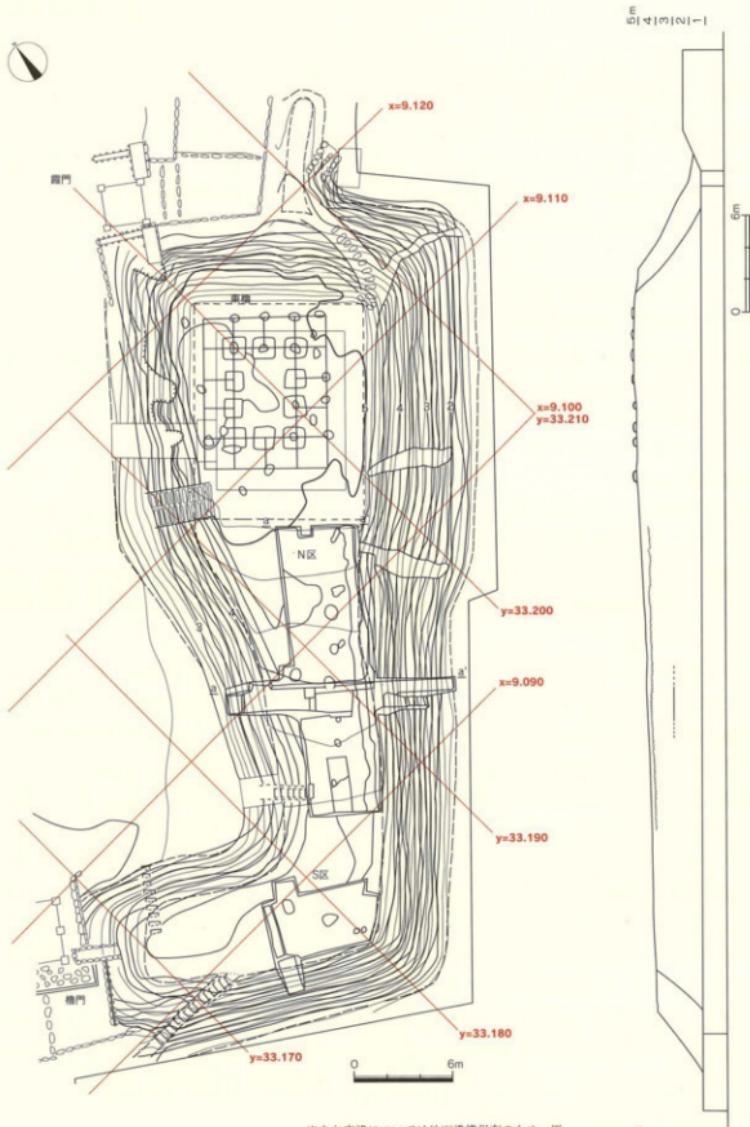
整備盛土を除去し、順次整備前の地表面より調査を開始した。薄いものの硬く締まった整備前の表土を除去していくと、しばらくして土壘上面外（濠）側から列状の石敷が検出され、礎基礎と推定された。また周囲を精査すると、堀の控柱と想定されるPitや控堀と想定される石敷の突出部も確認された。同じく上壘上に存在していた鐘楼の跡についてはなかなか検出できなかつたが、1988年に調査した時のトレンチの断面を精査中に地業らしいものが見つかったことから再度精査したところ、土壘上面でも地業跡が発見され、鐘楼跡の柱基礎と推定された。なお鐘楼跡については、当初東側の2本分（4本柱の東側）が発見されたが、神戸信俊氏より6本柱の可能性が高いと指摘され、再度精査したところ中央の1本を発見することができた。

土壘上面の調査を終了後、土壘断面の調査をするため旧調査トレンチを拡張する形で土壘盛土の掘削を開始した。その結果土壘は大別すると約5期の盛土から構築されていることが確認された。特にI・II・IV・V期の盛土からはかわらけがまとまって出土している。また土壘外側斜面においては石敷から連続する貼り石の面（葺石状遺構）が確認された。

なお、実際の発掘調査の進行については、もちろん土壘上面遺構の確認から土壘構築状況の確認に進んでいるが、今回の報告にあたっては土壘構築状況が遺跡の基本層序となるため、土壘の構築より報告する。



第6図 亀城公園全体図（原図：1985年作成）



車なお東櫓については地下遺構保存のため、原位置より東側（濠側）～50cm、南側（櫓門側）～60cm移動して復元されている。
よって遺構と東櫓の現状は一致しない。

第7図 本丸東側土塁全体図

第2節 土壙の成り立ち

土壙の成り立ちを観察するため、N3区に存在した旧トレンチを基に幅約2m、長さ約14mに拡大して設定し、今回調査の土壙トレンチとして発掘調査を実施した。当初はトレンチ内部を全面的に掘削する予定であったが、東（漆）側で発見された葺石状遺構や下部土壙の保存状況が良好であったこと等から、その保存のために東側においては幅を狭めて調査を実施している。

1. 上層（第8図、図版9・10）

今回の調査では土壙を東西に横断して掘削し、断面観察を実施した。ただし西（本丸）側先端部には攪乱が及んでいたことから、1面の土層断面として記録したのは長さ約11m分で、残りの約1.3m分については1段奥に入った状況で観察した。この掘削部分での土壙の土層は129層に分層できたが、Ⅲ期の土壙西側に見られる19層と20層（図中のトーン部分）は、土壙構築の際に繰り返して積み上げられた同じ土であるので共通表記とし、都合103層として土層注記を行った。

基底部（83～87層）

粘性および締まりのやや強い黒・暗褐色の砂混じり土を主体とする土層。この土層断面下約20～30cmで湧水となる。磯部一洋氏に拠れば地質学的には盛土であるとのことであるが、堆積が概ね水平で遺物が含まれないので自然堆積土と考えたい。なお櫓門や近隣のボーリング調査ではこの下に砂層があり、この層が地質学的には自然堆積層（地山）と考えられている。

第Ⅰ期（69・70層）

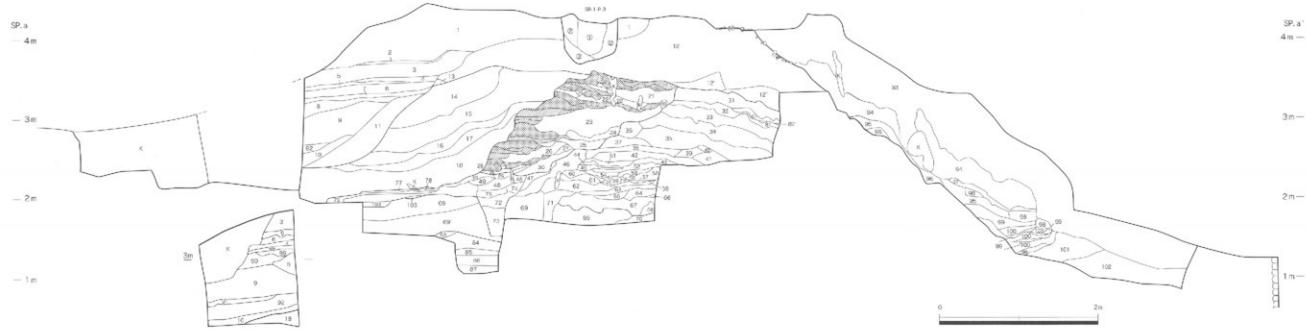
炭化物および焼土を微量含み、わずかに砂および粘質土を混入する暗褐色・褐灰色土を主体とする土層。部分的に円礫が面状に存在したり、あまり多くはないが全体に遺物が含まれたりしているので、土壙構築前の生活面と考えられる。土壙中央部の付近にかわらけが集中して出土しているが、そのうちの42・46・48・49などはレベル的には本層に伴う遺物の可能性がある。

第Ⅱ期（31～49・51～68・72～76・80～82層）

今回確認した中では最も古い時期の土壙に相当する部分で、暗褐色・黒褐色土等を主体とする土層である。締まりは土壙内部に当たる層はやや強く、47・51～53・57・59層といった土壙基底部付近の薄い層は硬化面を構成しているが、上部の31～35層は土層も比較的厚く、締まり・粘性共にないどちらかというとバサバサした感じの土で、とても叩き締めたような硬さではない。基底部層および第Ⅰ期の層と異なり、土層の中にローム粒や灰を含み砂や粘質土を含まないので、水成堆積土ではなく陸成の土と考えられる。遺物は59層から角棒状の鉄製品が出土したほか、土壙西側の先端基底部付近、第Ⅰ期のものとほぼ同じ場所に集中してかわらけが出土している。また48・49・72～75層についてはPitの断面と考えられることから、杭等が存在した可能性が推測される。ただし上面の48・49層の締まりが強く面的に硬化しているので、第Ⅲ期の盛土以前に埋め戻されていたと考えられる。

第Ⅲ期（19～30・50・77～79・103層）

今回確認した中では2番目に古い時期の土壙に相当する部分で、褐色・暗褐色土等を主体とする土層である。土質は基本的にはⅡ期と同様で、砂や粘質土を含まない陸成土と考えられるもので、比較的厚さの薄い土層を水平に積み上げているが、版築のように固い締まりはない。土壙西側基底部先端



- SP.a
— 4m —
- SP.a'
— 4m —
- 3m —
2m —
1m —
0 — 2m —
1. 暗褐色土 (10YR 3/3) 鋼鉄鉱粒多量。
 2. 黒褐色土 (10YR 2/3) 砂少量。
 3. 暗褐色土 (10YR 3/3) 砂多量、褐鉄鉱粒少量。
 4. 黑褐色土 (10YR 3/2) 炭化少量、砂多量。
 5. 黑褐色土 (75YR 3/3) 砂中量。
 6. 黑褐色土 (75YR 4/3) 砂中量、褐鉄鉱中量。
 7. 暗褐色土 (10YR 3/4) 砂中量。
 8. 黑褐色土 (10YR 2/3) 鋼鉄鉱微量、縛まりやや強い。
 9. 暗褐色土 (10YR 3/4) 炭化物少量。
 10. 黄褐色土 (75YR 4/4)
 11. 黑褐色土 (10YR 2/3) 砂少量、褐鉄鉱少量、縛まり強い。
 12. 黑褐色土 (10YR 3/2) 砂中量、粘土リック中量、縛まりやや強い。
 13. 黑褐色土 (10YR 2/3) 褐鉄鉱多量、縛まりやや強い。
 14. 黑褐色土 (75YR 3/2) 褐鉄鉱多量、縛り少、縛まり強い。
 15. 暗褐色土 (75YR 3/2) 炭化物微量、褐鉄鉱多量、砂中量、粘性、縛まりやや強い。
 16. 暗褐色土 (75YR 4/1) 縛り強い。
 17. 暗褐色土 (75YR 4/1) 縛り強い。
 18. 黑褐色粘土 (10YR 3/1) 粘性強く、縛まり非常に強い。
 19. 暗褐色土 (75YR 3/4) 炭化物微量、粘土ブロック微量、粘性あり。
 20. 黑褐色土 (10YR 2/2) 縛りやや強い。
 21. 黑褐色土 (10YR 2/2) 炭化物少量、粘土ブロック少量、縛まりやや強い。
 22. 黑褐色土 (10YR 3/3) 粘土中量。
 23. 黑褐色土 (10YR 2/3) 炭化物少量、粘土ブロックと砂中量、炭化物を含む。
 24. 黑褐色土 (10YR 2/3) 粘土中量、炭化物、砂中量。
 25. 暗褐色土 (75YR 3/4) 粘土中量、縛まりやや強い。
 26. 暗褐色土 (75YR 3/3) 炭化物多量、砂中量、粘土少量、縛り少、縛まり強い。
 27. 暗褐色土 (75YR 3/3) 灰・粘土少量。
 28. 黄褐色土 (75YR 4/4) 灰土少量、粘土中量、縛り強い。
 29. 暗褐色土 (75YR 4/6) ロームブロック主体、縛まり非常に強い。
 30. 暗褐色土 (75YR 4/4) 炭化物・灰・粘土少量。
 31. 暗褐色土 (75YR 2/3)
32. 黒褐色土 (75YR 2/2) 砂微量。
 33. 暗褐色土 (75YR 2/3) ローム粘。
 34. 黑褐色土 (75YR 2/2) 縛まりやや強い。
 35. 暗褐色土 (75YR 2/3) ローム粘微量、縛まりやや強い。
 36. 黑褐色土 (75YR 3/2) 縛まりやや強い。
 37. 黑褐色土 (75YR 2/2) 縛まりやや強い。
 38. 黄褐色土 (75YR 4/6) 縛り強い。
 39. 暗暗褐色土 (75YR 2/3) 縛まりやや強い。
 40. 黑褐色土 (75YR 2/2) 炭化物微量、縛まりやや強い。
 41. 暗褐色土 (75YR 3/3) ローム粘微量。
 42. 暗褐色土 (75YR 3/3) 縛まりやや強い。
 43. 暗褐色土 (75YR 3/3) 縛まりやや強い。
 44. 暗褐色土 (75YR 3/4)
 45. 黑褐色土 (75YR 3/2)
 46. 暗褐色土 (75YR 3/3)
 47. 暗褐色土 (75YR 3/3) ローム中中量、縛まり非常に強い。
 48. 暗褐色土 (75YR 3/3) 縛まりやや強い。
 49. 暗褐色土 (75YR 2/3) 縛り強い。
 50. 暗褐色土 (75YR 3/4) 炭化物・ローム大粒量、縛まりやや強い。
 51. 黄褐色土 (75YR 4/6) ローム大微量、ローム粘少量、縛まり強い。
 52. 黄褐色土 (75YR 4/2) 縛り強い。
 53. 黄褐色土 (75YR 4/1) 砂少量、褐鉄鉱鉱微量、縛まり強い。
 54. 黑褐色土 (75YR 4/1) 砂中量、炭化物を含む。
 55. 暗褐色土 (75YR 5/1) 砂微量、縛まりやや強い。
 56. 黄褐色土 (75YR 4/3)
 57. 黄褐色土 (75YR 4/3) 砂微量、縛まり強い。
 58. 黄褐色土 (75YR 4/2) 砂少量。
 59. 黑褐色土 (75YR 3/1) 縛り強い。
 60. 暗褐色土 (75YR 4/2)
 61. 暗褐色土 (75YR 4/2) 砂微量、縛まりやや強い。
 62. 黑褐色土 (75YR 4/1) 炭化物・砂・粘土微量。
63. 暗褐色土 (75YR 5/2) 砂微量。
 64. 黄褐色土 (75YR 4/2) 砂微量、褐鉄鉱鉱少量。
 65. 黄褐色土 (75YR 4/2) 炭化物、砂微量。
 66. 黄褐色土 (10YR 5/6) 砂微量、縛まりやや強い。
 67. 黄褐色土 (75YR 4/3) 砂微量、縛まりやや強い。
 68. 黄褐色土 (75YR 4/3)
 69. 黄褐色土 (75YR 4/2) 炭化物・砂微量。
 70. 暗褐色土 (10YR 3/3) 粘土中微量。
 71. 黄褐色土 (75YR 4/2) 砂・褐鉄鉱鉱微量。
 72. 黄褐色土 (75YR 4/4) 粘土中微量、ローム大少量、縛まり非常に強い。
 73. 暗褐色土 (75YR 4/2) 粘土中微量、ローム大少量、縛まり非常に強い。
 74. 黄褐色土 (75YR 5/6) ロームブロック主体、縛まり非常に強い。
 75. 黄褐色土 (75YR 4/4) ローム大微量、ローム粘少量。
 76. 黄褐色土 (75YR 4/3) 縛まりやや強い。
 77. 黄褐色土 (75YR 4/3) 縛り強い。
 78. 黄褐色土 (10YR 4/6) 粘土微量、縛まりやや強い。
 79. 黑褐色土 (10YR 2/3) 縛りやや強い。
 80. 暗褐色土 (75YR 2/3) 縛りやや強い。
 81. 暗褐色土 (75YR 3/3)
 82. にい・黄褐色土 (10YR 5/4) 粘土主体に褐土色が混入。
 83. 褐色砂質 (10YR 4/4) 砂礫主体、縛り強い。
 84. 暗褐色土 (10YR 3/3) 粘土微量、砂中量、粘性に富み縛りやや強い。
 85. 黑褐色土 (10YR 2/2) 砂・褐鉄鉱鉱微量、砂中量、縛り強い。
 86. 黑褐色土 (10YR 3/2) 粘性・縛り強い。
 87. 黑褐色土 (10YR 3/1) 粘性・縛り強い。
 88. 暗褐色土 (75YR 3/3)
 89. 黄褐色土 (75YR 3/3) 縛りやや強い。
 90. 黄褐色土 (75YR 3/4) 砂中量、縛りやや強い。
 91. 黄褐色土 (75YR 4/3) 縛り強い。
 92. 暗褐色土 (75YR 3/4)
 93. 暗褐色土 (10YR 3/3) 砂多量、縛りやや強い。

第8図 土壌層断面図

付近の26・28・29・49・77層は薄い硬化土層となっており、その上に19層（暗褐色土）と20層（黒褐色土）の同じ土が繰り返し盛られていることが、この第Ⅲ期層の土壌の構築に係わる特徴といえる。23・24・26層などは炭化物・灰を含む層で、特に23層及び26層からは固まつた米が炭化したもの（詳細は第7章4参照）が出土している。なお、77～79層については当時の使用面に伴う薄い堆積層と考えられるが、前出のPitの埋土ともレベル的に変わらないのでⅡ～Ⅲ期共通の使用面と考えたい。

また、断面を観察すると、この土壌内側法面には約3段の階段状の段差が設けられていることが分かる。この段差は踏み足が極端に短く、上面に硬化面もないことから階段等とは考え難い。19・20層とも土層の最厚部で不自然に止まっていることを考えれば、元々もう少し内側にも存在していた盛土を、階段状に削り出したものではないかと想定することができる。この階段状の削り出しについては土木でいうところの「段切り工」と呼ばれる、古い土（Ⅲ期）の上に新しい土（Ⅱ期）を盛るときに用いる工法に類似している。なおこのような段差は、第Ⅲ期層の土壌と振り付く第Ⅱ期層の土壌の内側法面にも弱干ではあるが存在している。

第IV期（13～18層）

今回確認した中では上から2番目・古い方から数えると3番目の時期の土壌になる部分である。上質は黒褐色土を主体としており、砂および粘質土、褐鉄鉱、円礫などを含むので、明らかに水成土である。土層はやや西下がりに比較的厚い層を積み上げたもので、全体に硬く縮まっており、粘性もある。全体に遺物を含むが、特に18層の土壌基底部周辺からはまとまってかわらけが出土している。なお、本期の土壌に伴う遺構等は検出されなかった。

第V期（1～12・88～92層）

今回確認した中では最も新しい時期の土壌になる部分である。上質は暗褐色土・黒褐色土を主体とし、第Ⅳ期と同様砂や褐鉄鉱、円礫などを含むので同じく水成層と考えられる。上層はまずⅣ期の土壌西側に縫まりの強い11層を掠り付け、その後10層・92層と西下がりに盛ったうえで、9層より上を水平に積み上げている。2～8層は砂をやや多めに含む比較的薄い層であるが、1層および12層は厚い土層である。全体としては土の縮まりが強いが、粘性はⅣ期の層よりは弱い。なお図示してはいないが、本米この上に93層から連続して調査前の表土（第11図-1層）が薄く存在していた。

この面に伴う遺構としては、籠櫓と考えられる建物跡の基礎上について掘り込み地業や、塀基礎と考えられる石敷遺構とそれに続く斜面の葺石状遺構が検出されている。これらの遺構のうち籠櫓と塀については文献史料に記録があるもので、本期の年代判定の資料となる。遺物は盛土中および葺石面の直上より出土しているが、Ⅱ期やⅣ期にみられるような遺物の集中区は発見されなかつた。

濠側土層（93～102層）

第V期の葺石状遺構を被覆するように存在している土層である。上質は暗褐色土・黒褐色土を主体とし、砂および粘土などを含むので水成層を基にしていると考えられる。この層は第V期の上に存在するいわば新しい土であるが、表土である93層を除き化学製品を含まないので、現代までは下らない可能性もある。なお、現状ではこの上に先年の土壌整備時の砂質盛土が存在しているが、今回は図示していない。

2. 土壘内部の遺物出土状況（第10図、図版11）

今回の土壘トレンチからは、かわらけ等の土師質土器を中心に、陶・磁器、瓦、石器、鉄製品などが出上っている。出土状況の特徴としては次のとおりである。

かわらけ：基底層を除く各層位から出土しているが、特に注目されるのは第Ⅰ期および第Ⅱ期層の土壘内側基底部周辺と、同じく第Ⅳ期層の土壘内側基底部周辺の出土状況（第10図）である。どちらも完存品などを中心としたまとまりのある出土状況を示しており、土壘築造等に関する祭祀行為に伴う可能性も想定される。ただし、柵門下調査時に検出されたような面的な出土状況ではなく、また出土する器の向きも一定ではないため、これらの土器はその場で行為が行われたと言うよりも、使用後にまとめて一括廃棄されたものではないかと考えられる。その他については盛土中の混入である。

土師質土器・土製品：内耳およびすり鉢が豪側土層および第Ⅰ～Ⅲ期層の盛土から出土している。いずれも小片であり、盛土中の混入である。また第Ⅱ期層盛土中からは管状土錘（第52図-29）が出土している。

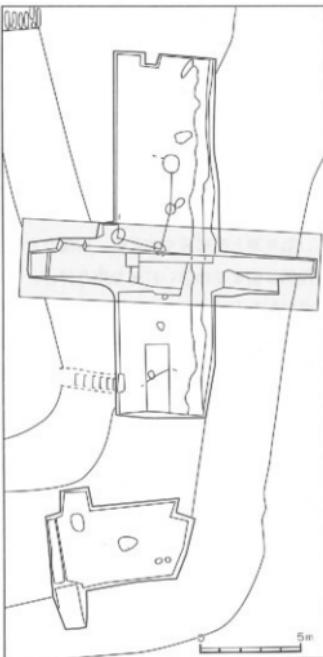
瓦：豪側土層および第V期層の土壘盛土表・上層からの出土は確認されるが、その他、特に第Ⅳ期以前の盛土中からは出土が確認されなかった。

陶 器：第Ⅱ期層の土壘盛土中より古瀬戸の小片（第53図-1）などが出土しているのみである。

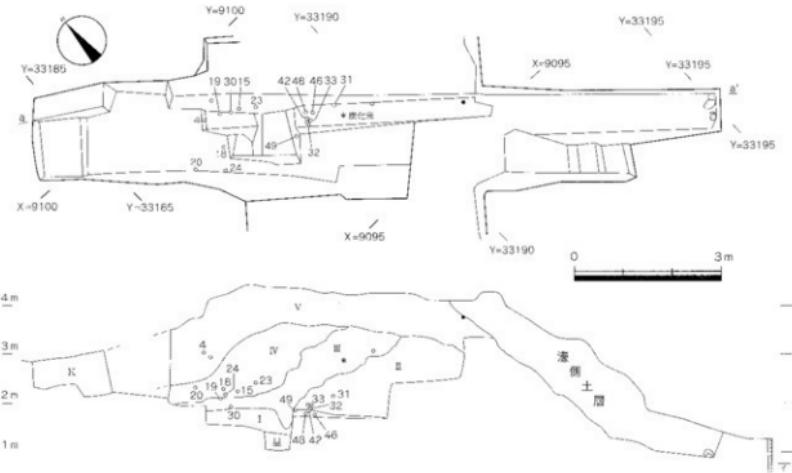
磁 器：第V期層の土壘盛土表層より広東碗の破片（第54図-2）が出土しているが、明らかな盛土中からの出土例は確認されなかつた。

石 器：第Ⅳ期層の土壘盛土中より、硯を転用した敲打器（第55図-3）が出土している。また、南区になるが第V期層の土壘盛土上層より打製石斧（第55図-4）も出土している。どちらも混入遺物である。

金属製品：第Ⅱ期層の59層中より角棒状鉄製品（第56図-10・11）が出土している。この鉄製品は、硬化面に約30cmの間隔を開けて突き刺したような状態で検出されているので、何らかの意味を持って設置されたものである可能性が高い。



第9図 土壘トレンチ調査場所位置図



第10図 土壌内部の遺物出土状況図

第3節 土壌上面の遺構

今回十ヶ所に設けた調査区は、東櫓から南側の北（N）区約109m²と、櫓門から東側の南（S）区約30m²の2ヶ所である。そのうちN1・2区西側にはかなり大きな現代の擾乱があったほか、南区の西側も範囲は不明瞭ながら一部擾乱が認められ、またN3区には1988年調査時の旧トレンチが存在していた。これらの部分では一部遺構が検出できなかったが、その他の部分の遺存は概ね良好であった。土壌上面の遺構としては、北区からは葺石状遺構を伴う土壌（SAD）および跡跡（SAH）と建物跡（SB-1）が検出された。南区では、土壌の上面から性格不明の地業跡2基が検出されたが、北区で確認された跡跡および土壌斜面の葺石状遺構については、擾乱などのため検出されなかった。

1. 土壌《SAD》（第10～15図、図版7・9～12）

上浦城跡の土壌は、亀城公園内に当たる本丸および二ノ丸の大半では、現在でも高まりを明瞭に確認することができる。ただし本丸櫓門西側の土壌は明治後期～大正の郡役所建設時に改変されており、また本丸北側土壌も1932（昭和7）年の郡役所移築時に削平を受けるなど、現在の土壌がすべて近世のものというわけではない。ただしこれらの部分についても1987・1988年の調査では土壌基底部が検出されていることから、一部は遺存が確認されている。今回調査した本丸東側土壌は、そのような土浦城跡の土壌の中でも最も保存状態がよいと考えられる場所である。

今回の調査で確認された土壌は、前述の断面観察の結果4回にわたって造りかえられている事が確認された。以下に各期別に紹介する。

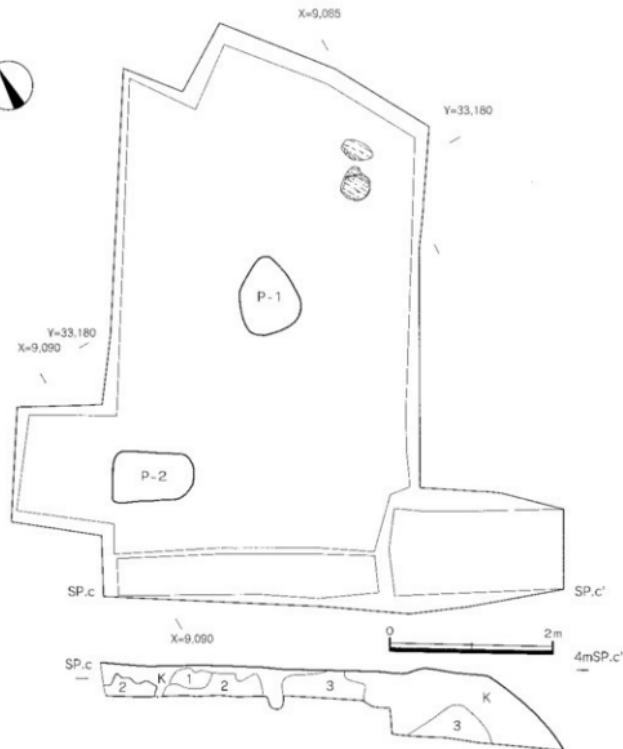
第1期土壌

第4章第2節において第Ⅱ期とした盛土で構築されているもので、今回確認された中では最も古い時期の土壌である。土壌の規模は高さ約1.5m（濠側から見た場合約2.5m）、天場幅約2m、基底部幅5mで、



第11図 北区北壁土層断面図

1. 盆土
2. アブライトブロック
3. 滅魔褐色土 (7.5YR 2/3) 締まり強い。
4. 喜潤色土 (7.5YR 3/4) 洗十粒少量、鰐歯鉄鉱少量、締まり普通。
5. 引褐色土 (7.5YR 3/2) 瓦片、砂礫片多量、締まり普通。
6. 黒褐色土 (7.5YR 3/2) 開孔鉄鉱少量、締まり普通。
7. 喜潤色土 (7.5YR 3-3) 灰化物微少、ローム粒少少、褐鐵鉄鉱少量、締まり普通。
8. 黄褐色砂層
9. 棕褐色土 (7.5YR 4/3) 鵠歯鉄鉄鉱中量、砂中域、締まり強い。
10. 雜混入砂等



1. 黑褐色土 (10YR 2/3) 鵠歯鉄鉱を少量含む、締まり普通。
2. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 鵠歯鉄鉱、灰化物粒中量含む、締まり強い。
3. 黑褐色土 (10YR 2/3) 鵠歯鉄鉱を少量含む、締まり弱い。

第12図 土壌上面の遺構配置図 (南区及び南区西壁土層断面図)



第13図 土塁上面の遺構配置図（北区）

形状は断面台形である。土壙の傾斜は外側が約40度、内側が約30度である。なお、完全な断ち割りではないため上壙外側（濠側）については未確認ではあるが、濠側土層との土質の違いや傾斜角度より推定すると、今回の調査範囲が概ね各期共通の土壙外側に該当するのではないかと推定される。この面に属する遺構としては断面に観察されたPitがあるが、第2期土壙構築までには埋め戻されていたと考えられる。

第2期土壙

同じく第III期とした盛土で構築されているものである。土壙は高さについては第1期と概ね変わらず、内側に盛土をすることによって天場の幅を約1.5m拡大して約3.5mに、基底部幅を約0.5m拡大して約5.5mにしたものである。形状は同じく断面台形であるが、内側の傾斜は約50度強になっている。これは前述のとおり土壙を削り出したために生じたものと考えられ、その点からみれば、当該期の本来の土壙はもう少し幅があった可能性も考えられる。なお、この面に属する遺構は検出されなかった。

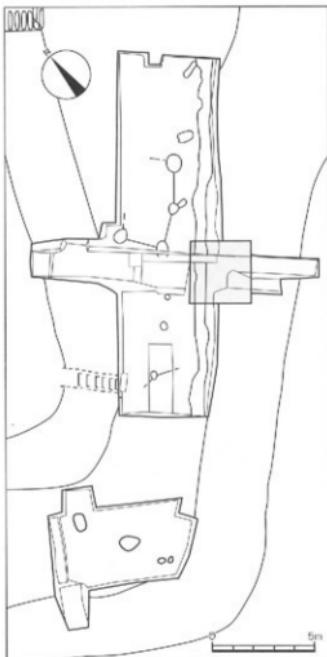
第3期土壙

同じく第IV期とした盛土で構築されているものである。土壙は高さについては第1期・第2期と概ね変わらず、内側に更に盛土をすることによって天場の幅を約12m拡大して約4.7mに、基底部幅を約2m拡大して約7.5mにしたものである。形状は同じく断面台形であるが、内側基底部はやや裾広がりになっている。傾斜については、内側は基底部付近では傾斜が緩やかで約20度であるが、その上からは急になって約50度近くになっている。この途中で傾斜が変わる理由は不明であるが、第2期土壙のように削り出したものではないと考えられるため、当初から積まれたものではないかと推定される。なお、この面に属する遺構は検出されなかった。

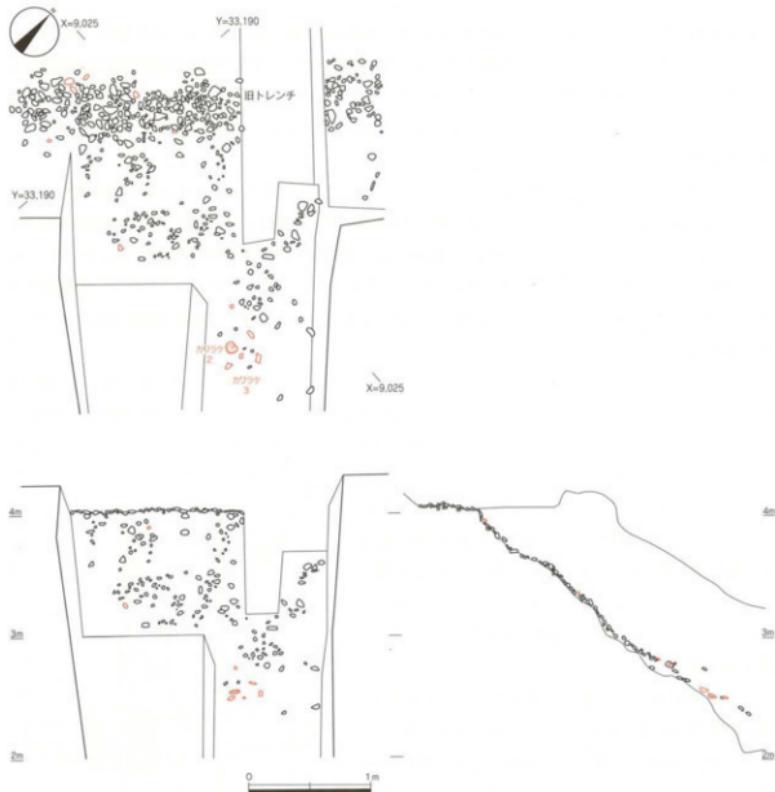
第4期土壙

同じく第V期とした盛土で構成されているもので、最終構築期の土壙である。土壙は一回り大きくなっている。高さが約1.4m増して約2.3m（濠側から見た場合約3.3m）になっている。土壙の天場幅は約4.5m、基底部幅は内側基底部先端が攪乱のため判然としないものの、約9m位と推定される。形状は断面台形で、土壙の傾斜は外側が第1期と同じく約40度、内側も約40度である。なお、この面に属する遺構として塙跡《SAH》および建物跡《SB-1》が検出されている。

なお、本期の土壙に伴う特徴的な遺構として、土壙外側上部で検出された斜面の葺石状遺構がある。これはトレンチ内の外（濠）側斜面、標高約2.5m付近から土壙天場までにかけて検出されたもので、一部に崩落や脱落があるものの、確認される部分では握り拳大の円錐を土壙の斜面に一面に貼り付けた、いわば古墳に見られる「葺石」である。葺石面の斜面上端部は確認



第14図 土壙葺石状遺構確認場所



第15図 土塁葺石状遺構平面・見通・断面図

された堀跡の基礎石敷に一体的に接続しており、整備計画が堀と一体のもので、施工時期も同一であったことを物語っている。今回確認された葺石面の幅は土塁トレンチの幅約2m分であるが、北区内で堀跡が確認された部分の土塁外側をピンポールを用いて探査してみたところ地下に手ごたえが感じられるので、この堀跡が確認された部分については、斜面に何らかの形で葺石が遺存している可能性が推定される。ちなみに土塁内側や外側下部では、葺石面はおろか円碟も確認することが出来ないので、あくまでも葺石面が存在するは土塁濠側の上部だけなのである。

なお、北区においてこの葺石状遺構が確認されたことから南区においても濠側に拡張区を設けて検出に努めたが、いくつかの円碟は出土したものの、攪乱等のため今回の調査区内では遺構としての葺石面を検出することはできなかった。

この時期の土塁からの遺物としては、土塁上面天場の表層及び表層下より大量の瓦片（第21～44図）

などが出土している。また斜面の葺石面直上からかわらけ（第45図-2・3）および瓦片（第34図-80）が出土している。

2. 堀跡《SAH》（第13・16・17・図、図版1～6）

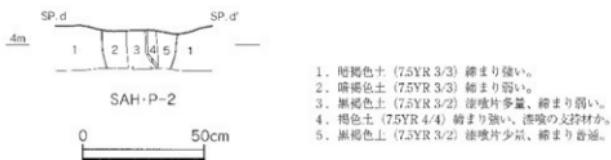
調査区北区の第4期土壙上面天場の濠側から、円礫を帯状に幅約60cm程度敷き詰めた遺構が検出された。検出された遺構の長さは調査区を南北に継断する約17.5m分であるが、状況的に本来は両側とも調査区外に延びているものと推定される。遺構のレベルは調査区北側の東縁側が最も高く、土壙の天場とともに南側に次第に低くなってしまい、約30cmほどの比高差がある。なお、検出されている部分については段差および急な角度変換点等は確認されず、あくまでも土壙と共に全体に緩やかな南下がりの傾斜を有している。

この帶状の石敷遺構の構造は、約5～10cm程度の小型の円礫を主とし間に細かい砂を含んだもので硬く締まっているが、層位的な厚さはあまりなく、平面精査および断面観察とも掘り込み等は確認できなかったことから、この遺構の構築は主として円礫を敷いて掏き固めたものであり、地業の掘り込み等は非常に浅かったか、あるいは存在していなかったものと推定される。なお、土壙トレンチ内で検出された部分については、前述のとおり濠側斜面の葺石状遺構と一体化していることが確認されている。

古絵図等の史料によれば、土壙上のこの場所には狭間のある白壁状の堀が表現されていることから、この遺構は堀に伴う基礎地業と推定することが可能である。平面的に見ると全体としては土壙に平行に概ね直線的に通っているが、細部を注意してみると約160度程度屈折している場所が約8m毎に2ヶ所存在しているのが分かる。これは堀における「折れ」と推定される。また、N1・2区においてはこの堀基礎と考えられる石敷から約1m帯状に短い石敷が突出している部分が2ヶ所ほど検出されたが、これは堀を支えるための「控堀」であろうと推定される。また、同様にN3・4区からは石敷の脇から3ヶ所ほどPitが検出され、同じく堀を支えるための「控柱」であろうと推定される。特にP-2においては厚さ約5mmの板状の漆喰が、あたかも約10cmほどの角柱を被覆していたかのように検出されている（第16図及び写真図版4-2参照）。なお、この角柱状の漆喰の痕跡は濠側に約20度傾斜をもっているので、この控柱は土壙に垂直ではなく、堀側にやや斜めに設置されていた可能性が考えられる。各Pitの規模等については次のとおり。

- P-1 長軸0.6m×短軸0.6m×深さ0.4m。覆土：2層に分層可能。
- P-2 長軸0.25m×短軸0.2m×深さ0.15m。覆土：4層に分層可能。
- P-3 長軸0.3m×短軸0.25m。（確認のみ）。覆土に漆喰を含む。
- P-4 長軸0.3m×短軸0.2m。（確認のみ）。

各控堀及びPit間の距離は、控堀1（北側）～2（南側）間が約2.5m、控堀2～P-1間が約2.4m、P-1～2間が約3m、P-2～3間が約1m、P-3～4間約1.6mで、やや不揃いである。なお、控堀・



第16図 SAH・P-2（控柱）土層断面図

柱とも塀本体に直角に取り付けられているのが構造上一般的であるが、北側の控堀1のみ塀との取り付けが直角ではなく約40度の鋭角になっている。これは控堀1より調査区北側東槽に延びる部分の塀の角度に取り付けを合わせたためと考えられ、事実調査区北端においては石敷が内側に屈折しているように見える。

今回の調査で確認された本遺構の遺存状態については、上記のとおり東槽側の調査区北側では非常に良好であったが、南側のN4区においては遺構面流失のためか北側に比べると遺存状況が良くなかった。続く南区でも擾乱などのため本遺構を検出することが出来なかったことから、今回の調査では塀の角部および櫓門側の遺構の状況については不明である。ただし、南区の土壘角部付近より原位置は動いていると推定されるもののホルンフェルスの板石が1枚検出されていることから、このような板石が塀の礎石として石敷の上に設置されていた可能性も想定される。

遺物としては、砥石（第55図-1）がN3区から円錐と共に石敷に充填された状態で出土したほか、瓦片などが遺構直上及び周辺から出土している。また青磁角皿（第54図-1）がN1区の石敷直上から出土しているが、石敷混入ではなく本遺構廃絶後のものと考えられる。

3. 建物跡《SB-1》（第13・17・18図、図版5・6）

塀基礎と推定される石敷遺構の西側、N2・3区に渡って建物跡1棟を検出した。建物跡の規模は南北2間、東西1間となる様だが、確認した地業はP1からP4まででP5は検出できず、北西角に位置したであろう柱基礎（P6）は現代（昭和30～40年台頃か）に大きな擾乱坑が掘られてしまい、失われてしまっていた。この擾乱坑は、他の検出された柱基礎から予測される基礎地業の規模を大きく上回る物で、精査したものの掘り方底面すら遺存していなかった。東側の地業列（P1～P3）を観察すると、直線状には並ばずP2の位置がやや石敷よりにずれていたので、確認できなかったP5の位置も調査区西壁より更に西側にあった可能性も考えられる。以下検出された各地業の規模と覆土の様相を記す。建物跡の主軸方位は土壘の主軸とほぼ同じで、N=43°-Eである。

P-1 長軸0.95m×短軸0.8m×深さ0.65m。底面の小ピット長軸0.3m×短軸0.2m×深さ0.15m。

覆土：6層に分層可能。6層は砂疊ブロックで縛まりはきわめて強い。

P-2 長軸6.5m×短軸0.55m×深さ0.8m。

覆土：5層に分層可能。4層は砂疊ブロックで硬化している。底面は硬化していた。

P-3 長軸0.6m×短軸1m×深さ0.5m。底面の小ピット長軸0.3m×短軸1m×深さ0.15m。

覆土：3層に分層可能。底面の第3層は砂疊を多量に含むが縛まりにかけている。地業坑底面は非常に硬化していた。

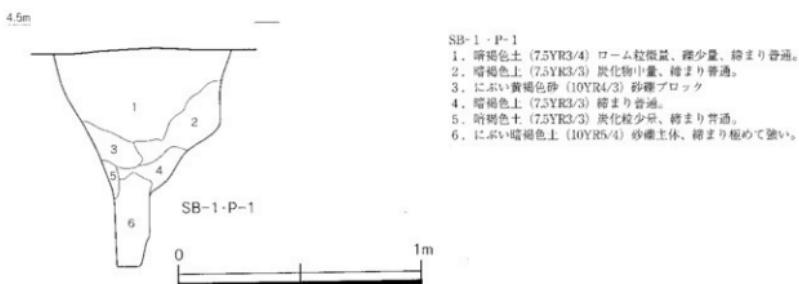
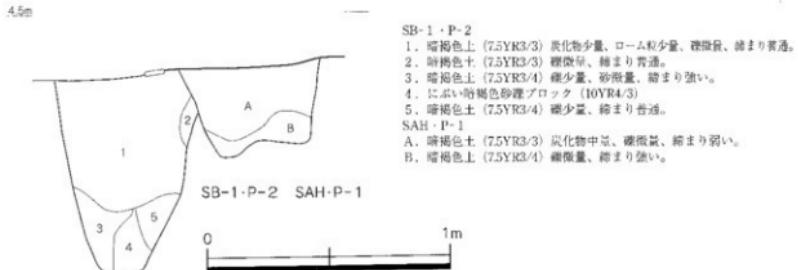
P-4 長軸0.6m×短軸0.7m。（確認のみ）

柱间距離は、P1-P2間が約2.3m、P2-P3間が約2.3m、P3-P4間が約2.2mである。いずれの地業もあまり遺存状態が良好であるとはいせず、最下層の砂疊ブロックや底面などは固く縛まっているものの、そこから上部についてはあまり強い縛りもない層となっている。柱痕なども検出できず、どちらかといえば何らかの理由で地業が振り返されている感じさえ受ける。

土浦城の古絵図などをみると、この建物跡付近には鐘楼が描かれていることから、この検出された建物跡は鐘楼跡であるものと考えられる。ただし、神戸信俊氏によれば鐘楼は掘立柱建物ではなく礎石建築であると指摘されているため、この遺構の状態から見れば、建物撤去後に何らかの理由で礎石

はもちろん下の地業まで撤去（破壊）が及んだ可能性が考えられる。

この遺構付近では、瓦片が地業覆土の確認面を中心に検出された。



4. その他の遺構（第12図、図版8）

今回の調査では上塁上面より前述の堀跡、建物跡のほかにもいくつかのPitなどが検出されている。これらははらかの構造物の基礎地業跡と推定されるが、堀に付随するものであるか、それとも別の建物等を構成するのか不明である。以下にその遺構の概要を示す。

P-1：調査区南区で検出されたもので、規模は長軸0.95m×短軸0.75m×深さ0.4mである。基礎地業の可能性が想定されるが、攪乱を受けしており、詳細は不明。

P-2：同じく調査区南区で検出されたもので、規模は長軸1m×短軸0.6mである。（確認のみ）掘り方のなかに円礫が充填されているので、礎石構造物の基礎地業の可能性が想定される。ただしこの位置に建物等の存在を示した史料がなく、また場所的にも別に建物が建つだけの面積もないことから遺構の性格は不明である。

5. 土壌上面の遺物出土状況（第19・20図・図版12）

今回の調査では、第4期土壌の上面天場から、各種瓦片を中心に金属製品、陶・磁器などが出土している。出土状況の特徴は次のとおりである。

瓦：今回の調査では合計約119.5kgの瓦が出土している（第2表）。出土層位は調査区北区・南区とも表層および遺構確認面が多い。いずれの瓦も細片であり、全体をうかがえるものは少ない。

調査区ごとに出土量を比べてみると、最も多いのは東槽近くのN1区及びN拡張区で、全体量の約33%を占めている。この部分では東槽近くに瓦溜状に集中して出土する部分が何ヶ所か存在している。それに対しN3・4区では約27%、南区でも23%と比較的多量の瓦が出土しているが、出土状況は比較的調査区全体に広範囲に広がっており、あまり集中するような状況は感じられない。また遺物の接合状況についてもN1区及びN拡張区は近隣の遺物同士が接合しているのに対し、N3・4区や南区はどちらかというと広範囲のものが接合している傾向がある。これは瓦の廃棄状況に起因するものと考えられる。なお中間のN2区は出土量が比較的少ない。

次に調査区別に出土する瓦の種類を比較してみたところ、調査区によって出土瓦の構成が変化する特徴が看取できる。まず北側のN1区では平瓦が全体の約48%、丸瓦が約40%を占め、板塀瓦は約12%しか出土していない。対照的に南区では平瓦が約29%、丸瓦が約18%であるのに対し、板塀瓦は約47%を占めている。これは各調査区で出土する瓦の供給先、いわば存在していた建物の屋根構造の違いを表しているものと考えられる。これらの比較は重量比較であり、本来は瓦枚数で比較しなければならないものではあるが、傾向としては面白い。なお、今回の出土瓦には極端に軒丸・軒平瓦が少ない。これも建てられた建物に起因するのであろう。

陶・磁器：北区・南区とも瓦などに混じって遺物が出土している。（第54図-2～12、第55図-3～6）いずれも小片であり、現地に投棄されたもの一部と考えられる。

金属製品：瓦などに混じって、N3・4区、南区の遺構確認面から寛永通寶（第56図-12）や一錢銅貨（第56図-13・14）などの銭貨が単独で出土している。遺棄または遺失されたものであろう。

（単位：kg/90° の角に限る）

出土地点	平瓦	丸瓦	板塀瓦	埴瓦・瓦斗瓦	備考
N拡張区	34.7	41	2.0/3	—	丸瓦に輪進丸を含む
N1区	14.4/29	11.8	3.5/2	—	
N2区	14/3	0.6	—	—	
N3区	0.3/1	—	—	—	
土壌トレンチ	7.7/16	1.6	1.9/2	0.5/4	
N3・4区	12.0/20	7.1	8.0/14	1.1/5	丸瓦に輪進丸を含む
N4区	2.1/6	1.1	1.0/0	—	
南区	8.0/15	5	13.2/16	1.8/13	丸瓦に輪進丸を含む
SAH	2.2/2	0.9	1.1/1	0.1/0	
SB-1	0.6/2	2.1	0.2/1	0.4/3	
合計	52.1/101	32.7	31.2/39	3.5/25	総計 119.5kg/165

第2表 瓦の種類別出土場所傾向（重量／角数）





第20図 南区土壙上面遺物出土状況図

第5章 出土遺物

第1節 瓦類

今回の調査で出土した遺物のうち最も大量に出土したのが瓦類である。今回確認された瓦には軒丸瓦・軒半瓦・丸瓦・平瓦・棟瓦・輪違瓦・板塀瓦がある。ほかには板塀瓦と組み合わされると考えられる板状の小型の瓦があり、板塀瓦とセットになる熨斗瓦（板塀熨斗瓦）と推定した。その他判断できないものなどは不明・特殊瓦として一括した。

1. 軒丸瓦（第21図-1～14・第22図22～26、図版13）

(1)・(2)は建物跡の基礎地業掘り方内から出土したもので、連珠文の一部である。(1)の瓦は製作に当たって使用された真土の部分で瓦当面が剥離している。(3)は土壘トレンチ中の濠側上層から出土したもので、剥離した周縁部の一部と考えられる。裏面には接合のために入れられた放射状の粗い刻み目が残っている。(4)はN1区の表層確認面から出土したもので、今回出土した軒丸瓦の中では最も状態が良好なものである。(5)・(7)も同じくN1区確認面から出土したもので、周縁部の一部である。(6)・(8)・(10)・(11)・(12)も周縁部から外区にかけての一部である。(6)と(8)はN1区の表層出土、(10)・(11)・(12)は土壘トレンチ内の旧トレンチ出土である。(9)もN1区の表層出土資料で、外区から珠文、巴の一部である。(13)・(14)はN3・4区の確認面から出土したもので、丸瓦部と瓦当部の接合部の破片と推定した。

(22)から(1)までは工事立会い時の出土資料である。(22)は98年度に出土したもので、丸瓦部にコビキ痕と粗めの布痕と3条の棒状圧痕がある。ほかに中段にも横に2条の圧痕がある。(22)も同じく98年度に東槽西側から出土したもので、瓦当部の破片である。(24)も98年度工事の二ノ丸外灯基礎の下層から出土したもので、同じく瓦当部である。(25)は99年度に二ノ丸仕切門前の濠埋土から出土したもので、瓦当部である。裏側の接合部には瓦当部と丸瓦部の接合のために施された5条の拗状工具による横目が比較的明瞭に観察できる。(26)は99年工事時に西槽南側土壘上から出土したもので、同じく瓦当部である。

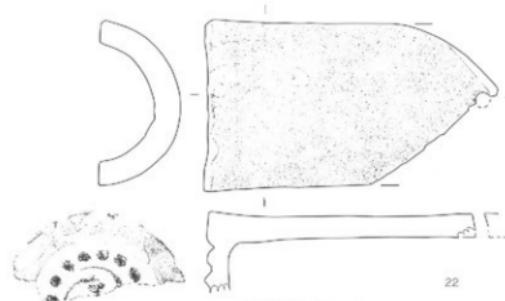
今回出土した軒丸瓦は以上のとおり細片が多く、年代・特徴的に詳しいことは判断し難いが、これらのうち(22)・(25)・(26)に代表される周縁幅が広くて内区が小さく、珠文が大きい形式のものは比較的新しい時期のものと推定される。

2. 軒平瓦（第21図-15～21、図版14）

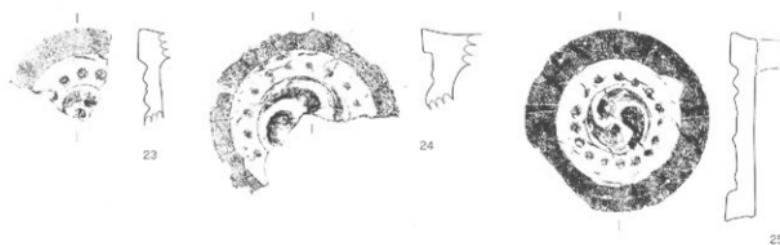
(15)は建物跡の基礎地業掘り方内から出土したものである。瓦当部の貼り付け部で脱落したもので、接合部には拗状工具による刺突痕が多数残っている。瓦当文様についての詳細は不明であるが、唐草の一部と思われる部分が遺存しており、今まで上浦城跡で確認されている文様ではない可能性がある。(16)はN1区上層から出土したもので、中心飾りが三葉文になる瓦の一部である。(17)はN3・4区の確認面から出土したもので、瓦当面の脱落した平瓦部と推定した。二次焼成を受けており、全体的に赤褐色に変色している。(18)はN拡張区確認面から出土したもので、平瓦部から脱落した瓦当部であ



第21図 出土瓦類実測図（1）軒丸・軒平瓦



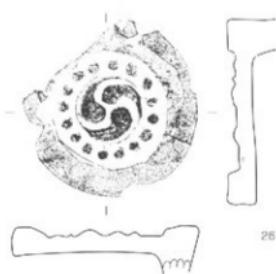
22



23

24

25



26

0 10cm

第22図 出土瓦類実測図（2）軒丸瓦

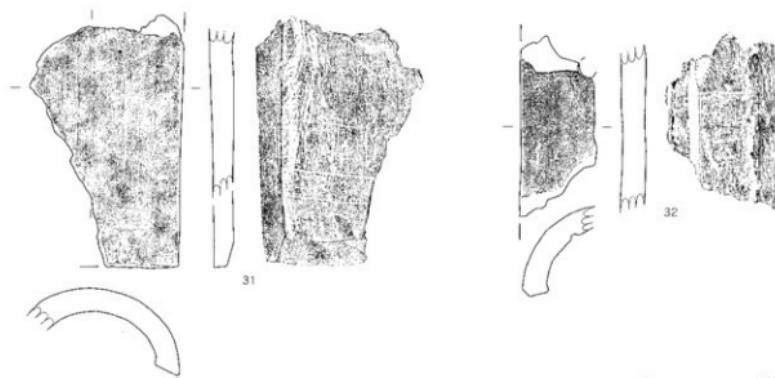
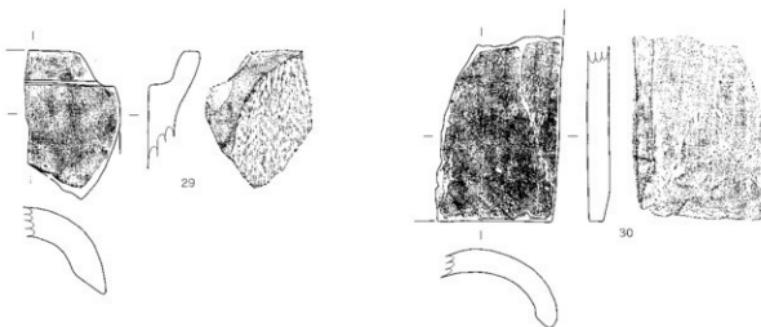
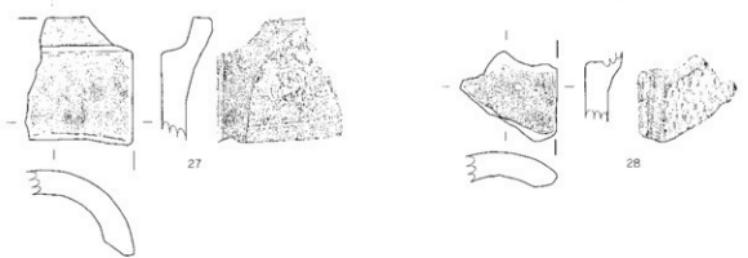
る。この文様は加藤氏分類のIAa類、金子氏分類のA種に分類される資料と考えられ、土浦城跡では初出である。

(19)から(21)までは工事立会い時の出土資料である。(19)・(20)は中心飾りが二葉文になる瓦の一部で、どちらも98年度の立会い時の資料である。(21)も98年度に東櫓周辺で出土したものである。江戸式の瓦当部の一部と考えられるが、瓦当文様から考えると軒平瓦ではなく軒棟瓦である可能性がある。

3. 丸瓦（第23～27図-27～51、図版15・16）

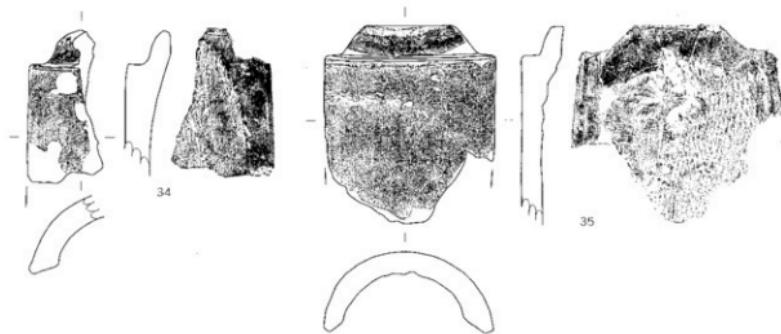
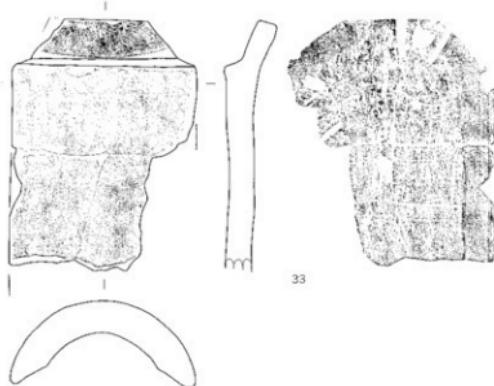
(27)・(28)は縁跡と考えられる石敷の直上から出土したもので、正縁部周辺の破片である。(29)・(30)は建物跡の基礎地盤掘り方内から出土したもので、(29)は正縁部周辺、(30)は筒部右隅である。(29)は表面の黒色処理が薄く、素地の浅黄色が表面にムラ状に見えている。(31)・(32)はN拡張区確認面から出土したもので、(31)は筒部右隅である。(32)には瓦を固定するための釘穴があり、筒部左側と推定した。また(33)もN拡張区表層から出土したもので、やや上反りが見られる。(34)～(42)はN1区上層・確認面から出土したもので、(34)～(37)は正縁部周辺、(38)～(42)は筒部である。(35)の内面中央部には棒状圧痕の代わりに太い繩状の圧痕があり、棒と同様の役割を繩によっても行った可能性が想定される。また(37)には瓦を固定するための釘穴が縫に2ヶ所存在している。(42)は他の瓦に比べ胎土が比較的砂粒質であることに加え、色調の赤味が強い特徴がある。ただし外面の黒色処理も残っている状態から見て二次焼成によるものではないようなので、焼成時の技術的なものではないかと考えられる。(43)～(47)はN3・4区上層・確認面から出土したもので、(44)・(45)は正縁部周辺、(43)・(46)・(47)は筒部である。(43)の内面には棒状圧痕のはかに直線状の細かい圧痕が縫に並んでおり、布の代わりに藁状のものを使用したものと考えられる。また(44)の内面も非常に凸凹が目立つが、布の皺であろう。(45)は前述の(42)と同様胎土に赤味があるが、胎土はより砂粒質で、焼成もやや軟質である。(48)はN4区確認面から出土した筒部である。二次焼成を受け全体が赤褐色に変色している。(49)・(50)は南区から出土したもので、(49)は正縁部周辺、(50)は筒部右隅である。(49)の内面には布状圧痕の内側に、横方向に幅2mm程度、長さ1cm程度の圧痕がいくつかあり、藁もしくは藁状のものの圧痕と推定される。また外面には縫方向に幅約1mmの浅い溝が、幅1.5cm程度の間隔で何本か見られる。外面調整時のものであろう。(50)の外面にも焼成前につけられた縫方向の疵状の痕があるが、内面の棒状圧痕で使用する工具を間違えて外面に付けた痕跡のように見える。(51)は98年度の工事立会い時に出土したもので、完存品である。内面にU字形の溝みがあるが、布の皺かと考えられる。また外面には調整時の面取りの痕がやや明瞭に見られる。

今回確認されている丸瓦も細片が多く全体を明らかにできるものは少ないが、筒部の端部調整について観察してみるといくつかの違いがあることがわかる。大別すると、端部を1回削って面取りしたもので、端部が鋭角であるもの(A)と、端部を2回削って面取りしたもので瓦の端部は鈍角の組み合わせになるもの(B)、端部を削り出した上でナデ調整し、端部に角を残さないもの(C)の3種類である。(A)のタイプのものとしては(29)・(31)・(37)・(40)・(42)・(44)・(45)・(50)があり、(B)のタイプのものとしては(27)・(28)・(32)・(35)・(39)・(41)・(46)・(47)・(48)・(49)・(51)が、(C)のタイプのものとしては(30)・(33)・(34)・(36)・(38)がそれぞれ該当する。またそ



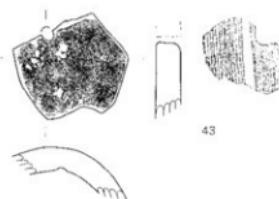
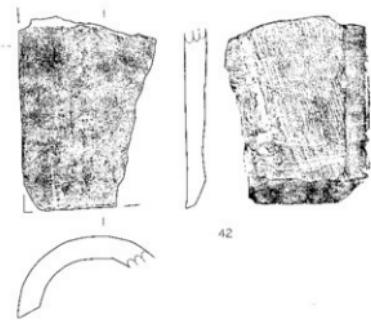
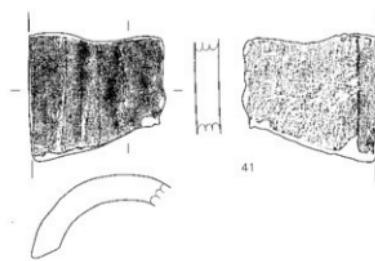
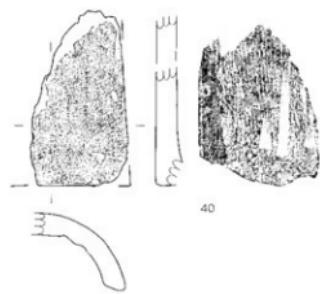
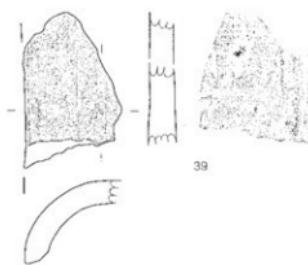
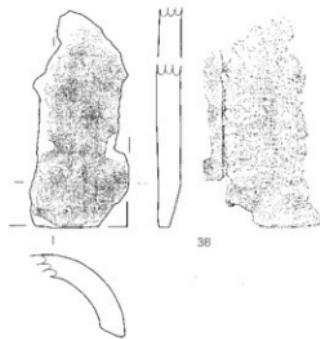
0 10cm

第23図 出土瓦類実測図 (3) 丸瓦 1



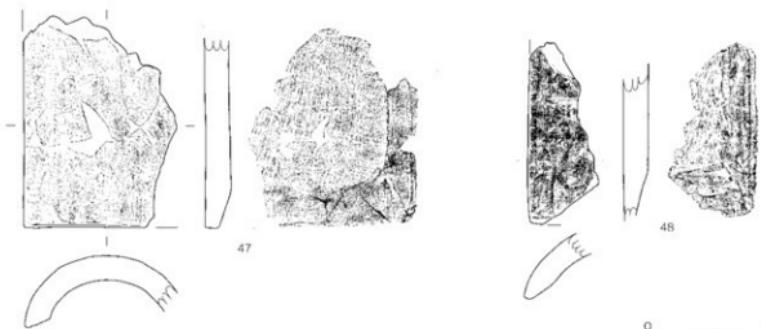
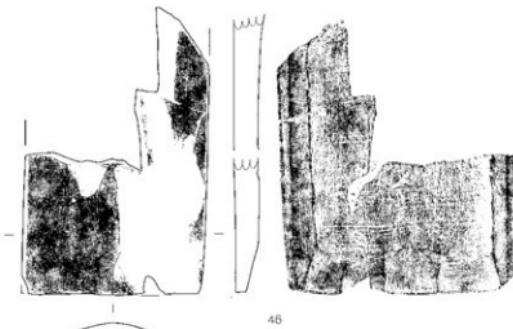
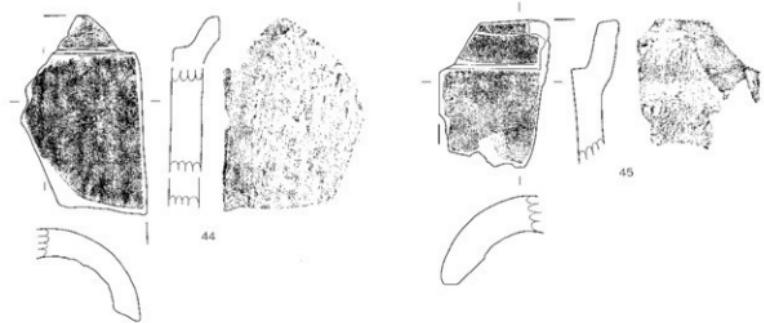
0 10cm

第24図 出土瓦類実測図 (4) 丸瓦 2



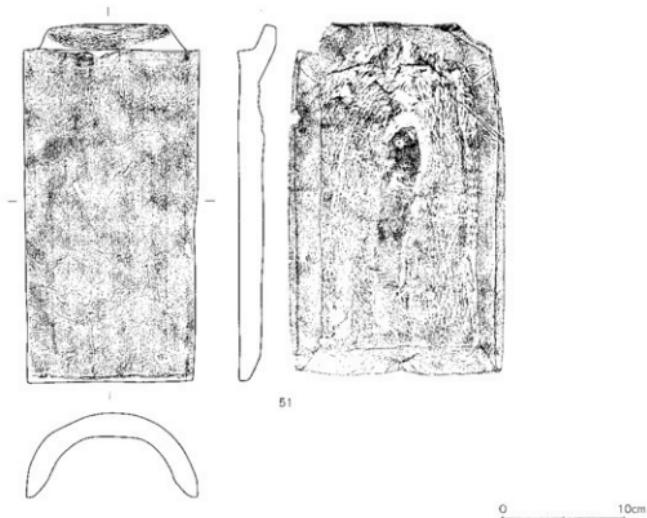
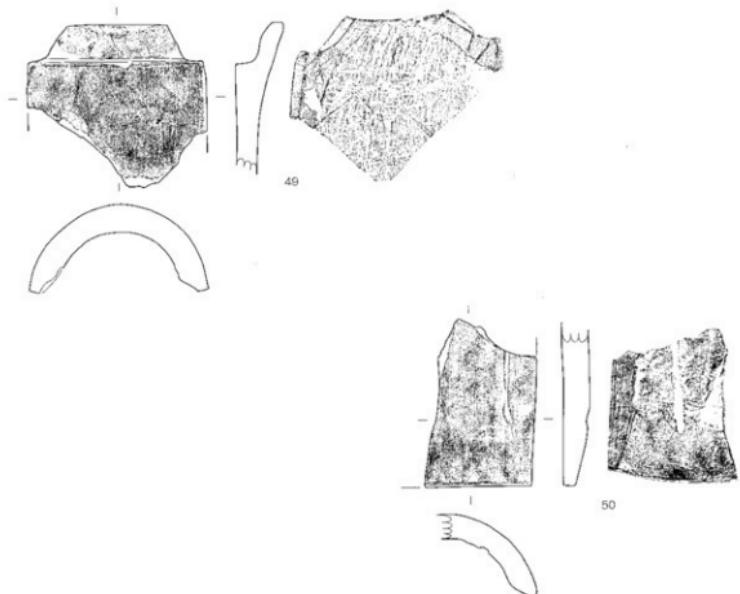
0 10cm

第25図 出土瓦類実測図（5）丸瓦 3



0 10cm

第26図 出土瓦類実測図 (6) 丸瓦 4



第27図 出土瓦類実測図 (7) 丸瓦 5

の他の特徴としては、内面の調整がコビキ痕をそのまま残すもの、布状圧痕を残すもの、棒状圧痕を残すものなどが見られるほか、いくつかのものでは製作者の指紋の痕跡も見つけることができる。

4. 平瓦（第28～30図-52～61、図版16）

平瓦については、出土量は多いものの細片が多く、特に特徴のない部位では棟瓦・板扉瓦との分類が困難であった。今回は分類に当たって瓦厚20mmを基準とし、それ以上は板扉瓦として区分し、また特徴の顕著なもののみを棟瓦として分類した。

(52)は建物跡の基礎地業掘り方内から出土したものである。右端に瓦の当たり痕跡と推定される幅約14cm程度の灰色の変色部が帯状に存在する。(53)・(54)・(56)はN3・4区上層・確認面から出土したものである。(53)は左下隅の破片であるが、瓦表面全体に歪みがある。(54)の表面中央部には瓦製作時についたと考えられる微小さな沈線が縱方向に存在する。熨斗瓦用の割り線の可能性もあるが、表裏が逆なので形成時につけられた疵であろう。(56)の裏面中央寄りには、焼きムラと考えられる変色部分がやや大きめに残っている。(55)は南区表層から出土したもので、小口面の破片である。端面に梢円内に『前澤』（左右逆なので、見た目には『澤前』）の刻印が存在する。焼成は他の平瓦に比べると非常に良好である。なおこの瓦については現存状況からとりあえず平瓦として分類したが、棟瓦である可能性も考えられる。

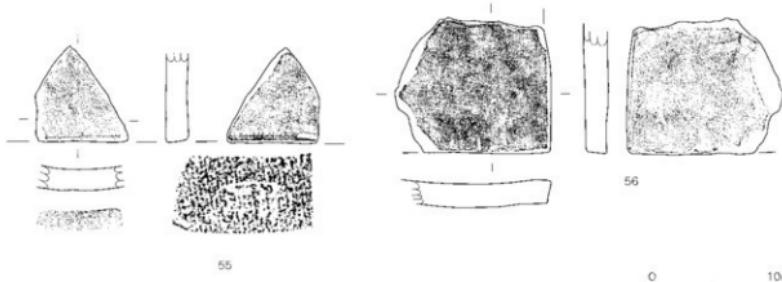
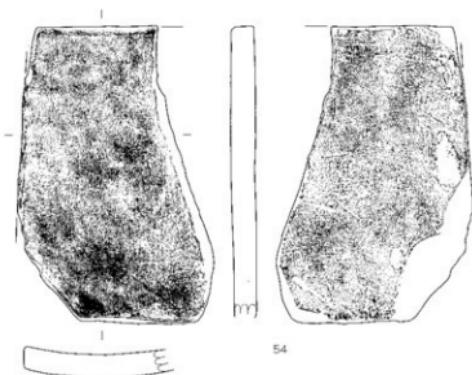
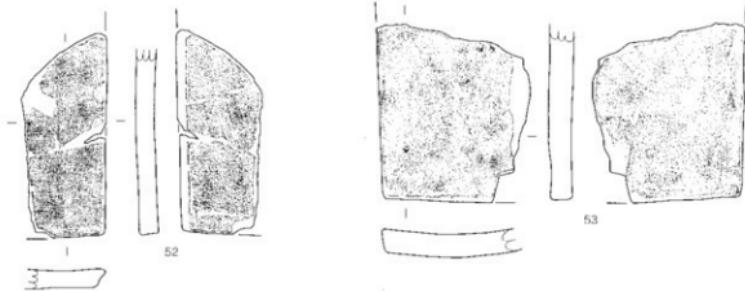
(57)～(61)までは工事立会い時の出土資料である。そのうち(57)・(58)・(60)・(61)は99年度の工事立会い時に本丸北東側の外灯周辺で出土したものである。(57)の表面中央下寄りには銷びた釘頭状の付着物がある。(58)の裏面には焼きムラと考えられる薄い変色部分が大きく広がっている。(60)の裏面尻側には緩い弧状を描く細い沈線が存在している。コビキ痕であろうか。また表中央部には縱方向の変色部分があり、瓦の当たり痕と考えられる。(61)の尻小口面にも(55)と同様の梢円内に『前澤』の刻印が存在する。(60)は同じく99年度の工事立会い時に、西櫓西南側の斜面から出土した資料である。全体がぶい橙色を呈しているが内外面とも均質なので、二次焼成を受けたものではなく、製作時の焼成不良である可能性が想定される。

5. 棟瓦（第31・32図-63～72、図版14）

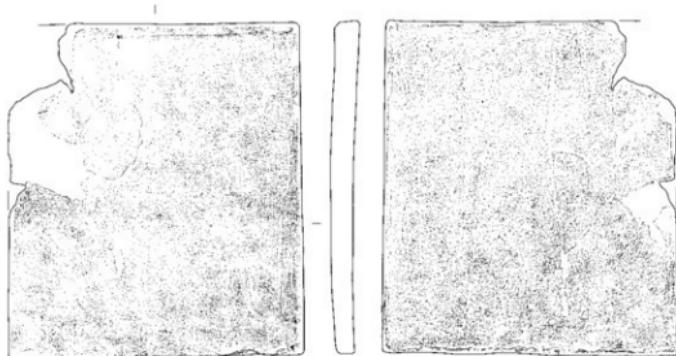
今回の資料については、出土した細片を平瓦と棟瓦を区別することは事实上不可能である。そこで、棟部の屈曲が確認できたもの及び櫛目のあるものを棟瓦として報告する。

(63)・(66)・(69)・(70)はN1区表層から出土したものである。(63)は尻の切り込みの一部が遺存していることから、通常の右棟瓦と考えられる。(66)は頭もしくは尻部の破片である。裏面に5条の櫛状工具による櫛目が緩い弧状に施されている。(69)は谷部の破片で、6条以上の櫛状工具による櫛目が強めの弧を描くように施されている。(70)は差込部の破片で、10条の櫛状工具による櫛目が緩い弧状に施されている。(65)はN3・4区確認面から出土したもので、棟部である。(64)・(67)は土塙トレンチ内の旧トレンチ埋土から出土したもので、(64)は棟部、(67)は頭もしくは尻部の破片である。(67)の裏面には19条の櫛状工具による櫛目が直線的に施されている。

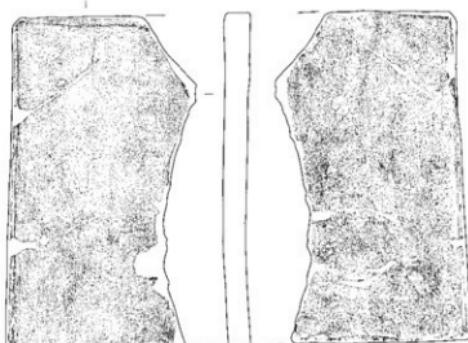
(68)・(71)・(72)は工事立会い時の出土資料である。(68)は98年度の出土資料で、裏面に14条の櫛状工具による櫛目が波型に施されている。なお櫛目の位置を頭部側と推定したため、この瓦について



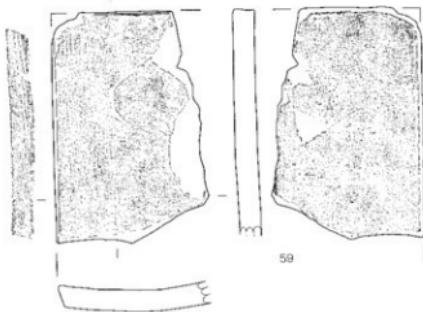
第28図 出土瓦類実測図 (8) 平瓦 1



57



58

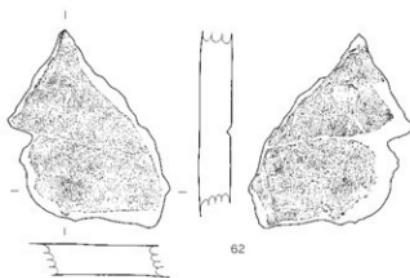
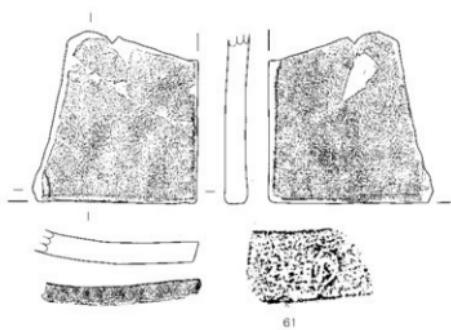
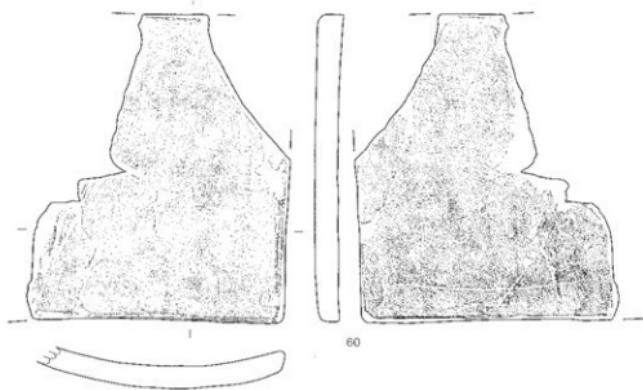


59



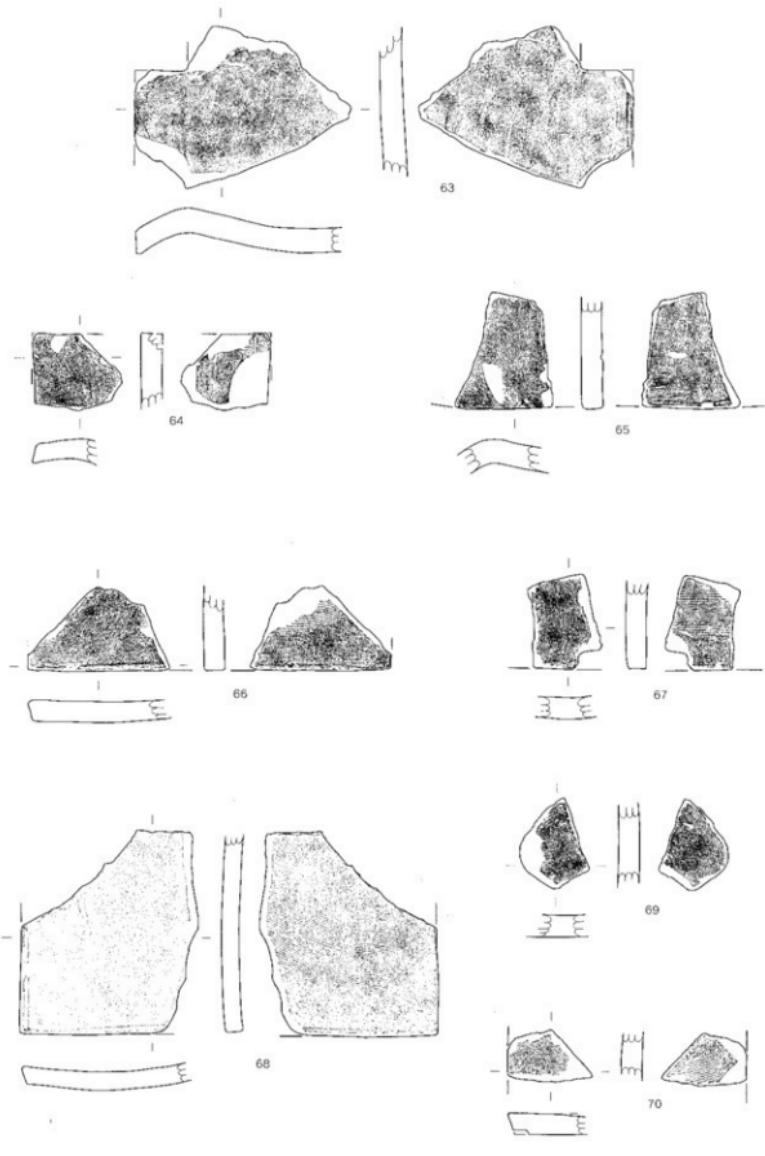
10cm

第29図 出土瓦類実測図（9）平瓦 2

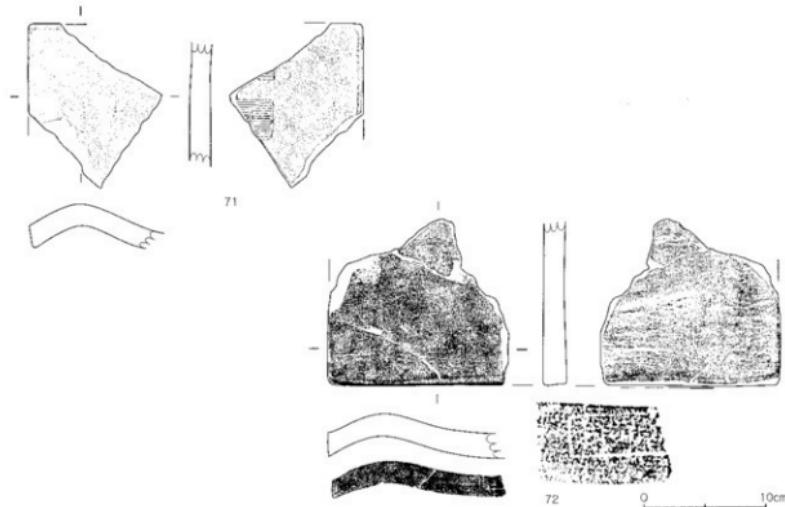


0 10cm

第30図 出土瓦類実測図 (10) 平瓦 3



第31図 出土瓦類実測図 (11) 棚瓦 1

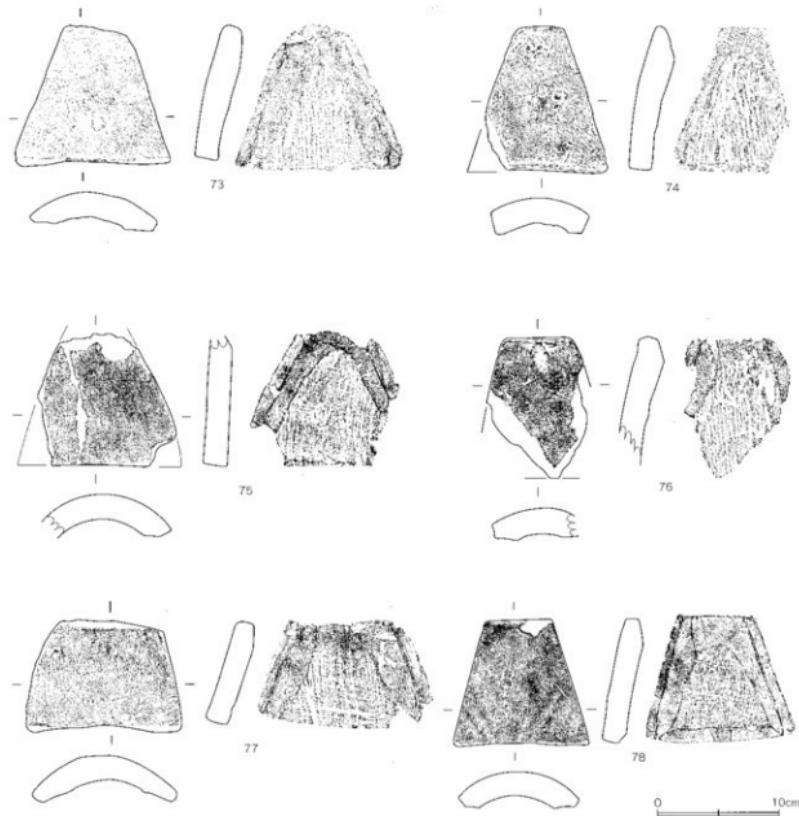


第32図 出土瓦類実測図 (12) 棱瓦 2

は左棟瓦として図化している。(71)も98年度に東櫓近くの照明灯基礎から出土したもので、棟部の破片である。裏面に15条の直線的な横目があるが、櫛状工具ではなく型押しによって付けられたものと考えられる。(72)は99年度の出土資料で、本丸北東側の外灯周辺で出土した棟部である。裏面には瓦の形成時につけた疵が明瞭に残っている。また端面には四角内に『松瓦□』の刻印が残されている。この刻印については土浦城跡では他には確認されておらず、初見のものである。

6. 輪違瓦 (第33図-73~78、図版17)

輪違瓦は、組棟の熨斗瓦の間に組み込まれる棟込瓦の一種である。(73)・(74)はN拡張区の表層から出土したものである。(73)完存品であるが、表面が灰色を呈しており焼成時の黒色処理が不十分だったと推定される。(74)は頭部側の表面側縁部に灰色の変色部分が存在する。焼成時のものであろう。(75)はN1区表層から出土したもので、比較的焼成が良く、面取りも非常に硬い感じを受ける仕上げをしている。(76)はN3・4区から出土したもので、長石などを多く含む粗い感じの胎土をしている。(77)は南区から出土した完存品で、今回出土した輪違瓦の中では最も幅広の形態をしているものである。色調が全体に灰色で、当初から黒色処理がされていなかったものと推定される。(78)は99年度の工事立会い時に西櫓南側から出土したものではほぼ完存品である。この瓦は、頭部の調整が他の輪違瓦では切り離しのみであるに対し、裏側を1回面取りしているという細かな差異がある。また両端部もやや丸く調整されているなど、やや全体に仕上げが細かい感を受ける。



第33図 出土瓦類実測図 (13) 輪連瓦

7. 板堀瓦 (第30図-62・第34~40図-79~110、図版18・19)

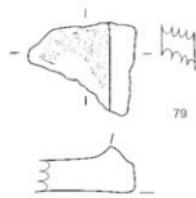
板堀瓦は1988年の調査時にも出土しているが、今回の調査では目的の1つとして堀造構の確認及び復元のための資料収集が挙げられていたため、特に注意して選別を実施した。

(79)は、N3区の堀跡石敷直上から出土したもので、棟部と平瓦部をつなぐ屈折部の破片である。全体が摩滅気味で、瓦の表裏とも表面の黒色部がほとんどなく灰白色になっている。瓦内部には暗灰色の生焼け状の部分がサンドイッチ状に広がっており、焼成上の技術的な問題と考えられる。(80)は土堀トレチ内の中側土層から出土した同じく屈折部である。この瓦は胎土が非常に砂粒質をしている。(81)はN拡張区確認面から出土したもので、棟部が剥離した平瓦部である。この瓦も胎土が砂粒

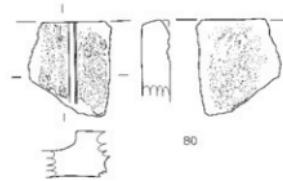
質である。剥離した接合部には4条以上の櫛状工具による櫛目が観察できるが、櫛目の入れ方が瓦に並行ではなく、やや斜めに入れられている。

(82)～(84)はN1区から出土したもので、(82)・(84)は棟部の剥離した平瓦部、(83)は棟部から屈折部の破片である。(82)の胎土も砂粒質で、接合部には4条の櫛状工具による櫛目がある。櫛目は棟瓦の櫛目のように同じ力で一様に引かれたものではなく、約3cm毎に力を入れ直したように深く入っている部分がある。(83)の胎土は(82)などのような砂粒質ではないが、(79)などのような細かいものでもなく、中間的な様相をしている。接合部の断面を観察すると、4条の櫛状工具による櫛目の痕が確認できる。棟部の裏側には接合部からはみ出した櫛目もあり、製作時はやや多めに櫛目を入れられていたことも考えられる。(84)は胎土などの特徴的には(79)と類似したものである。(85)はN2区表層から出土した平瓦部の接合部である。棟の剥離部にはV字状のやや細めで深い4条の櫛状工具による櫛目が存在する。(86)はN拡張区およびN1区の接合資料で、今回出土した板塀瓦の中では最も全体を窺うことのできる資料である。瓦は左棟で、全長約35cm、幅約31.5cmを測る大型の瓦である。頭部側には表面の方がやや大きい逆円錐形の釘穴が現在1ヶ所確認できるが、場所から考えると本來は頭部側に2ヶ所開けられていたものと推定される。また棟部の側面には平瓦などで確認されたものと同じ「前澤」の刻印が存在している。この瓦と88年に確認されている板塀瓦を比べた場合、まず、平瓦部の棟轆と重なる部分に88年出土のものは水切りと推定される大きなV字溝が存在しているが、この個体では確認できること、また、裏側の滑り止めと考えられる大きな突出部もこの個体では確認できること、棟部の接合部の断面形状が88年出土のものは平瓦部に向かってややなだらかなに対し、この個体ではほぼ直角になっているなどの差異が存在する。また胎土も緻密で焼成も硬質である。

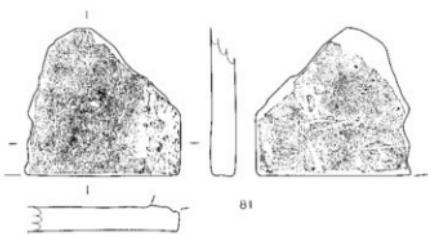
(87)・(88)・(90)～(94)はN3・4区確認面から、(89)はN4区確認面から出土したものである。(87)は平瓦部の破片で、釘穴の位置から頭部と推定した。2ヶ所の釘穴のうち1ヶ所には釘が部分的にまだ遺存しており、板塀瓦と塀本体の固定については釘が用いられていたことが分かる。また裏側に径約1cm弱の鉄銷が付着しており、塀本体で使用されていた鉄製品(釘)の痕跡の可能性が考えられる。その他としては表面に対して裏側の仕上げが粗雑であることが特徴である。(88)は棟部で、遺存している釘穴の位置から見て左棟と推定した。胎土は(79)と同様の特徴をもつもので、同じく中央部に大きく生焼けの部分を有している。また表面が風化気味な点も類似している。(89)は平瓦部で、釘穴の位置から頭部と推定した。瓦の釘穴にはまだ一部釘が付着した状態で遺存しており、瓦を塀に固定するために釘穴一杯の太日の釘を使用していたことがわかる。(90)は平瓦部で、わずかに釘穴が遺存していることから頭部であることが分かる。また左側面もわずかに残っていることから右棟と推定される。頭部裏面端部に鉄銷痕跡があり、(87)同様塀本体の釘痕と考えられる。また同じ端面に製作時に付いた凹みが存在する。(91)は棟部で、わずかに釘穴が遺存していることから右棟と推定した。断面には棟部と平瓦部を接合させるために付けられた櫛目が観察できる。棟部の裏側にもはみ出した櫛目が1条残っている。(92)も棟部である。図上は右棟としているが、釘穴などは残っていないので左棟である可能性もある。全体につくりがシャープで、焼成も良好である。またこの瓦についててはやや上反がある点が他の瓦と異なる特徴である。(93)は平瓦部である。図上は右棟としているが、釘穴などが残っていないので左棟の可能性もある。端部には棟部と重なる部分に設けられた水切り溝と推定されるV字状の大きな溝が存在する。(94)は平瓦部で、あまり遺存状態の良いものではないが、丁



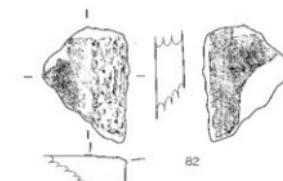
79



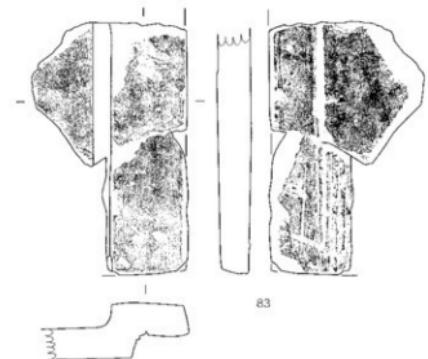
80



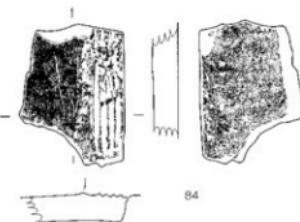
81



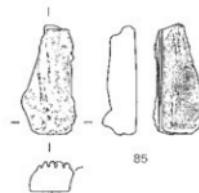
82



83



84



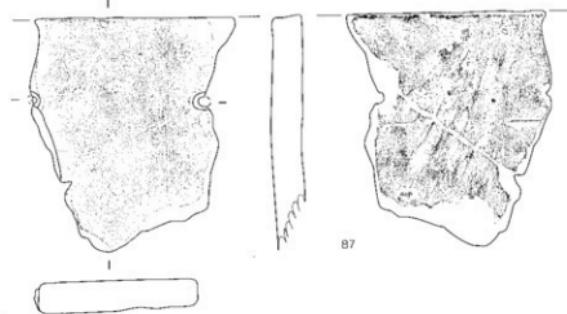
85

0 10cm

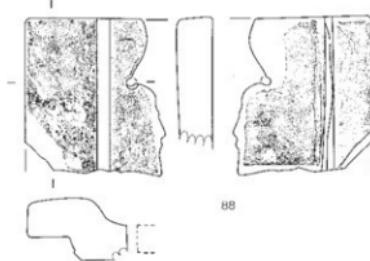
第34図 出土瓦類実測図 (14) 板塙瓦 1



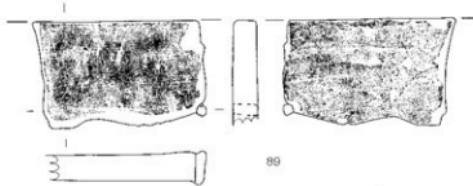
第35図 出土瓦類実測図（15）板塙瓦 2



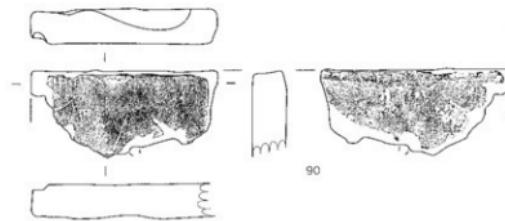
87



88



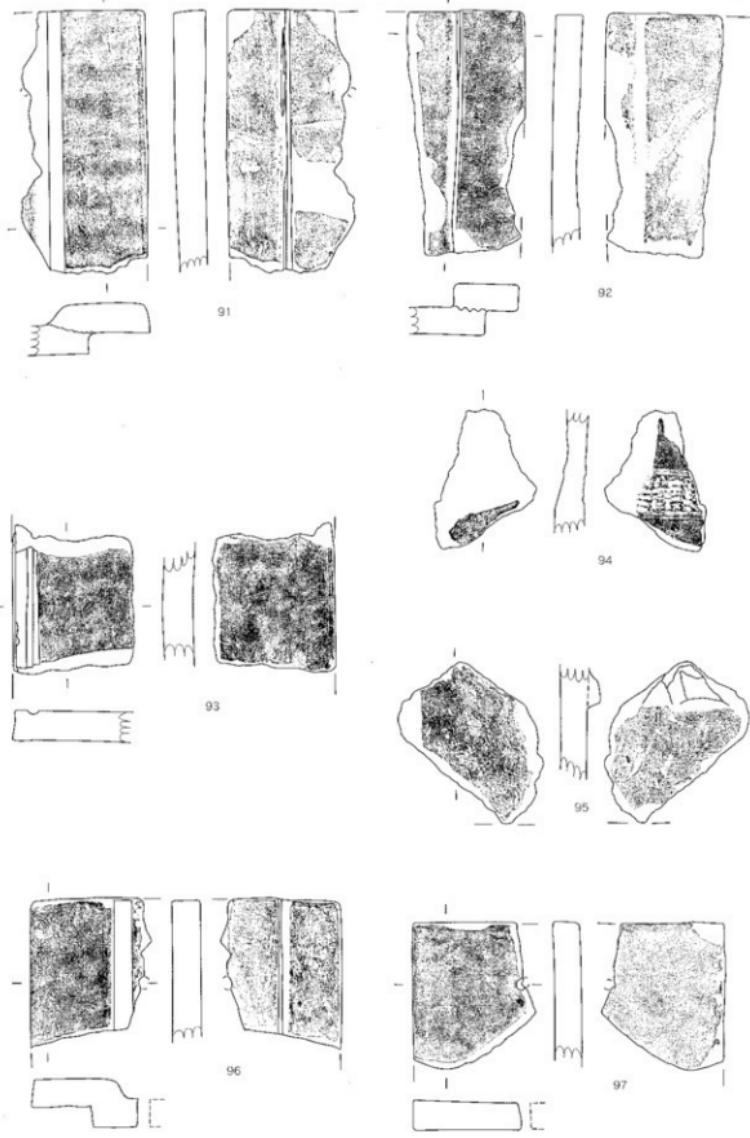
89



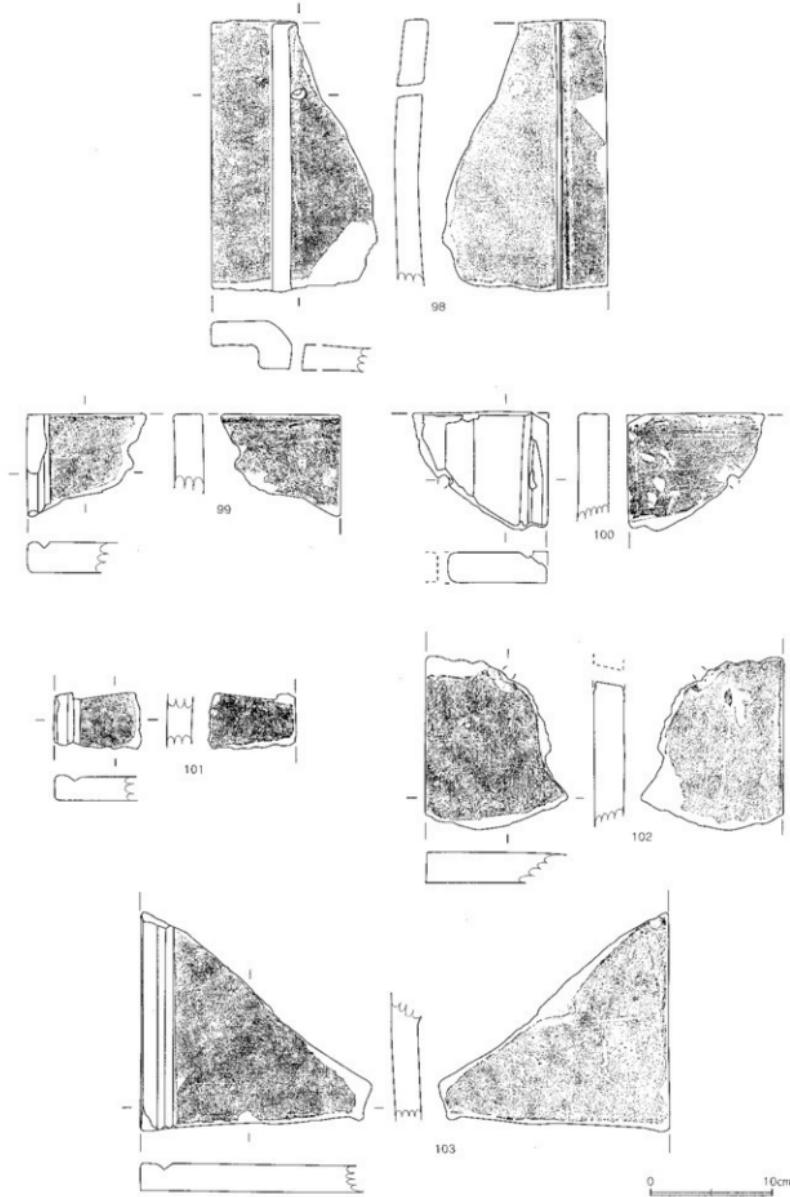
90

0 10cm

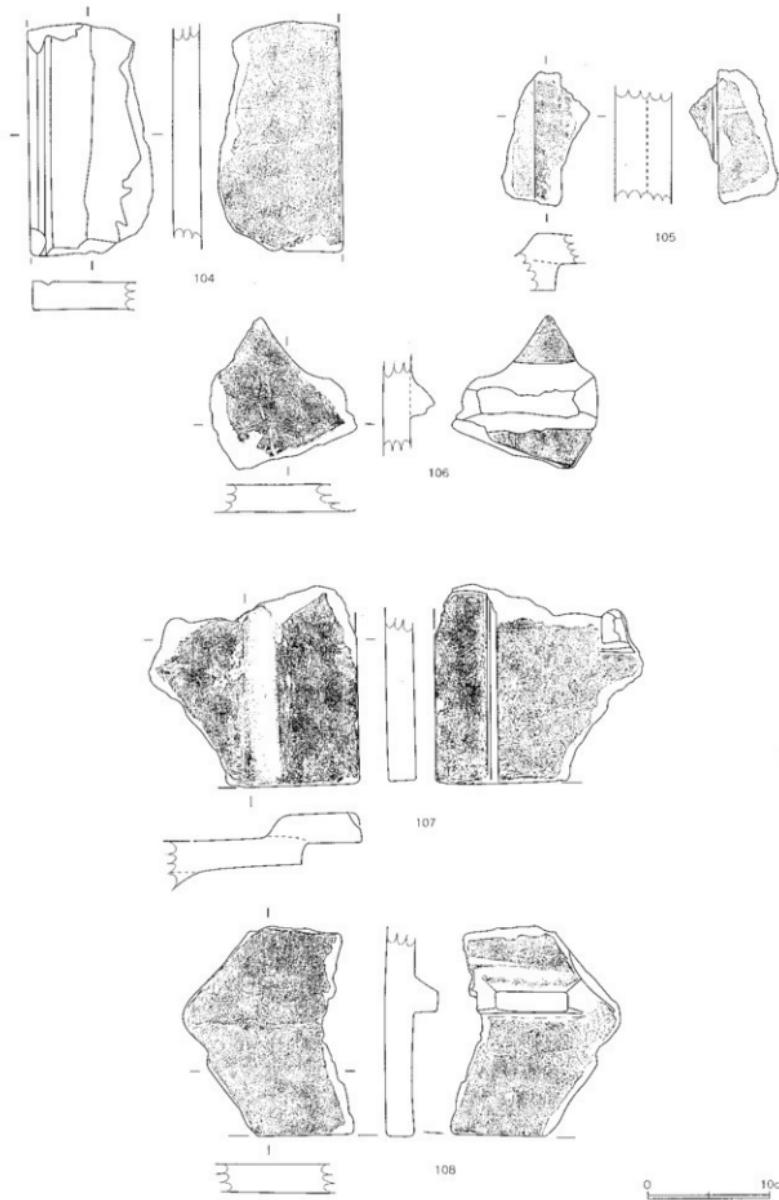
第36図 出土瓦類実測図 (16) 板堀瓦 3



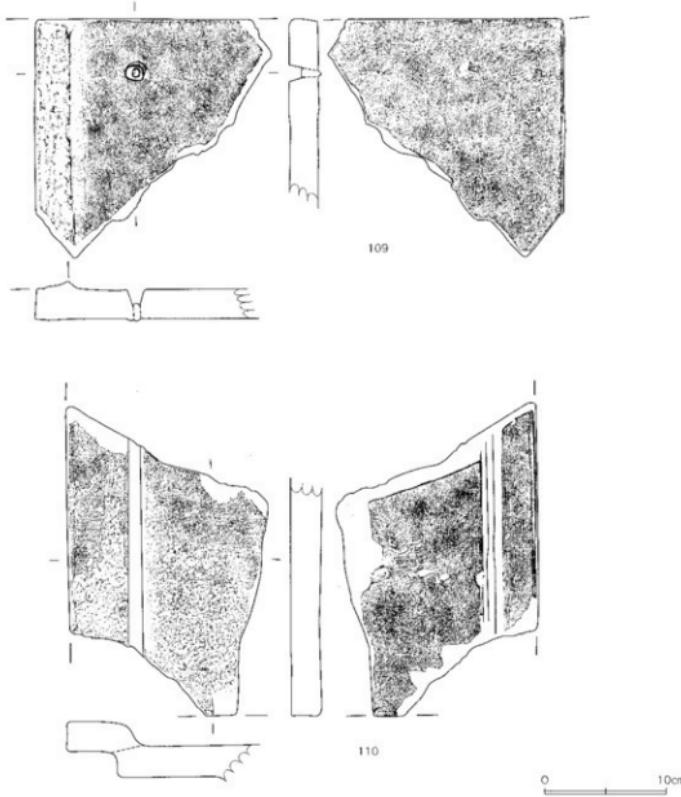
第37図 出土瓦類実測図 (17) 板塙瓦 4



第38図 出土瓦類実測図 (18) 板塙瓦 5



第39図 出土瓦類実測図 (19) 板塙瓦 6



第40図 出土瓦類実測図 (20) 板塙瓦 7

度瓦裏側の大きな突出部が脱落しているため、突出部と平瓦部の接合の状態が確認できる資料である。5条の櫛状工具を用いて、約1cmごとに強く力を入れなおしたような深い櫛目が観察できる。(95)は上墨トレンチ内の旧トレンチ埋土から出土したもので、平瓦部である。裏側には大きな突出部が一部残っている。わずかに尻部の端面が残っているので、この大きな突出部は断面が台形で、尻側のはうがやや直立する形態であることがわかる。

(96)～(107)は南区表層及び確認面から出土した資料である。(96)は棟部で、釘穴が遺存しているので左棟と推定される。この個体は胎土分析を実施している。(97)は半瓦部で、同じく釘穴から右棟と推定される。釘穴は瓦に垂直にあけられているが、孔径は表面の方が裏面より1回り大きく逆台形

の断面を呈している。(98)は棟部で、同じく釘穴から左棟と推定される。この瓦は顯著な内反りが見られることや、釘穴が棟のすぐ近くにあることが特徴である。また、釘孔も瓦に垂直にあけられていて、表から裏へ頭部に向かって斜めに孔が開けられている。これは瓦を葺いたときに、瓦を固定する塙の屋根下地との取り付け角度を勘案して孔を穿孔したためと推定される。(98)は平瓦部で、水切り溝と考えられるV字溝がある。なお右棟として図化しているが、釘孔などが遺存していないので左棟である可能性もある。これは(101)・(103)～(105)も同様で、國とは逆になる可能性もある。(101)も平瓦部で、同じくV字溝がある資料である。この資料は中央部が暗灰色で生焼け感が強く、また表面も風化気味である。(100)・(103)も平瓦部で、V字溝が遺存している。(103)の破断面を観察すると、V字溝の下に切り込みが入った痕があり、本来はy字状に切り込まれていたことがわかる。このことからV字溝はV字の工具によって瓦表面を削ったものではなく、鋭利な刃物を用い内側から端部へ、端部から内側へと斜めに2回切り込みを入れて、逆三角の部分を切り取ったものであることが確認できる。(100)では脱落した端部の下にも尚があるが、これは瓦の製作時に、溝位置の変更などの理由で瓦内側から端部への切り込みを入れ直し際に、初めに入れた切り込みが深く残っていたため、その面から瓦の端部が欠損したものと推定される。(102)も平瓦部で、釘穴から右棟と推定した。この釘穴も(98)同様斜めに穿孔されている。(104)も平瓦部の破片であるが、表面には葺かれていたときに重なっていた隣接瓦の棟部の痕跡が明瞭に残っている。(105)は棟部と平瓦部の繋ぎ目である屈折部の破片である。(106)は平瓦部、(107)は棟部で、どちらの資料も裏面に突出部が遺存している。(106)の突出部は先端が欠損しているが、やや断面が三角形気味である。(107)は釘穴が残っていないものの、この突出部の存在から尻部であることが分かるので右棟の瓦であることが確認できる。

(108)～(110)は99年度の工事立会い時に西櫓南側から出土した資料である。(108)は平瓦部で、裏側の台形の突出部が良く残っている資料である。また表面は中央部付近より頭側と尻側で風化具合が異なっている。(109)も棟部の脱落した平瓦部である。釘穴にはまだ釘が残っており左棟であることが確認できる。また棟部の剥離痕には4条の櫛状工具による櫛目が残されている。この櫛目は(82)などに比べると鋸歯が鋭く、引き方も深い部分が多く一様になっているなどの差異がみられる。(110)は棟部で、裏側に突出部の痕跡が残されていることから左棟と推定した。この瓦は表面中央部、ちょうど裏側突出部の反対側あたりから尻側にかけて風化が激しく、表面の黒色処理がほとんど失われている。なお(62)は当初平瓦と誤認したため平瓦と同じ頁に版組してしまったが、瓦厚や反りがないことから見て板塙瓦と推定した。この瓦は98年度の立会い時に東櫓西側から出土したもので、全体が橙色に変化しており、二次焼成を受けている。塙については火災の記録がないので、塙廃絶後に何らかの理由で焼かれたものと思われる。

板塙瓦については、大別すると棟部の屈折形状から2種類、胎土の特徴などから4種類に分類できると考えられる。瓦当部等が存在しないため年代観は明らかにし難いが、「前澤」刻印瓦については江戸後期以降幕末頃のものと推定される。

8. 板塙變斗瓦（第41・42図-111～121、図版19）

この瓦は、約20cm×約10cmの長方形を呈する小型の瓦で、一方の長辺に断面三角形の突出部が列

状に作られている特徴的な形態を有している。この瓦は88年の調査時にも「不明瓦」として報告されているが、現在の瓦には類似する形態のものが見当たらず、また他の遺跡の出土瓦等にも確認できない「不明」瓦である。今回の調査では、この種類の瓦の中に漆喰が付着しているものや、風化によると思われる痕跡が確認できたことから、板扉瓦とセットになる熨斗瓦と推定した。なお葺き方・使用法などについては確定できないが、風化痕跡が多くみられる部分を表面とし、突出部側を頭部として想定した。

(111)は堀跡と推定される石敷上から出土したものである。表面中央部にかけて黒色処理の部分が風化によって失われている。(112)は建物跡掘り方内から出土したもので、表面中央部から尻部にかけて風化痕跡が見られる。(113)は濠側土層から出土したもので、2つに割れているがほぼ完存品である。この瓦は形態的には、三角形の突出部がやや外開き気味である点が他の資料と異なっている。表面は頭側に帯状のあたり痕跡があるほか、裏面には判読できないものの墨書きが存在する。なお、このような帶状の変色またはあたり痕跡は、(114)や(115)の表面にも見つけることができる。(114)～(116)はN3・4区確認面から出土したものである。(114)はほぼ完存品で、表・裏面に帯状の変色部分が存在するほか、裏面に漆喰の付着痕が残されている。(115)も表面に変色部分がある。裏面には長さ約3cmの溝があり、製作時に何か棒状のものが混入していた痕跡と推定される。(116)は全体に灰色を呈するやや焼成不良の資料である。なお今回の板扉熨斗瓦では、やや焼成不良気味のものが比較的多く見られる。(117)～(119)は南区表層・確認面の出土資料である。(117)は頭部と尻部の一部を欠損しているが比較的の保存状態は良好な資料である。表面は全体に灰色を呈しており黒色処理が不十分であったと考えられる。また裏面中央左側に直径約1.5cm程度の円形の鎧痕があり、板扉瓦の止め釘の鎧痕ではないかと推定される。このような裏面の鎧痕は(119)の右端や(120)にも見つけることが出来る。(118)も尻部の一部を欠損するのみの良好な資料である。この資料では平瓦部に突出部を取り付けた際の調整がやや不十分で、頭部に接合痕が残っている。

(120)・(121)は99年度の工事立会い時に西櫓南側から出土した資料である。(120)は完存品で、裏面には(117)などと同様の鎧痕が見られる。他に比べると焼成が良好で、重量感がある資料である。(121)は左端部を欠損し、やや上反している。

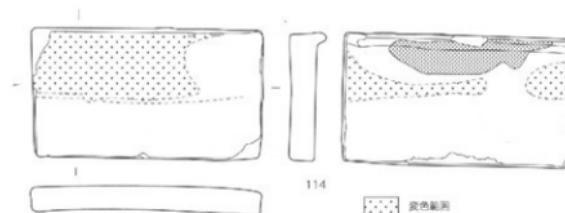
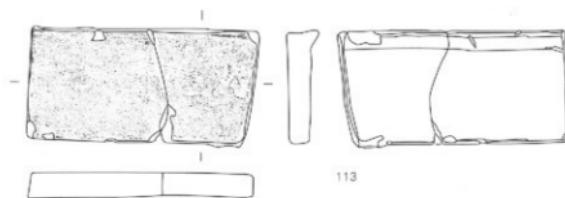
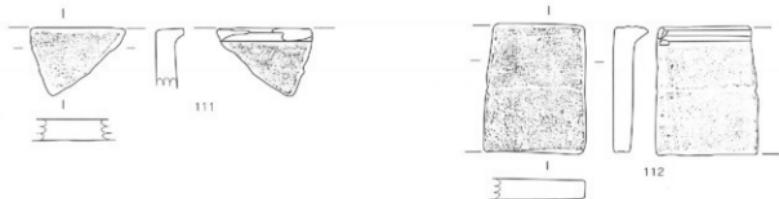
この板扉熨斗瓦は、平瓦部については板状の粘土を切り出す際に大きさを揃えていると考えられるが、特徴的な裏面の突出部については、粘土糸状のものを貼りつけた上で△形に指ナデ形成をしていると考えられるため、三角形の断面形状についてややばらつきがある。いわば、突出部についてはその程度の品質監理しか要求されていないというところがこの瓦の特長であろう。

9. 特殊瓦・不明瓦（第43・44図-122～134、図版17）

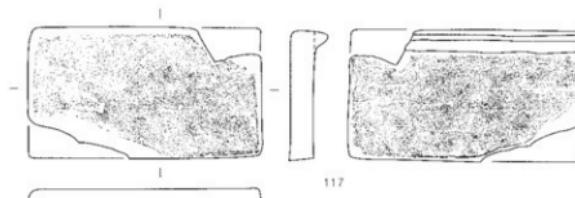
これらの資料は、今までの分類に当てはまらないもの及び使用方法などが推定できない瓦類である。

(122)・(123)は棟瓦（角棟冠瓦）と考えられる資料である。(122)は98年の工事立会い時に出土した完存品、(123)は99年度の立会い時に西櫓西側から出土したものである。製作は丸瓦と共に多く、(122)の内面にはコビキ痕及び棒状压痕が、(123)はコビキ痕が見られる。(124)はN1区表層から出土したもので、平瓦状の形態を有するものの、より曲面がきついので棟瓦（伏間瓦）と推定した。表面尻部端部側にやや風化の異なる部分があり、葺かれていた時の状態を示しているものと推定され

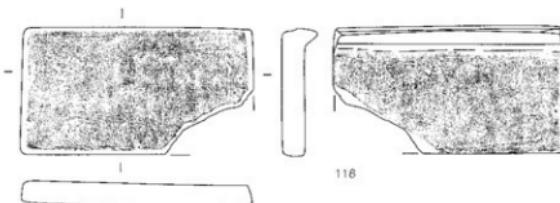
る。(125)はN3・4区確認面から出土したものである。幅は不明であるが現存部で最低3回の崩折部が確認でき、また頭部は尻部よりも分厚い断面を有している。瓦の長さは約9.5cm程度であり、実用部の瓦とは思えない。この瓦については飾り瓦または棟込瓦（松皮菱）の可能性が想定される。(126)・(127)は板崩瓦の一種と考えられる、鋭角を有する三角形状の瓦である。(126)は表面の片側に面取りがあることから右出隅瓦、(127)も形状から左出隅瓦と推定される。(127)の端面には棒状工具によって引かれた1条の工具痕が残されている。(128)はN2区表層から出土したもので、軒丸瓦の周縁部に似ているが剥離場所が内面角部にある点が軒丸瓦と異なっており、使用法が断定できない瓦である。(129)は南区から出土したもので、隅瓦に似ているが先端部は欠損ではないので隅瓦ではない資料である。飾り瓦の一部であろうか？仕上げは全体に雑であるが、裏面には幅の広い3条の溝があるほか、尻面が不整の3回面取りになっていることがわかる。(130)はN拡張区表層から出土したもので、鰐瓦の鱗状表現の一部と推定される。(131)はN3・4区確認面から出土した資料で、軒丸瓦に似ているが瓦当面後ろ側が波状表現になっており、筒部が接合しないので軒丸瓦ではない資料である。隅瓦または鳥衾瓦であろうか。(132)は99年度の立会い時に本丸西北端から出土したものである。軒棟瓦の丸瓦部に似ているが接合方法が異なるので、鳥衾瓦または飾り瓦の一部であろう。(133)は堀跡と考えられる石敷上から出土したものである。曲面を持っており小型の丸瓦の破片に似ているが、瓦にしては厚さが薄い資料である。内面には太さ約0.5cm程度の紐の压痕が明瞭に観察できる。(134)は土岸トレンチ内の88年に調査された旧トレンチの埋土から出土したものである。左端は遺存しているが他は割れており全体形は推定できない。胎上も瓦質ではあるが瓦かどうかも判断しかねる資料である。表面の一部に二次焼成による赤変部分が存在する。



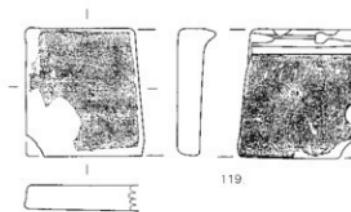
第41図 出土瓦類実測図(21) 板垢熨斗瓦 1



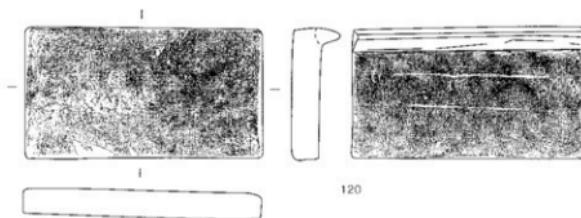
117



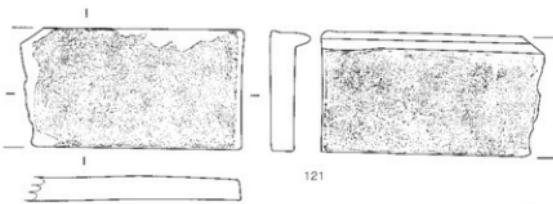
118



119



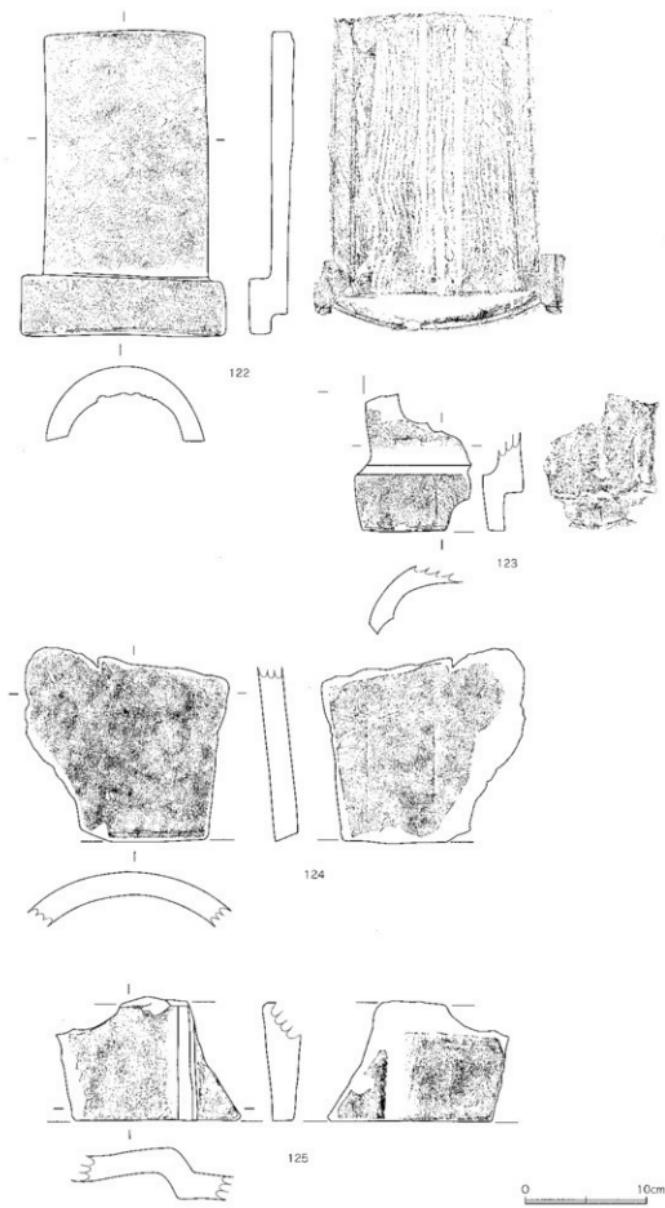
120



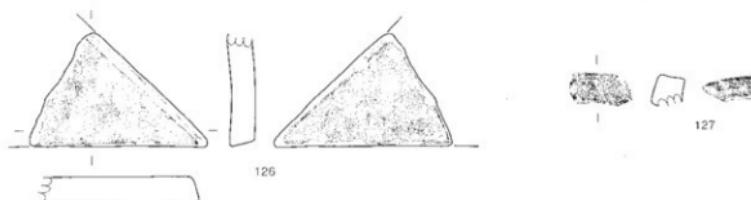
121

0 10cm

第42図 出土瓦類実測図 (22) 板堀熨斗瓦 2

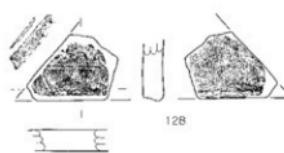


第43図 出土瓦類実測図 (23) 特殊瓦・不明瓦 1

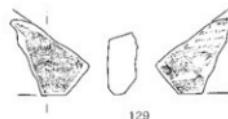


126

127



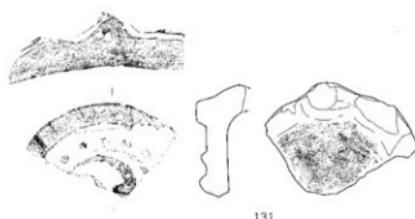
128



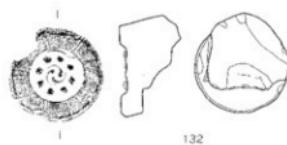
129



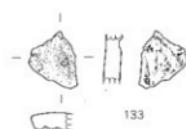
130



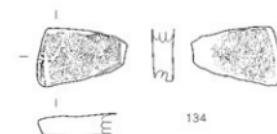
131



132



133



134

0 10cm

第44図 出土瓦類実測図 (24) 特殊瓦・不明瓦 2

第3表 軒丸瓦・軒平瓦観察表

十九瓦

標目	出土地点	縦長角筒瓦	横長角筒瓦	柱頭瓦	玉筋輪	内面調整	色調	地底	粘土
							外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）
第23827 SAH	(78) 70 (20) (320) 28 (34)	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○、雲母○					
28 SAH	(50) (75) (25) 20 (120)	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○、雲母○					
29 SBH-1,2	(94) (69) 72 (24) (306) 27 (41)	解(化+端+窓口)	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○、雲母○					
30 SBH-1,2	(152) (93) 65 19 (450)	コビキ+端+窓口	外：オーリーブ色（2SY 5/1）・内：灰色（SY 6/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○、雲母△	巻				
31 NEE	(188) (125) 72 19 (590)	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 5/2）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
32 NEE	(138) (61) (74) 30 (320)	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 6/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
第24023 NME	(169) 151 72 24 (980) 37 70	コビキ	外：灰色（7SY 4/1）・内：灰色（7SY 6/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
34 NIK	(95) (62) (64) 21 (272) (30) (16)	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（2SY 7/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
35 NIK	(180) 105 5 67 18 (708) 24 76	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（N 5/0）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
36 NIK	(65) (99) (70) 23 (334) 21 (60)	棒状瓦	外：灰色（N 5/0）・内：灰色（N 6/0）	長石△、石英△、 長石○	巻				
37 NIK	(79) (76) (64) 17 (205) (22) (31)	コビキ+端+窓口	外：灰色（10Y 4/1）・内：灰白色（5Y 5/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
第25138 NIK	(171) (79) (68) 19 (415) ...	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰白色（7SY 7/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
39 NIK	(128) (80) (70) 21 (280)	コビキ+端+窓口	外：灰色（7SY 4/1）・内：灰白色（7SY 7/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
40 NIK	(105) (75) (64) 18 (360) ...	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（SY 4/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
41 NIK	(106) (115) (70) 20 (380) ...	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（2SY 7/2）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
42 NIK	(15) (99) (68) 19 (540) ...	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（SY 5/6）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
43 N-3,4 IK	(86) (65) (43) 20 (150) ...	萬字正模	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（5SY 4/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
第26044 N-3,4 IK	(131) (86) 25 (530) 31 (11)	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（7SY 6/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
45 N-3,4 IK	(79) (66) (73) 29 (380) 40 (48)	コビキ	外：オーリーブ色（10YR 3/2）・内：灰白色（10YR 6/4）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
46 N-3,4 IK	(147) 140 70 19 (745) ...	コビキ	外：端+灰（2SY 3/1）・内：灰白色（2SY 7/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
47 N-3,4 IK	(171) (136) (59) 20 (625)	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（N 7/0）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
48 NIK	(139) (105) (56) 21 (212) ...	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（2SY 5/6）	長石△、石英△、 長石○、石英○	一次底成受ける				
第27149 S IK	(105) (147) 72 23 (550) 31 83	コビキ+端+窓口	外：端+灰（N 3/0）・内：灰白色（N 6/0）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
50 S IK	(138) (71) (69) 21 (375) ...	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（7SY 6/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				
51 TT, 258	271 141 70 19 1375 21 97	コビキ+端+窓口	外：灰色（N 4/0）・内：灰色（7SY 4/1）	長石△、石英△、 長石○、石英○	巻				

第4表 丸瓦類整理表

平瓦

[単位：mm]

種別	出土地点	左長	右長	頭長	尾長	厚度	裏厚	谷深	色調	地成	胎土
新20052 S区	... (110)	... (165)	... (100)	20 (675) (69)	外：灰褐色 (25Y 3/11)	内：灰褐色 (10YR 6/1)	並	黑母△、長石△、石英△、黑色粒子○	あたりによる変色あり		
53 N 3・4区	... (154)	... (154)	... (100)	20 (960) (6)	94 黄褐色 (25Y 4/1)	内：灰褐色 (10YR 6/2)	長石△、石英△、黑色粒子○				
54 N 3・4区	... (102)	... (102)	... (103)	20 (720) (10)	94 黄褐色 (25Y 4/1)	内：灰褐色 (10YR 7/3)	R	黑母△、長石△	細孔あり [開削] キラ粉あり		
55 S区	... (117)	... (117)	... (103)	20 (186) (24)	外：灰褐色 (N 7/0) 内：灰褐色 (N 6/0)	外：灰褐色 (N 7/0) 内：灰褐色 (N 6/0)	並	黑母△、長石△、石英△、黑色粒子△	細孔あり [開削] キラ粉あり		
56 N 3・4区	... (117)	... (117)	... (103)	20 (208) (20)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 6/0)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 6/0)	並	黑母△、長石△、石英○	石英の粒子大		
58 N 3・4区	275 (145)	275 (145)	103 (147)	19 (1250) (9)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 6/1)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 6/1)	並	黑母△、長石△、石英○	石英の粒子大		
59 N 3・4区	275 (145)	275 (145)	103 (147)	18 (910) (14)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 7/3)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 7/3)	並	黑母△、長石△、石英○	二等地を含む		
新30060 D-1	... (135)	... (135)	... (133)	18 (390) (5)	外：灰白色 (N 7/0) 内：灰白色 (N 5/0)	外：灰白色 (N 7/0) 内：灰白色 (N 6/0)	並	黑母△、黑色粒子△	黒母△、黑色粒子○		
61 D-1	... (118)	... (118)	... (133)	18 (390) (5)	外：灰白色 (N 7/0) 内：灰白色 (N 6/0)	外：灰白色 (N 7/0) 内：灰白色 (N 6/0)	並	黑母△、黑色粒子○	黒母△、黑色粒子○		

棟瓦

種別	出土地点	左長	頭長	尾長	厚度	裏厚	谷深	色調	地成	胎土
第31063 NK	... (31)	... (31)	20 (440) (17)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 5/0)	真	黑母△、長石△、石英△		キラ粉あり		
64 HT-Y	... (16)	... (16)	17 (980)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 7/1)	並	長石△		キラ粉あり		
65 N 3・4区	... (13)	... (13)	20 (135) (6)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 5/0)	並	長石△		キラ粉あり [断面強；灰白色 (N 7/0)]		
66 NK	... (13)	... (13)	17 (120) (2)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 5/1)	並	黑母△、長石△、石英△		5の魔芋あり		
67 NK HT-Y	... (13)	18 (73) (2)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (25Y 5/1)	真	黑母△、長石△、石英△		カリ粉あり [断面強；灰白色 (N 7/1)]			
68 D-28	... (89)	15 (420) (7)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 5/0)	並	黑母△、長石△		14kgの魔芋あり			
69 NK	... (20)	18 (60)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 6/0)	並	黑母△、長石△、石英○		6kg以上の魔芋あり			
70 NK	... (64)	17 (45)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 5/0)	並	長石△、黑色粒子△		10kgの魔芋あり			
第32071 立88、東ヤクタ	... (26)	18 (245) (24)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 7/0)	真	長石△ (少ながらね子少さい)		鉛鉄の15条の魔芋あり			
72 D-16	... (177)	20 (440) (16)	外：灰褐色 (N 4/0) 内：灰褐色 (N 5/0)	並	黑母△、長石△、石英○		カリ粉あり [断面強]			

輪違瓦

種別	出土地点	全長	幅	高さ	瓦厚	裏厚	谷深	内面調査	色調	地成	胎土
第32073 NK	... (106)	116	128	31.5	21	340	20	コピキ+葉状石+繊維かい布目	外：灰褐色 (5Y 4/1)	並	黑母△、長石△、石英○
74 NK	... (106)	122	(30)	21	(302)	20	21	コピキ+葉状石+繊維かい布目	外：灰褐色 (5Y 5/1) 内：灰褐色 (5Y 6/1)	やや不規則	黑母△、長石△、石英○
75 NK	... (114)	111	(37)	21	(282)	20	21	コピキ+葉状石+繊維かい布目	外：灰褐色 (5Y 5/1) 内：灰褐色 (5Y 5/0)	長石△	黑母△、長石△、石英○
76 N 3・4区	... (16)	163	(27)	22	(216)	20	21	コピキ+葉状石+繊維かい布目	外：灰褐色 (5Y 5/1) 内：灰褐色 (5Y 6/2)	やや不規則	黑母△、長石△、石英○
77 SK	93	129	39.5	2	291	20	21	コピキ+織物+繊維かい布目	外：灰褐色 (N 6/0)	並	黑母△、長石△、黑色粒子△
78 H-1・2	106	113	31	19.5	232	20	21	コピキ+織物+繊維かい布目	外：灰褐色 (4/0)	並	黑母△

第5表 平瓦・塊瓦・輪違瓦調査表

種別	出土地点	左長	右長	幅長	長幅(上)	重幅(下)	瓦高	瓦厚	突出部高	突出部幅	突出部厚	色調	他成	施工
第30862 沢8 番サトヲ							25		(560)外: に赤い地 (5YR 6/4) 内: 黒色 (5YR 7/6)					二次焼成を受ける
第34079 S.A.H. No.31							24		(138)外: 白色 (15Y 7/1) 内: 黑色 (N 3/0)					
80 SAI. 17. 1.	(52.5)	(20)	(2)	25.5			25		(165)外: 白色 (N 5/0) 内: 黄灰色 (5Y 5/0.1)					
81 S.T. N.E.	(124)	(24)		20.5			25		(370)外: 白色 (N 4/0) 内: 黑色 (5Y 7/1)					
82 N.I.U. N.139	(194)	(38)	(59)	46	27		23		(140)外: 黄褐色 (5Y 3/2) 内: 黄褐色 (5Y 5/2)					
83 N.I.U. N.138				(2)			21		(160)外: 黄褐色 (5Y 4/1) 内: 黄褐色 (5Y 6/0)					
84 N.I.U. N.138				(25)			21		(230)外: 黄色 (10Y 5/1) 内: 黄色 (10Y 5/1)					
85 N.Z.A. B.K.				2			29		(90)外: オリーブ色 (5Z 3/2) 内: 黄褐色 (5Y 5/2)					
第35086 N.I.U. N.31 (304) (121) (107)				34	15.5		26		(230)外: 黄色 (10Y 5/1) 内: 黄褐色 (5Y 6/2)					
第361087 N.46. N.128	(163)						26		(960)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄褐色 (5Y 7/2)					
88 N.46. N.112 (103)	(97)	(67)	(35)	51.5	31		26		(615)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黑色 (N 2/0)					
89 N.46. D	(136)						24		(385)外: 電線色 (N 3/0) 内: 黄色 (7S 5/1)					
90 N.46. N.112 (19)	(154)						29		(345)外: 黄色 (7S 4/1) 内: 黄褐色 (8W 7/4)					
第371091 N.46. N.229	(205)	(88)	(66)	48	41		26		(905)外: 電線色 (N 3/0) 内: 黄褐色 (5Y 7/1)					
92 N.46. N.64	(88)	(95)	(50)	50	23		26		(660)外: 黄色 (N 5/1) 内: 黄色 (N 6/1)					
93 N.46. N.138 (122)	(70)						24		(380)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (7S 7/1)					
94 N.46. N.53							25		(150)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄褐色 (2Z 6/2)					
95 [日]Tr				(5)			24	(32)	(11) (280)外: 黄色 (2Z N 4/1) 内: 黄色 (10Y 4/1)					
96 SIS. (122)	(92.5)		(66)	49	40		23		(430)外: 電線色 (N 4/0) 内: 黄褐色 (2Z 6/1)					
97 SIS. No.91 (113)	(68)						23		(330)外: 黄色 (N 4/1) 内: 黄褐色 (2Z 5/1)					
第381088 S.R. No.88 (220)	(70)	(51)		25			21		(910)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (7S 6/1)					
99 SIS. (84)	(99)						25		(220)外: 黄色 (N 5/0) 内: 黄色 (7S 5/1)					
100 SIS. No.26 (91) (113)							25.5		(260)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (N 5/0)					
101 SIS. (38)							20.5		(68)外: 黄色 (7S 5/1) 内: 黄色 (10Y 6/1)					
102 SIS. (129)							25		(38)外: 電線色 (N 3/0) 内: 黄褐色 (5Y 5/1)					
103 SIS. (181)							22		(632)外: 黄色 (10Y 6/1) 内: 黄色 (7S 5/1)					
第39104 S.R. (185)							23.5		(380)外: 黄色 (N 6/0) 内: 黄色 (N 7/0)					
105 SIS. (38)				(30)	(22)		21		(276)外: 黄褐色 (10W 6/2) 内: 黄褐色 (N 3/0)					
106 SIS. (122)							21		(18) (334)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (N 6/0)					
107 SIS. (122)	(99)	(47)	(41)	25	(25)		23		(16) (850)外: 黄色 (N 6/0) 内: 黄褐色 (N 7/0)					
108 (299)	(76)			24	32		20		(700)外: 電線色 (N 3/0) 内: 黄褐色 (N 4/0)					
第40109 T.S. (176)				(31)	24		21		(920)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (N 6/0)					
110 上 (186)	(25)	45		37	25.5		21		(1115)外: 黄色 (N 4/0) 内: 黄色 (10Y 7/2)					

第6表 板磚瓦觀察表

板厚瓦製斗瓦

地圖	出土地點	左長	右長	總長	厚度	原長	突出部幅	瓦厚	重量(g)	色調	燒成	胎土	觀察所見
第41回111	SAH			(78)	11	6	17	(75)	外:灰褐色 (N 3.0) 内:暗灰褐色 (N 3.0)	赤	長石△	斷面有: 黑色 (2.5Y 7/2)	
112	S-B-1			(106.5)	94.1	12	10	16	(227)	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰褐色 (N 5Y 7/1)	赤	鵝卵石○、石英○	
113	S.A.D.T.r	92	96	188	174	16	7	20	(518)	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰褐色 (N 5Y 7/1)	赤	鵝卵石○、石英○	
114	N-3・E	107	107	191	185	11	8	21	635	外:灰褐色 (N 3.0)	赤	鵝卵石○、黑色砂△、	ありに見える變色あり
115	N-3・E	97	93	(66)	14	12	20	(222)	外:灰褐色 (N 3.0) 内:灰黃褐色 (10YR 6/2)	赤	鵝卵石△、長石△		
116	N-3・E	(61)	(79)	(66)	12	10	20	(141)	外:灰褐色 (N 3.0) 内:灰褐色 (N 4.0)	赤	鵝卵石△		
第41回117	S.R	(74)	(81)	(135)	(109)	14	11.5	19	(484)	外:灰褐色 (N 5.0) 内:灰黃褐色 (N 5.5)	赤	鵝卵石△、長石△、石英△	
118	S.R	106	151	19	(119)	14	10.5	16.5	(524)	外:灰褐色 (7.5Y 5/1) 内:灰黃褐色 (2.5Y 6/1)	赤	鵝卵石△、長石△、石英△	
119	S.R	(88)	(90)	(82)	15	10.5	20.5	(320)	外:灰褐色 (10YR 3/1) 内:灰黃褐色 (10YR 3/1)	赤	鵝卵石○、石英△	断面有: 紅 (2.5Y 7/1)	
120	TT.L	109	107	196	195.5	15	15.5	235	835	外:灰褐色 (N 4.0)	赤	長石△	下面に赤の薄施釉あり
121	TT.E	99.5	(166)	(173)	13	13	20	(535)	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰白色 (N 7/0)	赤	長石△、石英△		

特殊E・不明瓦

地圖	出土地點	總長	總幅	總高	瓦厚	重量(g)	突出部幅	強板	底板	左板	右板	內面調整	色調	燒成	胎土	觀察所見
第41回22	T-T.2.36	203	13.1	53	13.55	50	109	外:灰褐色 (N 4.0)	赤	鵝卵石△、長石△、石英△	赤	鵝卵石△、長石△、石英△	赤	鵝卵石○、長石○、石英○	塊瓦、キラ物	
123	T-T.2.38	(66)	(72)	(57)	18	(325)	46	(94)								塊瓦?
124	N.R.	(152)(167)	(46)	19	(635)											民石△
125	N-4.K															民石△、長石○、白英○、
第44回26	N.I.S															キラ物あり
127	N.I.A.K															民石△
地圖	出土地點	瓦厚	重量(g)	外區隔	接觸面積	接觸面積	周緣幅	周緣高	周緣高	周緣高	周緣高	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰黃褐色 (N 5.0)	赤	鵝卵石○、長石○、石英△	鵝卵石○、長石△、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△
第44回28	N.I.A.K	21	(45)	(25)	15	5	10	(37)	24	(6)	外:灰褐色 (5Y 7/2) 内:灰黃褐色 (N 5.0)	赤	鵝卵石△、長石△、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△	
131	N-3-4.E	18	(260)	(81)	(38)	15	8	44	14	4	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰黃褐色 (N 5.0)	赤	鵝卵石○、長石○、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△	
132	T.T.296.D-3	18	(215)	73	16	135	12	8	44	14	4	外:灰褐色 (N 4.0) 内:灰黃褐色 (N 5.0)	赤	鵝卵石○、長石○、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△	鵝卵石△、長石△、石英△
地圖	出土地點	總	橫	瓦厚	重量(g)	外	色調	燒成	胎土	觀察所見						
第44回29	3.E	(50)	(19)	24	(64)	外:灰褐色 (5Y 4/1) 内:灰黃褐色 (10YR 7/2)	赤	鵝卵石○、石英△								
130	3.E	(35)	(68)	16	(30)	外:灰白色 (10Y 8/2) 内:灰褐色 (10Y 6/2)	赤	鵝卵石○、石英△								塊瓦?
133	SAH	(45)	(38)	13	(23)	外:灰褐色 (N 3.0) 内:灰黃褐色 (7.5YR 7/4)	赤	鵝卵石○、長石△、石英△								内面に他の土台の
134	SAD.Tr-K	(47)	(71)	16	(57)	外:灰褐色 (N 4/0)	赤	鵝卵石○								胎土

第7表 板厚瓦製斗瓦・特殊瓦・不明瓦觀察表

第2節 土器類

1. かわらけ類（第45～49図、図版20・21）

今回出土した遺物の中で、瓦類に次いで多く出土したのがかわらけ類である。特に土堀トレンチの調査において各期に分類した層中より良好な状態で出土している。

イ、造構内出土遺物（第45図-1）

建物跡の礎石地業掘り方内から出土した資料である。直線的な体部と厚めの口縁部を持つもので、傾向的には後述する第V期層出土の資料と共通点が見られる。

ロ、漆側土層出土遺物（第45図-2・3）

上墨漆側の葺石状造構の直上から出土した資料である。（3）は摩滅しており混入遺物と考えられるが、（2）はほぼ完品で、かつ葺石の斜面に張り付いて出土しているので造構と同時期のものと考えられる。土器の底部中央には焼成後に内側から外側に向けて穿孔された穴があり、使用については何らかの祭祀行為に伴うものであった可能性が想定される。遺物的は底径が大きく器高が低いことや、スコリア状の赤色粒子を胎土に多めに含む点、比較的良好な焼成などに特徴があり、ほかのかわらけとはかなり様相が異なっている。

ハ、第V期層出土遺物（第45図-4～14）

上墨の上層のうち、第V期とした盛土中から出土した資料である。形状の傾向としては底部が糸切りであることや、肥厚した口縁部と直線的な体部に共通した特徴が認められ、（5）～（7）などの体部についてはやや外反気味の傾向さえ見られる。大きさは口径約90mm前後のものと70mm前後のものの2種類に大別されるようである。

ニ、第IV期層出土遺物（第46図-15～25）

土墨の土層のうち、第IV期とした盛土中から出土した資料である。形状の傾向としては上記の第V期のものに共通するが、第V期出土資料に比べると口縁の肥厚の度合いが薄く、体部が外反するものが見られないなどの、細かな点には若干ではあるが差異が感じられる。なお（15）は遺存率約1／4程度の断片資料ではあるが、口縁部が薄くやや外反する点や、体部がやや内湾気味で外面にロクロ目を残すなどの器形に他とは異なる特徴が見られるので、第IV期よりもより古い時期の遺物である可能性も想定される。大きさは第V期のものと同様、90mm前後と70mm前後の2種類から構成されるようである。

ホ、第III期層出土遺物（第47図-26～30）

土堀の土層のうち、第III期とした盛土中から出土した資料である。この層位から出土した資料については、他の層の資料に比べると良好なものが少ないため遺物の傾向は判断し難い。今までの他の出土資料と異なる点としては、（26）の内底面には軽いものではあるが丸い突出が認められること、（30）については底部が比較的厚いうえに小径で、体部の開き方が大きいなどがあげられる。

ヘ、第II期層出土遺物（第47図-31～41）

土堀の土層のうち、第II期とした盛土中より出土した資料である。形状の傾向としては、まず、より口縁部の肥厚傾向がなくなっており、体部と口縁部の器厚の差が小さくなつたことがあげ

られる。また器形についてもやや内湾気味になっていることが特徴である。体部のロクロ目はあまり強くないものが多いが、(41)などかなり明瞭にロクロ目を残すものもある。ただし(38)・(39)など小型のものではこれらの特徴はあまり明瞭ではなく、他の層位出土資料との差異は分かりにくい。

ト. 第Ⅰ期層出土遺物（第48図-42～49）

土壘の十層のうち、基底層を除く最下層、いわば遺物を含む最も下の地層から出土した資料である。形状の傾向としては前述の第Ⅱ期とした資料と共通点が多いが、より体部と口縁部の器厚の差がなくなっている、(45)など口縁よりも体部のほうが厚いものも見られるようになる。また体部の内湾傾向も第Ⅱ期よりもやや強いように感じられる。なお(45)や(47)の断面を観察すると底部中央に剥離痕跡が見られることから、土器の製作についての特徴として、粘土柱よりロクロを用いて一気に引きあげるのではなく、底部中央をはじめに円盤ないしボタン状に製作し、その上で底部外側から体部になる部分を製作していることがわかる。このボタン状の製作痕跡については第Ⅲ期の(30)にも、中央部が脱落したような痕が残されており同様の可能性が考えられるが、他の資料ではあまり明確ではない。

チ. その他の出土遺物（第49図-50～60）

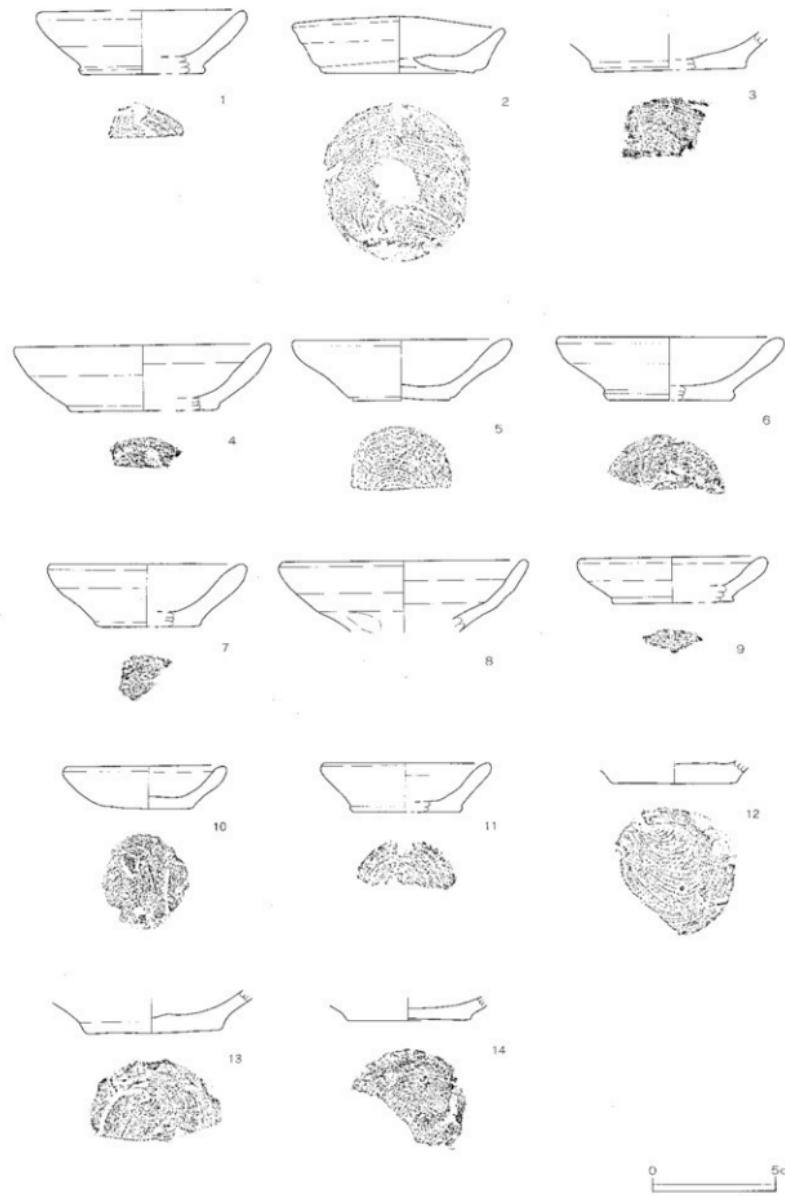
(50)は土壘トレント内の中層から出土した。小型のものではあるが口縁部と体部の厚さの差が少なく、Ⅱ期・Ⅲ期あたりの出土資料と共通点が見られる。それに対し土壘トレント内の旧トレント埋土から出土した(51)は、肥厚気味の口縁部を持つことからⅣ期あたりの資料と類似点が見られる。続く(52)～(54)は二ノ丸に存在する県指定天然記念物「亀城のシ」の根元で採集されたものである。この樹木は樹齢約450年と伝えられているが、今回の採集品はその木の根元の上に食い込んだような状態で発見されたものである。遺物は肥厚していない口縁部と、下半部がやや厚く、やや内湾した体部、やや小径の底部であるという特徴が共通して見られる。(55)～(60)は98・99年度の電気工事に伴う立会いで出土したものである。その中でも(60)は西櫓南側の土壘中から出土したものであるが、ほかの出土かわらけと異なり、底部が疑高台状ではなくやや丸みを帯びていることや、スノコ痕が残るなど違った特徴をしている。

2. 上師質土器・瓦質土器・土製品（第50～52図-1～30、図版22）

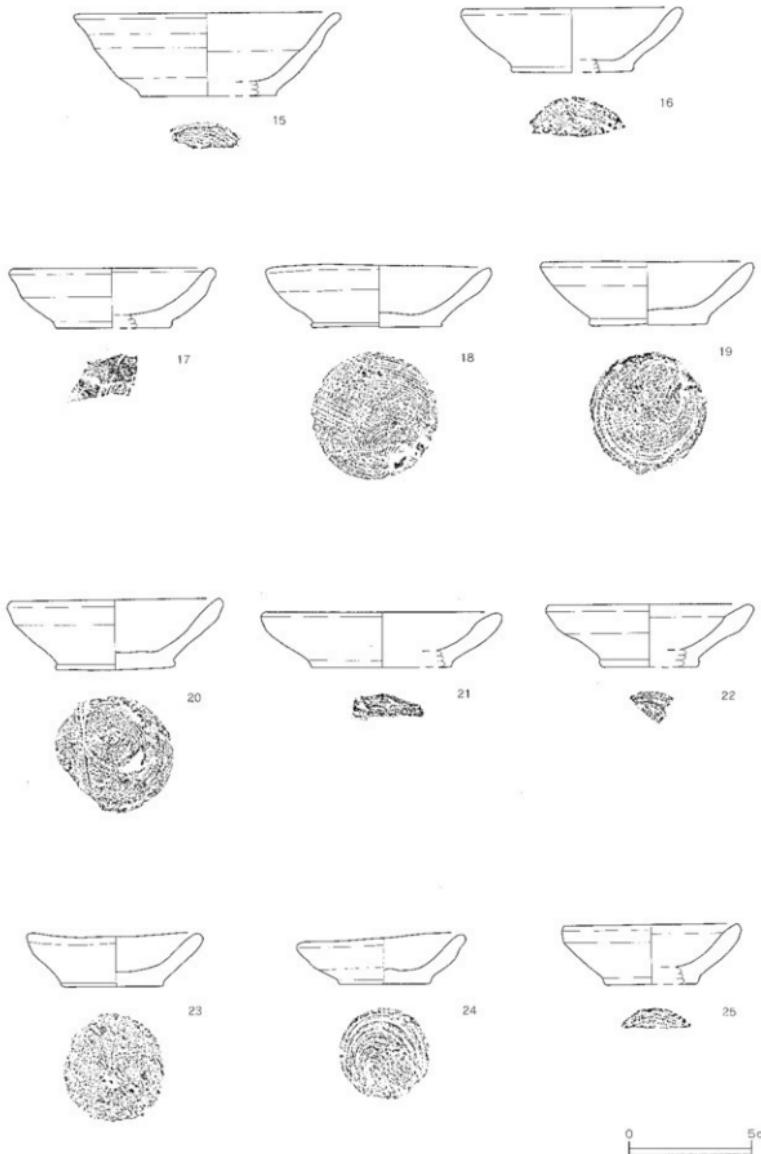
次に、今回の発掘調査で出土したかわらけ以外の土器類を概説する。

まず上師質土器としては、内耳土器（1～13・18）、すり鉢・こね鉢（14～17）、江戸在地焰烙（19）、焼塩壺（21）と、不明品（20）がある。

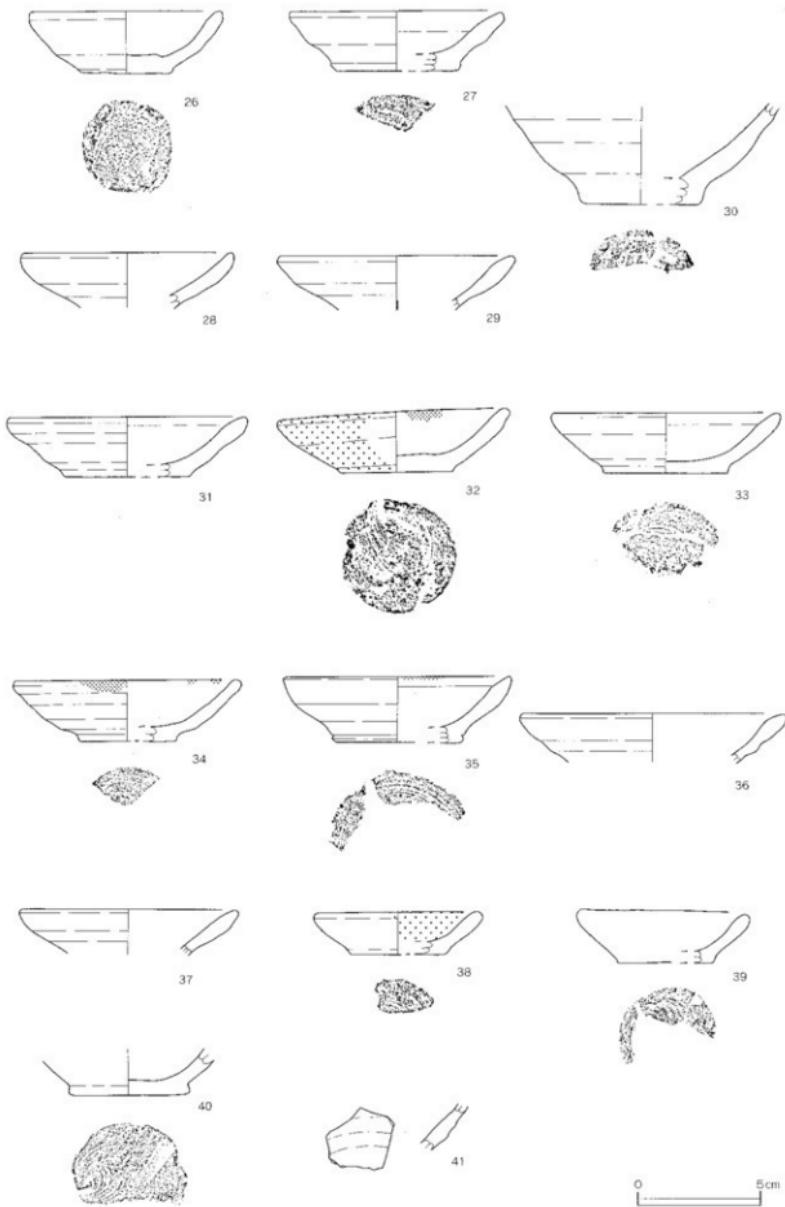
内耳土器は、建物跡の地業内（1・2）および第Ⅰ期土壘（3・11）、第Ⅱ期土壘盛土内（4～9）、第Ⅲ期土壘盛土内（10）、濠側土層（12）と旧トレントの埋土（13・18）から出土したものである。いずれも小片で全体をうかがえるものはないが、1・4・10・11・18は口縁部、2・3・5・6・12・13は体部、7～9は底部の破片である。口縁部について大別してみると、縁の平坦部の幅が比較的広く、体部の器壁が厚めで立ち上がりがやや屈曲するもの（1・10）と、それにくらべると平坦部の幅がやや狭く、体部の器壁が薄くて直線的に立ち上がるもの（4・11・18）の2種類の存在が確認できる。後者のほうがやや小型の感をうけるが、小片のため判断し難い。



第45図 出土かわらけ類実測図（1）



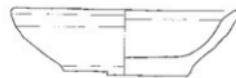
第46図 出土かわらけ類実測図（2）



第47図 出土かわらけ類実測図（3）



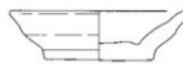
42



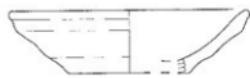
43



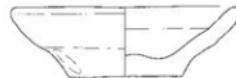
44



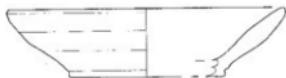
45



46



47



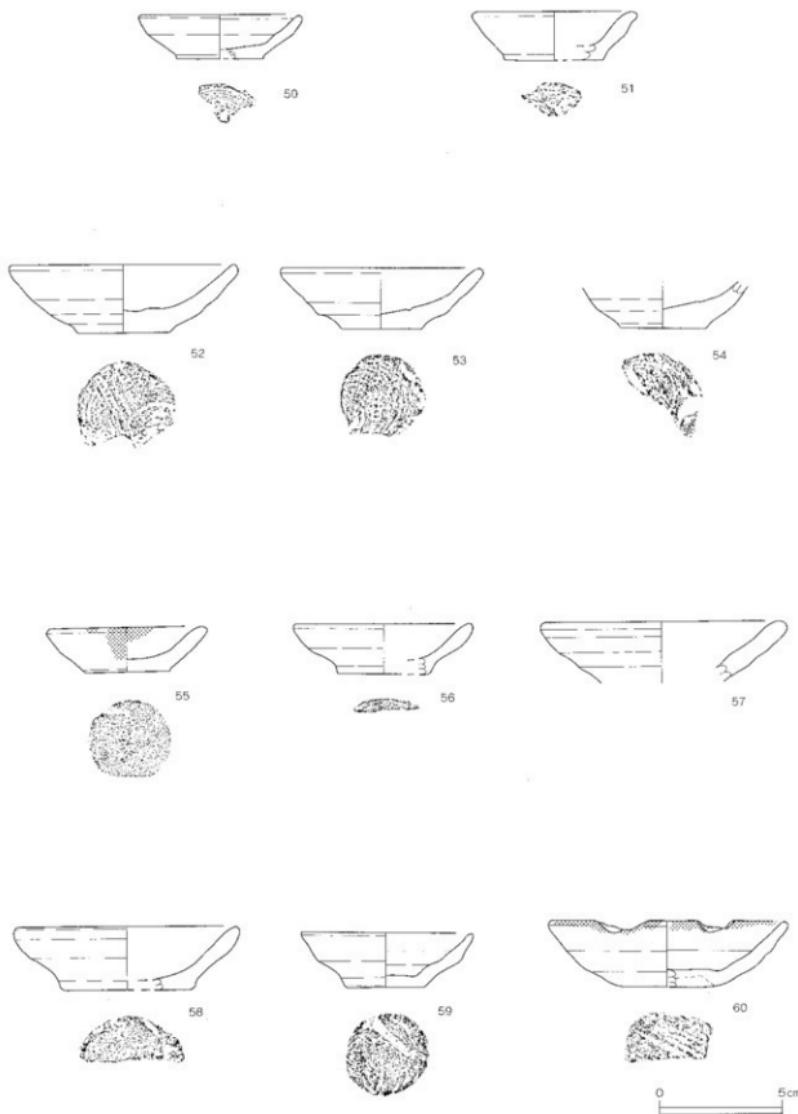
48



49



第48図 出土かわらけ類実測図（4）



第49図 出土かわらけ類実測図（5）

すり鉢・こね鉢は、第Ⅰ期土層(14)、第Ⅱ期層土壘盛土内(15)、塗側土層(16)と旧トレンチの埋土(17)から出土したものである。いずれも体部片で、内部に数条の沈線が粗く施されている。なお、今回内耳上器との分類については沈線の有無を判断材料としているため、内耳上器と分類した口縁部にすり鉢などのものが含まれている可能性がある。特に(1)については他に比べると器体に傾斜があるので、鉢類である可能性も想定される。

江戸在地焼烙は、99年度の電気工事立会い時に、二ノ丸のブル協の濠埋土から出土したものである。体部内面および外面上部はナデ調整、下半はケズリによって薄く仕上げられている。なお江戸在地焼烙は、土浦城跡関係では外丸御殿跡や郁文館の門（未報告）での出土が確認されている。

焼塙壺は、98年の電気工事立会い時に本丸内で出土したものである。比較的硬質で体部にロクロ目が強く残されているが、刻印等は存在しない。小川氏分類のⅢ-2類に属するものと考えられる。土浦城跡関係では、今までに外丸御殿跡で今回と同様の焼塙壺の出土が確認されている。

不明品は99年度の電気工事立会い時に本丸南側車向進入口西の電灯基礎部分で出土したものである。整形にあたっては、丸くて浅い壺状のものに粘土を押し付けるような手法を用いており、土師質製品ではあるが通常のものとはかなり異なった製作技法を持つものである。全体に被熱を受けているので、暖房具または調理具として使われるもの一部と推定される。時代は近代頃のものであろう。

次に瓦質土器であるが、香炉？(22・25)と不明品(23・24)がある。

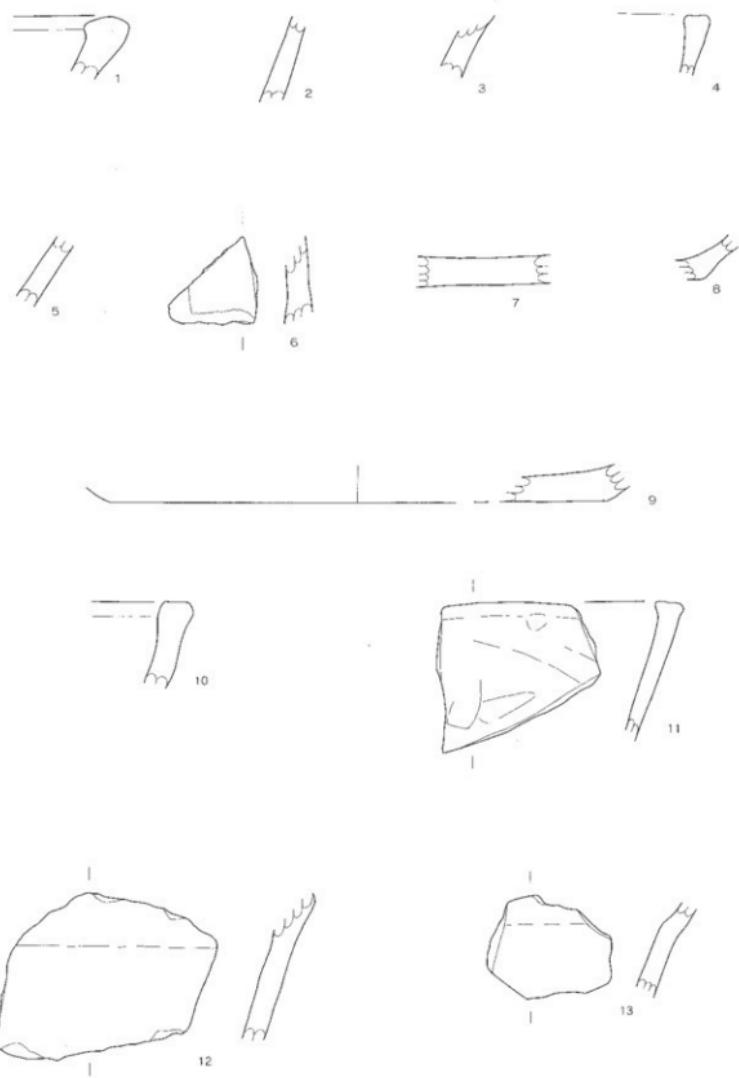
香炉？は、土壘トレンチの本丸側掘乱内(22)と、98年の電気工事立会い時に東櫓周辺(25)で出土したものである。(22)は角部であるが遺存部で見る限りは直線的なので、器形は丸いものではなく箱状になるものと推定される。外面にはキラ粉のような雲母の微粒子が観察される。(25)は体部片で、外面縱方向に叩き具の当たり痕が確認され、装飾的に叩き目が付けられていたものと考えられる。どちらも小片であり全体は判断し難い。

不明品は、北区の確認両(23)と、98年の電気工事立会い時に本丸側(24)で出土したものである。ともに口縁から体部の破片であるが、非常に直線的で全体の形を把握することは困難である。(23)は内面側？が黒色処理および丁寧なミガキが施され、光沢を持っている。また外面側は口縁部の下に、3条以上の工具による沈線の上に突帯状のものが付けられていたようであるが、現状では外れてしまっている。(24)も口縁部下に4条の沈線があるものの、貼りついていたような痕跡は見られない。また反対側にはキラ粉のような雲母の微粒子が観察される。なお(24)は破片にやや曲線部があり、その曲線から判断すれば沈線のあるほうが外側になる。

最後に土製品であるが、管状土錘(29)と、不明品(26~28・30)がある。

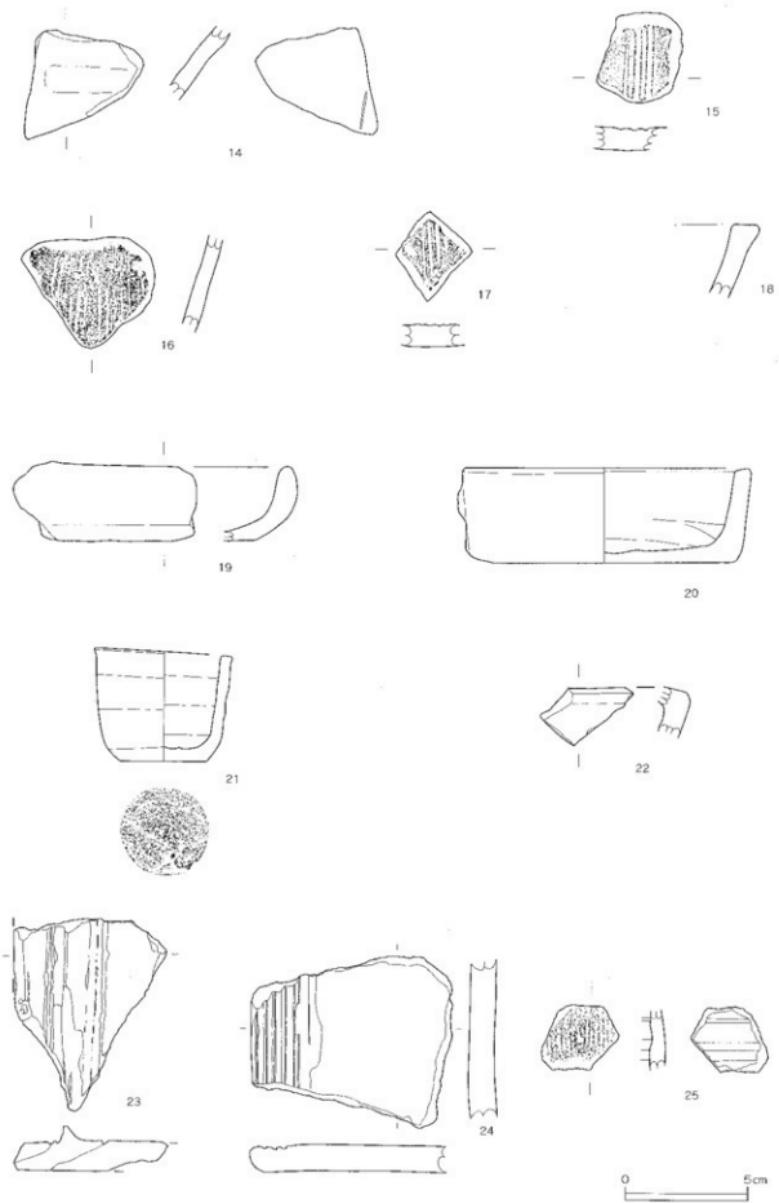
管状土錘(29)は、第Ⅱ期層土壘盛土内で出土したもので、粘土を薄く延ばしたもの棒状のものに巻き付けて作られたものである。小型の錘で、現生品としてはコイの刺網の錘に近似している。いずれにしても小型の魚種を捕獲するためのものであろう。

不明品のうち、まず(26)は、N2区の堀基礎石敷上で出土したものである。太い筒状の器形が想定されるものであるが、底面を除き磨滅が激しい。(27)は第Ⅲ期層土壘盛土内から出土したものである。かわらけと同様の土台をしているが、整った形状をしていないもので、単に小さな粘土塊を焼いたもののように見える。(28)は第Ⅱ期層土壘盛土内から出土したものである。全体としてはやや曲面をしており、筒状の形態になるものとも考えられる。ただし内外面とも特に整形調整らしいものはなく、

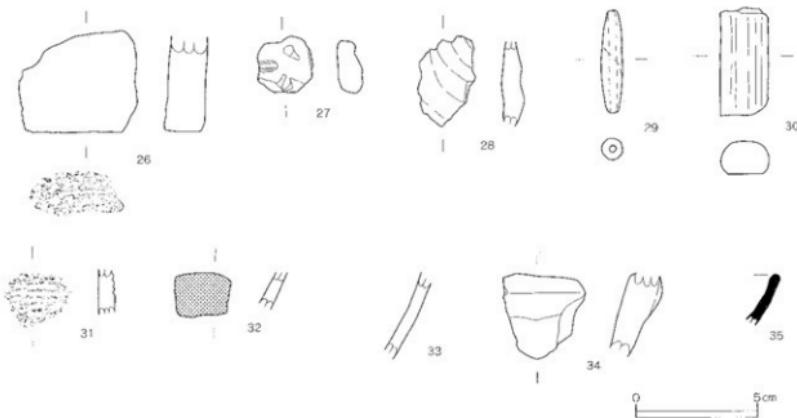


0 5cm

第50図 出土土質土器実測図（1）



第51図 出土土師質土器・瓦質土器実測図



第52図 出土土製品・その他の土器類実測図

どちらかというと棒状のものに粘土を巻き付けて焼いたようなものである。(30)は土型トレンチ本丸側擾乱(30)で出土したものである。やや扁平につぶれた棒状のもので、縦方向にハラミガキが施されている。形象埴輪の一部のようにも見えるが判断し難い。

3. その他の土器類（第52図31～35、図版22）

これらの遺物は、土墨トレンチの調査中に検出されたもので、造構に伴うものではなく盛土中の混入遺物である。いずれも小片であるため詳細は判断し難いが、土浦城の盛土の搬入元を考える上で貴重な資料である。

弥生土器(31)は第Ⅲ期層の盛土中より出土したものである。磨滅が激しく判然としないが、細かい繩文が施されているのが観察できる。

土師器(32、33)は第Ⅲ期層(2)・第Ⅳ期層(3)の盛土中より出土したものである。(32)は外面に赤彩が施されている。(33)は外面に鉈削りが観察される。甕の体部片であろう。

埴輪(34)は濠側土層から出土したものである。小型の埴輪の体部片と考えられる。全体に磨滅しているが、タガの突出が弱く形が崩れしており、またタガ下の貼付後のナデや刷毛目が見られない特徴がある。後期古墳のものであろう。

須恵器(35)は第Ⅲ期層の盛土中より出土したものである。端部があるので口縁部または返り部の可能性が考えられるが、器種は不明。胎土には雲母が見られないで、新治産ではないことが明らかである。古墳時代後期墳のものであろうか。

編図	図種	出土地点	口径	底面	色調	焼成	輪土	輪窯所見		焼成率(%)			
								長石○	石英○				
第45回1	かわらけ	SB-1-3区	[3]	50	浅黄褐色	(7SYR 8.3)	未	長石○	石英○	口部タルル付量。底面系切。口部から体部かけてやや薄闇。輪ナデ	18		
2	SAD-Tr-(漆塗土筋)	-	65	22.5	褐色	(7SYR 6.6)	未	長石○	石英○	透視中央部に内面から外側に向けての強度突起。底面系切。同上。テ	100		
3	かわらけ	SAD-Tr-(漆塗土筋)	[61]	(13)	浅黄褐色	(DYR 8.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。全体にやや厚膜。輪上部がつぶす。	20		
4	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[101]	[60]	浅褐色	(SYR 8.4)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。体部中筋が切。輪ナデ。輪上部に最大厚を有する。	20		
5	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[66]	40	浅黄褐色	(7SYR 8.3)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に最大厚を有する。	40		
6	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[90]	32	浅褐色	(SYR 8.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。全体にやや厚膜。輪上部が切る。	40		
7	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[70]	[14]	褐色	(7SYR 7.6)	未	長石○	石英○	口部から体部にかけてやや厚膜。	10		
8	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[101]	[29.5]	浅黄褐色	(7SYR 8.4)	やや低	長石○	石英○	底面外面上に横くぎ穴。全体外面上に底面側あり。	18		
9	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[70]	[50]	19	褐色	(7SYR 7.6)	未	長石○	石英○	口部底厚	20	
10	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[37]	18	13.5	浅褐色	(SYR 7.4)	やや低	長石○	石英○	体部は地引味でやや内凹する。	80	
11	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[67]	14	30.5	褐色	(SYR 6.6)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が切る。	45	
12	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	-	32	(6)	浅黄褐色	(7SYR 8.4)	未	長石○	石英○	底面系切。	55	
13	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[56]	(14)	褐色	(SYR 6.6)	やや低	長石○	石英○	底面外面上に横くぎ穴。	40		
14	かわらけ	SAD-Tr-(V筋)	[51]	(6)	浅黄褐色	(DYR 8.4)	やや低	長石○	石英○	底面外切。	15		
第46回15	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[106]	[56]	34	13.5	浅褐色	(7SYR 7.4)	やや低	長石○	口部底や外見。体部外面上に横くぎ穴を有す。	22	
16	かわらけ	SAD-Tr-W-(漆筋)	[106]	[50]	26.5	13.5	小褐色	(7SYR 7.3)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に量を有す。やや厚膜。断面が垂直。	30
17	かわらけ	SAD-Tr-W-(漆筋)	[106]	[60]	25	12.5	褐色	(7SYR 8.3)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に量を有す。	20
18	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[91]	53	26	褐色	(7SYR 7.6)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に量を有す。	90	
19	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[84]	46	26	浅黄褐色	(7SYR 8.3)	やや低	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に量を有す。やや厚膜。	100	
20	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[86]	48	29	12.5	浅褐色	(SYR 7.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部に量を有す。	55
21	かわらけ	SAD-Tr-W-(漆筋)	[94]	[58]	23	12.5	浅褐色	(SYR 7.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が肥厚。	22
22	かわらけ	SAD-Tr-W-(漆筋)	[58]	[60]	40	25.5	褐色	(7SYR 8.3)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が肥厚。	15
23	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[69]	41	23	12.5	浅褐色	(7SYR 7.4)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が肥厚。	100
24	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[70]	37	21	浅褐色	(SYR 8.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。体部中央に最大厚を有す。	95	
25	かわらけ	SAD-Tr-W-(漆筋)	[70]	[38]	24.5	12.5	浅褐色	(SYR 7.4)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。口部底厚を有し。体部まで肥厚。	38
第47回26	かわらけ	SAD-Tr-(III筋)	[78]	38	26	12.5	浅褐色	(7SYR 6.4)	やや低	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が強度薄陥を有す。	55
27	かわらけ	SAD-Tr-(III筋)	[86]	[50]	24	13.5	浅褐色	(DYR 7.4)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。輪上部が強度薄陥を有す。	15
28	かわらけ	SAD-Tr-(III筋)	[64]	(23)	12.5	浅褐色	(7SYR 7.4)	未	長石○	石英○	口部中央にターベン厚を有す。	15	
29	かわらけ	SAD-Tr-(II筋)	[96]	(22.5)	17.5	浅褐色	(7SYR 8.3)	やや低	長石○	石英○	体部中央部よりやや上に最大厚を有し。下部はやや薄い。	15	
30	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[46]	(40)	16	浅褐色	(SYR 7.6)	やや低	長石○	石英○	底面が最高点があり。体部下部が厚。	20	
31	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[96]	[50]	24.5	13.5	褐色	(SYR 7.6)	未	長石○	石英○	表面堅城。	20
32	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[92]	46	26	12.5	浅褐色	(7SYR 7.4)	未	長石○	石英○	底面が高点あり。口部下部が厚。	100
33	かわらけ	SAD-Tr-No.(漆筋)	[90]	[38]	23	12.5	浅褐色	(7SYR 7.4)	未	長石○	石英○	底面系切。輪ナデ。	30

第8表 カワラケ型窯窓表 (1)

番号	岩種	出土場所	口径	底深	測量	地成	地質	地質観察		標高[%]
								測量	地質	
34	かわらけ	S.I.D. T-648(1)期	[92]	[46]	25	褐色 (7.5VR 7.6)	良	泥岩△、板状△、石英△、石英○、長石○、石英○	底部含塩り、表面ナメラ、口部にターボルナイト、体部外側にロカロ目を有す。	15
35	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[90]	[50]	27	浅黃褐色 (10VR 8.3)	不良	泥岩○、長石○、石英○	底部含塩り。砂っぽい。口部部にタール付着	40
36	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[108]	-	(20)	褐色 (5VR 6.6)	差	泥岩△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。砂っぽい。口部部にタール付着	20
37	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[100]	-	(19)	に赤い褐色 (7.5VR 7.4)	差	泥岩○、長△○、石英△、石英○	底部含塩り。口部部にタール付着	30
38	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[61]	[40]	17.5	褐色 (7.5VR 7.6)	やや不良	泥岩○、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。内側淡色。やや砂っぽい。	15
39	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[66]	[40]	22	褐色 (7.5VR 7.6)	差	泥岩△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。口部部にタール付着。底部含塩り。	30
40	かわらけ	S.I.D. T-7(4)期	[50]	[14]	20	褐色 (7.5VR 8.3)	差	泥岩△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。スノードリーム。	30
41	かわらけ	S.I.D. T-7(6)期	[70]	-	(33)	浅黃褐色 (10VR 8.4)	差	長△△、長△△、石英△、石英○	内側淡色。口部にクロロ目を有す	15
第16852	かわらけ	S.I.D. T-7(6)期	[88]	[17]	12.5	黄褐色 (10VR 7.3)	差	長△△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。強烈な風化を示す。底部含塩り。底部含塩り。	60
43	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[92]	[52]	22	浅黃褐色 (10VR 8.3)	差	長△△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。口部ナメラ。底部含塩り。底部含塩り。	100
44	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[106]	-	(22)	褐色 (5VR 7.6)	やや不良	泥岩△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	20
45	かわらけ	S.I.D. T-7(6)期	[70]	-	46	褐色 (7.5VR 6.6)	差	泥岩△、半球子△、長△○、石英○	底部含塩り。外側に風化を示す。口部にクロロ目を有す。	40
46	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[98]	[50]	12.5	赤い褐色 (7.5VR 6.3)	やや不良	泥岩○、長△○、石英○、長△○、石英○	口部から底部にロカロ目を有す。やや砂っぽい。	35
47	かわらけ	S.I.D. T-7(6)期	[100]	-	46	褐色 (5VR 7.6)	不良	泥岩△、半球子△、半球子△	底部含塩り。底部含塩り。底部含塩り。	35
48	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[104]	[60]	24.5	褐色 (7.5VR 7.6)	差	泥岩△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。口部に風化を示す。	18
49	かわらけ	S.I.D. T-7(1)期	[98]	[56]	26	褐色 (7.5VR 7.6)	差	泥△△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	80
第16850	かわらけ	S.I.D. T-7(6)期	[61]	[36]	18	12.5-赤い褐色 (7.5VR 6.4)	差	泥△△、長△○、石英△、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	35
51	かわらけ	S.I.D. T-7	[61]	[40]	20	褐色 (5VR 7.6)	差	泥△△、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	30
52	かわらけ	「駒の」目付はし	[90]	38	28	浅黃褐色 (7.5VR 8.3)	やや不良	赤色斑子△	底部含塩り。口部上側に赤色斑子△。	50
53	かわらけ	「駒の」目付はし	[80]	33	25	浅黃褐色 (10VR 8.4)	差	半球子△	底部含塩り。口部上側に半球子△。	60
54	かわらけ	「駒の」目付はし	[36]	(17)	17	に赤い褐色 (5VR 7.4)	差	葉片△	底部含塩り。底部含塩り。	25
55	かわらけ	258.二段	[62]	34	18	褐色 (7.5VR 7.6)	やや不良	半球子△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	100
56	かわらけ	258.本丸裏	[70]	[21]	12.5	赤い褐色 (5VR 7.4)	差	長△○、石英○、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	25
57	かわらけ	258.本丸裏	[90]	(25)	12.5	赤い褐色 (7.5VR 7.4)	やや不良	半球子△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	25
58	かわらけ	258	[90]	[52]	26	褐色 (5VR 7.6)	やや不良	半球子△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	20
59	かわらけ	259	[68]	[33]	22	褐色 (5VR 7.6)	やや不良	半球子△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	75
60	かわらけ	259. H-1-2区	[96]	[46]	27	に赤い褐色 (7.5VR 7.4)	差	半球子△、長△○、半球子△、長△○、石英○、長△○、石英○	底部含塩り。底部含塩り。	30

第9表 かわらけ類觀察表 (2)

種類	器種	出土地点	法面 (mm)	洗成	色調・施土	形態	鷹眼形見	残存率 (%)
新石器	土師質土器 内耳	SB-1,2	-×-× (22)	並	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 雲母△、長石△、石英△、赤色粒子△	口縁		小片
1	土師質土器 内耳	SB-1,2	-×-× (29)	並	橙色 (7.5YR 6/6)	体部		小片
2	土師質土器 内耳	SAD Tr. I 65個	-×-× (23.5)	並	にぶい橙色 (7.5YR 5/4) 雲母△、長石△、石英△	体部	外面上端付着	小片
3	土師質土器 内耳?	SAD Tr. II 14個	-×-× (24.5)	並	橙色 (7.5YR 6/6)	口縁	かわらけの柄上に虹色 内面に平行付着	小片
4	土師質土器 内耳?	SAD Tr. II 46個	-×-× (25.5)	並	にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 雲母△、長石△、石英△	体部	外面上端付着	小片
5	土師質土器 内耳	SAD Tr. V	-×-× (30.5)	並	にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 雲母△、長石△、石英△	体部	外面上端付着	小片
6	土師質土器 内耳	SAD Tr. IV	-×-× (12)	やや粗	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 雲母△、長石△、石英△	底部		小片
7	土師質土器 内耳 (底面)	SAD Tr. IV	-×-× (13)	並	暗赤褐色 (5YR 3/2) 雲母△、長石△、石英△	底部	外面上端付着	小片
8	土師質土器 内耳 (底面)	SAD Tr. IV	-×-× (20) × (6)	並	暗赤褐色 (5YR 3/2)	底部	外面上端付着	小片
9 内耳? (底面)	土師質土器	SAD Tr. IV	-×-× (35.5)	並	黒褐色 (5YR 2/1) 長石△、石英△	口縁	外面上端付着	小片
10	土師質土器	SAD Tr. III	-×-× (57)	並	にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 雲母△、長石△、石英△	口縫 体部 底部	外面上端付着 外面上端付着 外面上端付着	小片
11	土師質土器	Tr. I	-×-× (60)	やや粗	明褐色 (7.5YR 5/6) 雲母△、長石△、石英△	体部	全体に擦痕 上部にやや反曲	小片
12	土師質土器 内耳	Tr. E	-×-× (35)	並	橙色 (7.5YR 6/6) 雲母△、長石△、石英△	体部	外面上に小さな凹凸があり 内面下部: 槌目で	小片
13	土師質土器 内耳	III Tr.	-×-× (27)	やや小片	明褐色 (7.5YR 5/6) 雲母△、長石△、石英△	体部	全体にやや擦痕	小片
14	土師質土器 ねじ鉢	SAD Tr. IV	-×-× (29)	並	明褐色 (7.5YR 3/3) 雲母△、長石△、赤色粒子△	体部	内面に擦状工具による3条の沈線あり	小片
15	土師質土器 すり鉢	SAD Tr. IV 46個	-×-× (37.5)	やや粗	橙色 (7.5YR 6/6) 雲母△、長石△、石英△	体部	内面に擦状工具による5~6条の沈線あり 全体に擦痕	小片
16	土師質土器 すり鉢	SAD Tr. E 1個	-×-× (36.5)	並	灰褐色 (5YR 4/6) 雲母△、長石△、石英△	体部	内面に擦状工具による4条の沈線	小片
17	土師質土器 すり鉢	III Tr.	-×-× (29.5)	やや粗	赤褐色 (5YR 4/6) 雲母△、長石△、石英△	口縁	外面上や深底 「口沿内面に擦痕(?)」あり	小片
18	土師質土器	II Tr.	-×-× (30.5)	並	橙色 (5YR 7/6) 雲母△、長石△、石英△	口縁		小片
19	土師質土器 江戸型泡造型	立99	-×-× 30.5	並	橙色 (7.5YR 8/3) 雲母△、長石△、赤色粒子△	一		左側に段状? 段階角にタスリによる斜面9ヶ所 「口沿から内面擦痕」ナメ。製作より
20	土師質土器 泡造型	U-5	116×108×39	並	浅黄褐色 (7.5YR 8/3) 長石△、石英△ (刻い削付)	一	内面に擦痕 「口沿から内面擦痕」ナメ。製作より	75
21	土師質土器 泡造型	D-5	56×35×46	並	橙色 (7.5YR 6/6) 雲母△、長石△、赤色粒子△	一	「口沿から内面擦痕」ナメ。製作より	75
22	瓦質土器	立98	-×-× 21	並	明褐色 (10YR 4/1) 雲母△、石英△	体部		小片
23	瓦質土器 火鉢?	N区	-×-× (79)	良	黄褐色 (2.5YR 6/1) 雲母△、長石△、火鉢△、赤色粒子△	口縫?	縫合部内に擦状工具による擦痕 内面に黑色斑駁及び火炎	小片
24	瓦質土器	立98	-×-× (65)	並	灰色 (K 5/0) 雲母△、長石△、石英△	口縫?	縫合部内に擦状工具による5条の沈線	小片
25	瓦質土器 炒呑?	東やぐら	-×-× (24)	良	灰色 (N 4/0) 雲母△、長石△、石英△	体部	外面上平行擦	小片
26	土製品	SAH (30)×(6.5)×(15)	やや小片	浅黄褐色 (7.5YR 8/3) 雲母△、長石△、石英△、赤色粒子△	底部	凹凸状	小片	
27	土製品	SAD 23×22×9	やや小片	浅黄褐色 (7.5YR 7/6) 雲母△、長石△、石英△	不明	細い擦痕 底付か?	小片	
28	土製品	SAD Tr. IV 46個	(35)×(24)×8	やや小片	にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 長石△、石英△	不明	細い擦痕 底付か?	小片
29	土製品 土推	SAD 42.5×8×8.5	良	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	完形	深い擦痕 「口沿の縫に擦痕」	100	
30	土製品 土推	SAD (43)×15.5×13.5	並	にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 雲母△、長石△、石英△	不明	縫面や月型の凹凸状 擦痕にミガキあり	小片	
31	土質土器	SAD Tr. I -III	-×-× (18.5)	並	にぶい褐色 (10YR 6/4) 長石△、石英△	面?		小片
32	土師器	SAD Tr. I-III	-×-× (15)	並	褐色 (7.5YR 7/4) 長石△、石英△	杯?	外面上赤彩	小片
33	土師器	SAD Tr. I-IV	-×-× (32)	並	褐色 (7.5YR 4/3) 長石△、石英△	面?	外面上ケズリ	小片
34	埴輪	SAD Tr.	-×-× (34)	並	外: 橙色 (7.5YR 6/6) 内: 褐色 (7.5YR 6/6) 雲母△、長石△、石英△			小片
35	埴輪器	SAD Tr. I-III	-×-× (20)	良	褐灰色 (10YR 5/1) 長石△	杯?	口縁	小片

第10表 土師質土器・瓦質土器・土製品・その他の土器類観察表

第3節 陶磁器類

今回の調査で発見された陶磁器は比較的多かったものの、大半が現代の擾乱等からの出土であったため、出土状態や遺物に特徴のあるものをここに紹介する。

1. 陶器（第53図1～13、図版22）

古瀬戸(1)は第Ⅱ期層盛土中より出土したものである。小片のため詳細は判断できないが、両面に灰白色の釉が確認されるので、器種は盤である可能性が考えられる。(10)は南区表層から出土した小皿である。内面および外面上半部に灰白色の施釉が施されている。

小鍋(2)は北区の遺構面より出土したものである。体部外表面は鉄釉、内面は灰白色の半透明釉が施されている。体部外表面下部には釉がないので、小型の行平鍋ではないかと思われる。

土瓶(3)はN 1区の遺構確認面より、(5)はN 1区の表層から出土した吊手部である。どちらも外面に明オリーブ灰色の半透明釉が施されている。施釉や胎土の特徴が似ているので、この2つは同一個体であった可能性が考えられる。

壺類(4)はN 1区の表層から出土したものである。外面に薄い褐釉が施されている小片である。断面を見ると層状の胎土には若干の隙間があり、全体に軟質である。

壺壺類(6)はN 3・4区の遺構確認面より出土したものである。内外面とも施釉はなく、褐灰色の焼き締めである。胎土には長石と石英が多く含まれている。

蓋(7)はN 3・4区の遺構確認面より出土したものである。上面は灰白色の釉の上に淡藍色の回柄が、磁器の染付風に描かれている。土瓶または急須の蓋と思われる。

天日茶碗(8)はN 3・4区の遺構確認面より、(9)はN 3 A区の旧トレンチ埋土から出土したものである。どちらも内外面共に鉄釉が施されており、胎土はやや軟質である。(8)にはかろうじて口縁部が残っている。

碗類(11)は南区表土より、(12)は同じく南区の表層より出土したものである。(11)は灰白色の半透明釉が、(12)は白色釉が施されている。(12)の胎土はやや軟質である。

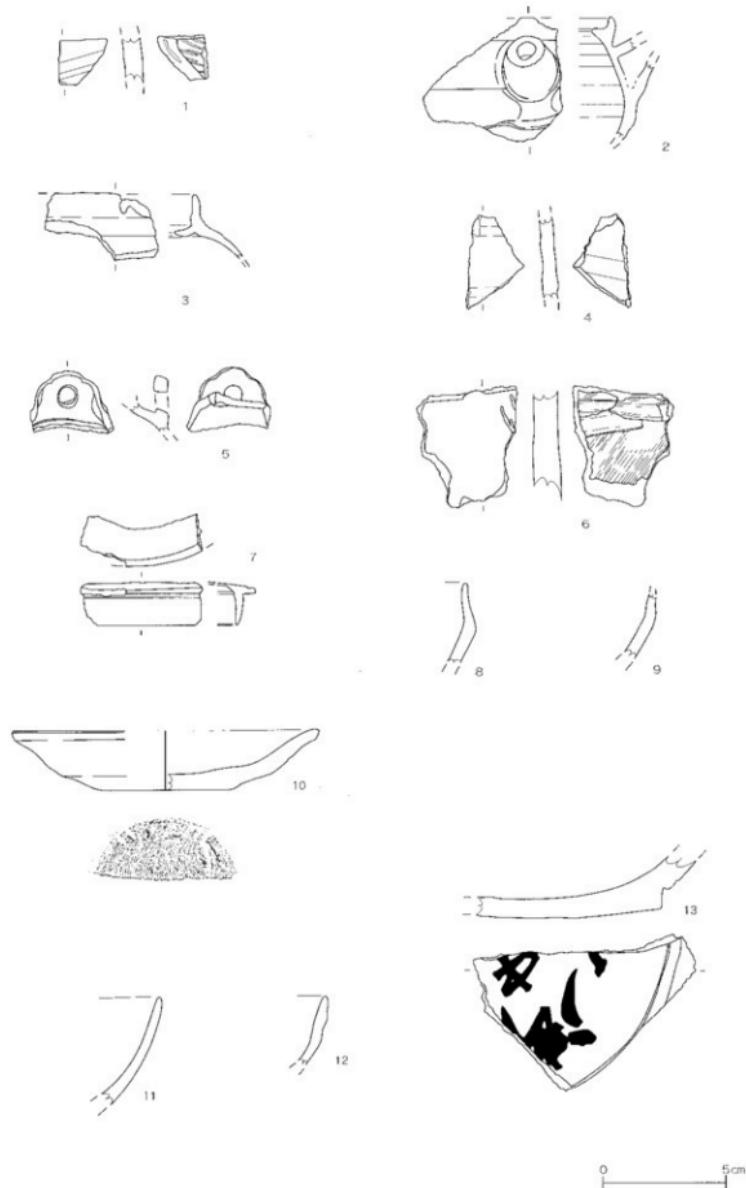
鉢類(13)は98年の電気工事立会い時に本丸内で出土したものである。外面に鉄釉、内面は黒褐色の施釉があり、底部は高台がなく釉なしである。胎土はやや軟質で、微小な隙間がある。外部底面に『御口』であろうか？墨書きが確認できる。

この他に第Ⅱ期層盛土中より陶製の不明遺物(14：写真のみ)が出土している。

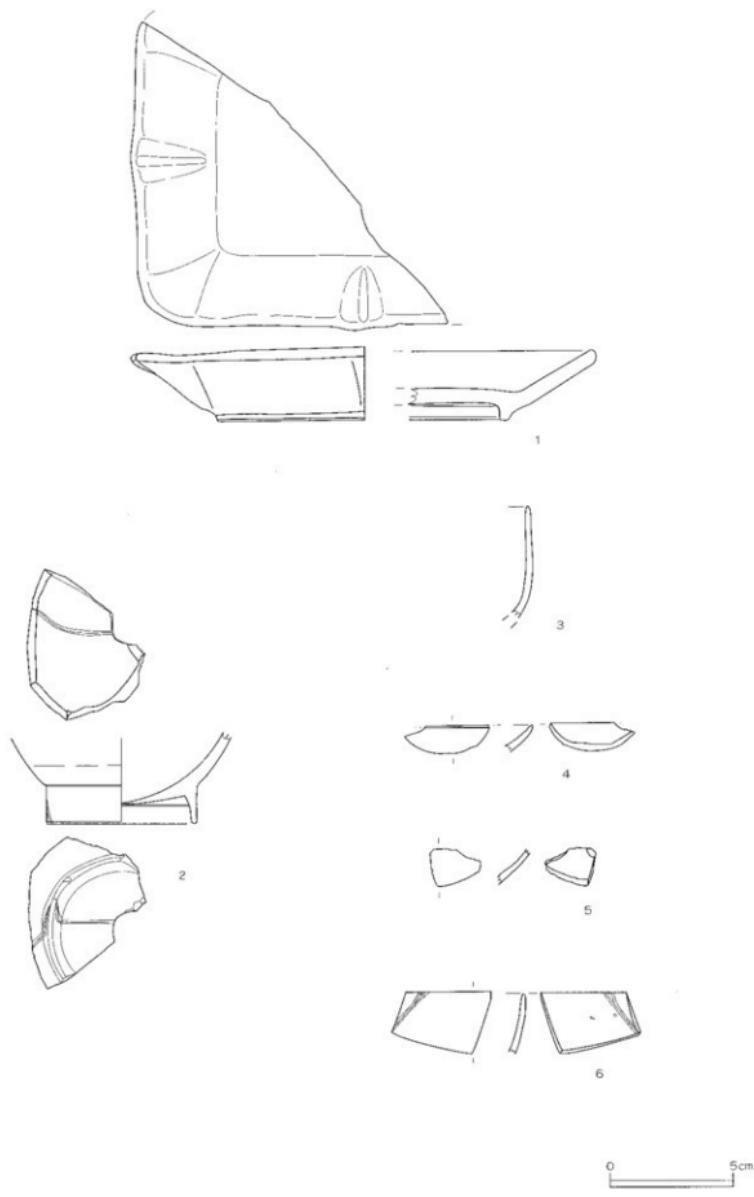
2. 磁器（第54図1～6、図版23）

皿類(1)はN 1区の堀基礎と考えられる石敷の直上面から出土した青磁の角皿である。内外面には明緑灰色の釉が、底部には白色釉が施されている。内面に陰刻された回柄は唐草あるいは鳳凰？のようにも見える。

碗類(2)は土壘トレンチ本丸側の第V期層土壘盛土表層から出土したもので、染付の広東碗である。底部が極端に薄くなっているのが特徴的である。白濁した焼き締め痕が認められる。(3)はN 3・4区の遺構確認面より出土した染付の丸碗である。(6)はN 3 A区の旧トレンチ埋土から出土



第53図 出土陶器実測図



第54図 出土磁器実測図

陶 器

拂 図	器 種	出土地点	法 量 (口径×底径×高さ) mm	色調・焼成・胎土	範囲所見	形 態	残 量 (%)
第53図	古瓶?	SAD Tr-II	-×-× (18.5)	外: 灰白色 (10Y 8/1) 内: 灰白色 (10Y 8/1)		三足輪か?	小片
1	小瓶	N区	-×-× (51)	外: 黑色 (5GY 1/1) 内: 灰白色 (10Y 8/2) 内: 灰オーブ灰 (7.5Y 6/2)	内外面施釉 外面部は粗なし		小片
2	土瓶	N1区 No.76	-×-× (27)	外: 明オーブ灰 (2.5GY 7/1) 内: 灰白色 (5Y 8/1)	外面のみ施釉 5と同一個体か?		小片
3	壺瓶?	N1C区	-×-× (33)	外: 灰褐色 (7.5YR 5/2) 内: 灰: 浅黄褐色 (10YR 8/3)	外面のみ施釉		小片
4	壺瓶?	N1区 No.75	-×-× (26)	外: 明オーブ灰 (2.5GY 7/1) 内: 灰白色 (5Y 8/1)	丸手部 外面のみ施釉		小片
5	土瓶	N3-4区 No.110	-×-× (44)	外: 内: 淡灰色 (10YR 4/1) 内: 灰白○: 石英○	2と同一個体か?		小片
6	壺瓶?	N3-4区 No.68	-×-× (18)	内: 淡黄色 (5Y 7/3) 外: 灰白色 (5Y 8/1)	内外面施釉なし		小片
7	大目茶碗	N3-4区 No.177	-×-× (33)	外: 内: 灰色 (N 1.5/0) 内: 灰白色 (5Y 8/1)	内外面施釉		小片
8	天目茶碗	II Tr	-×-× (27)	外: 内: 灰色 (N 1.5/0) 内: 灰白色 (5Y 8/1)	内外面施釉		小片
9	天目茶碗	III Tr	-×-× (27)	外: 内: 灰色 (N 1.5/0) 内: 灰白色 (5Y 8/1)	内外面施釉		小片
10	古瓶?	S区 No.114	[125] × [51] × (25)	外: 灰白色 (7.5Y 7/2) 内: 灰白色 (7.5YR 7/2)	上縁から内部が施釉 外縁より内底部は施釉なし 施釉外縁は切口目様み痕あり		20
11	瓶	S区	-×-× (44)	外: 内: 灰: 灰白色 (7.5Y 7/1)	内外面施釉	丸瓶	小片
12	瓶	S区	-×-× (29)	外: 内: 灰: 灰白色 (2.5Y 8/1) 内: 小黒色絞子を含む	内外面施釉 京燒風		小片
13	鉢	立	-× (148) × (26)	外: 黑色 (N 2/0) 内: 灰白色 (7.5Y 8/2) 内: 黑褐色 (7.5YR 2/2)	底部外縁および内面施釉 底部外縁に墨書き	墨書き「卯山」	小片
14	不明	SAD Tr-II No.100	——	内: 明オーブ灰 (5GY 5/1) 内: 灰白色 (N 7/1) 内: 灰白色 (5YR 6/4)	外面に自然紋 写真のみ		

磁 器

拂 図	器 種	出土地点	法 量 (口径×底径×高さ) mm	色調・焼成	範囲所見	形 態	残 量 (%)
第54図	青磁 角皿	SAD No.6	-×-× 28	外: 明緑灰 (7.5GY 7/1) 内: 灰白色 (10Y 8/1)	内当底部に削卓放状の剥剝あり		50
1	染付 高台付碗	SAD Tr-W	-× [61.5] × (35.5)	外: 灰白色 (5GY 8/1) 内: 灰白色 (3YR 6/1)	剥剝あり 内出筋: 灰白 保護が非常に薄い	広東碗	25
2	碗	N3-4区 No.31	-×-× (46)	外: 灰白色 (5GY 8/1) 内: 灰白色 (7.5GY 8/1)		丸碗	小片
3	染付 小皿?	N 4 CEK	-×-× (11)	外: 明緑灰 (7.5GY 8/1) 内: 灰白色 (N 8/0)	5と同一個体か?		小片
4	染付 小皿?	N 4 CEK	-×-× (13.5)	外: 明緑灰 (7.5GY 8/1) 内: 灰白色 (N 8/0)	4と同一個体か?		小片
5	碗	II Tr	-×-× (25)	外: 灰白色 (N 8/0) 内: 灰白色 (N 8/0)	燒窯あり	丸碗	小片

第11表 陶・磁器観察表

したものである。染付と思われるが遺存部には模様がない。(1)と同様白渦した焼き垂ぎ痕が認められる。

皿類(4)はN 4 C区の遺構確認面から出土した染付である。小片であり詳細は不明であるが、実測時に角度を推定したところあまり立ち上がりないので小皿と推定した。(5)とは染付の描き方、呉須や胎土の色に共通点があるので、同一個体である可能性がある。

第4節 石器類（第55図1～7、第56図8・9、図版23）

今回の調査で縄文時代から江戸時代ないしは近代にかけての石器7点が出土した。内訳は打製石斧1点、砥石2点、敲打器1器、石板1点、石筆1点、丸棒状研磨品1点である。以下各器種について説明を記す。

打製石斧(4)は南区1層下部から検出した。器体表面の風化が進行している中央付近の両側縁に抉り加工が認められる。

砥石(1・2)は北区の石敷造構内から検出した。2点とも砥面が4面の角棒状で折損品である。

敲打器(3)は土壌第Ⅳ期層中からの検出で、粘板岩製硓を転用している。右側縁と下側縁には、鎌による切削面と整工具による切開面が認められる。敲打作業面には主に右側面を使用している。正面の短破線標記範囲は石材筋理面による剥落折損面を示す。

石板(5)は旧トレンチ覆土中から検出した。表裏に研磨面が残る破片である。石材は片岩類である。

石筆(6)は板状に切開した長軸上の両端を使用しており、線条痕が残る凸面を呈する。石材は軟質で淡緑色の滑石を使用している。

丸棒状研磨品(7)は断面が橢円形で両端を折損している。石材は珪岩類である。

土浦城跡内の立会い調査時の遺物についてもここで紹介しておく。

円盤状研磨品(8)は一面が平坦に研磨を施し、側面にも面取り研磨を施している。石材は頁岩と見られる。

砥石(9)は砥面が2面残っているが、裏面は大きく失われている。

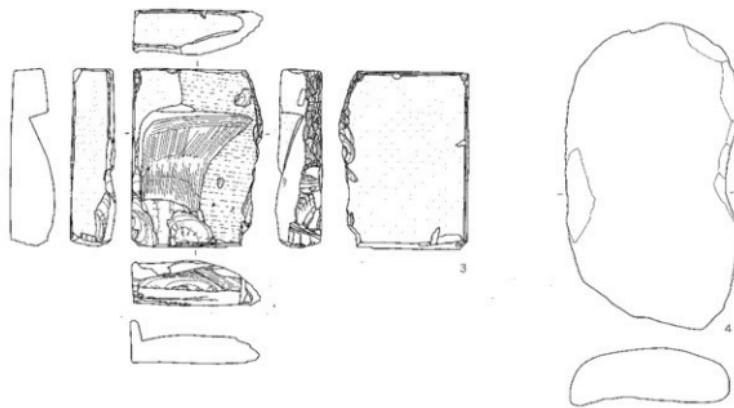
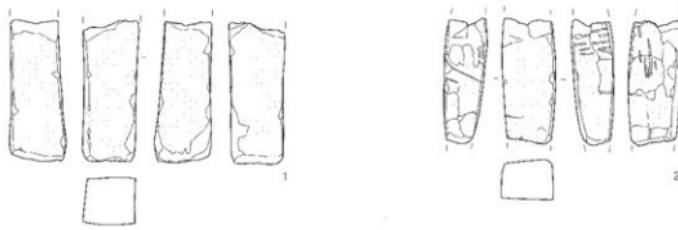
第5節 金属製品（第56図10～14、図版23）

金属製品としては、角棒状鉄製品2点と江戸時代・近代の銭貨3点を紹介する。

角棒状鉄製品(10・11)は、土壌トレンチ内の第Ⅱ期層内硬化土（第59層）中から3点検出した内の2点である。3点は30cm程の間隔を開けて硬化面に突き刺したかのように立った状態で検出した。どの資料も鏽が著しく、折損もしている。

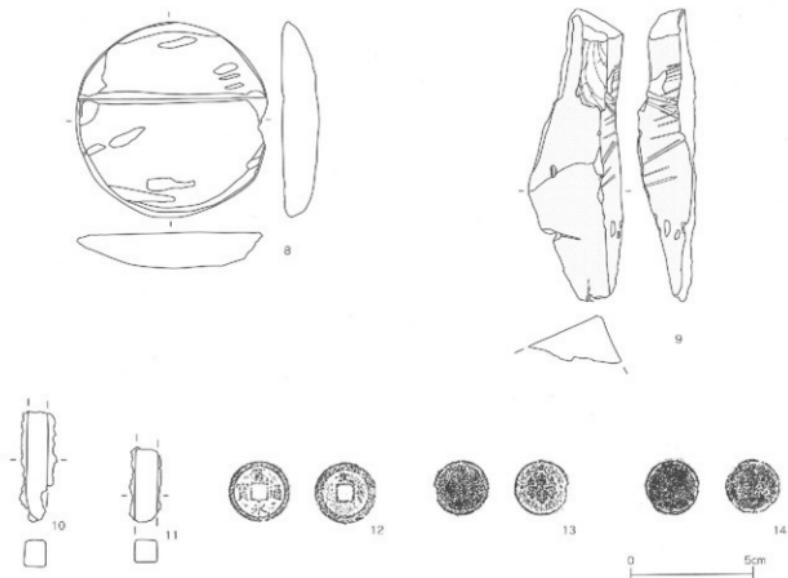
銭貨(12～14)は、N3・4区(12・13)と南区濠側拡張区の遺構確認面(14)から出土したものである。(12)は寛永通寶銅一文銭で、裏面に「文」の文字があるので、寛文8（1668）年から天和3（1683）年に鋳造された新寛永の所謂「文銭」である。(13)と(14)は近代の銅一錢青銅貨で、(13)は「大正7年」（1918）、(14)は「大正8年」の製作年銘がある。いずれの銭貨とも鏽が著しく、銭文が不明瞭になっている。

なお、その他の金属遺物として清涼飲料水『コカ・コーラ』の缶(15:写真のみ)がある。これは99年の本丸西側の電気工事立会い時に、公園砂盛土下の瓦片の集積層から出土したものである。開缶方法や缶のデザインなどが現在のものと大きく異なっており、昭和30～40年代位のものであろう。



0 5cm

第55図 出土石器類実測図



第56図 出土石器類・金属製品実測図

[単位:mm]

擇図	出土地点	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	材質	観察所見
第55図1	S AH. No.44	砥石	(37.6)	22.8	19.8	(48.9)	黒灰岩	両面が砥石。上下両端を折損。
2	N 4 A区	砥石	(51.9)	21.4	16.9	(28.7)	黒灰岩	両面が砥石。上下両端を折損。
3	N 3, SAD, T r-E	敲打器	72.1	53	17.9	102.2	粘板岩	砥を短用。端による切断痕が残る。
4	南区	打製石斧	136	69.7	17.6	267.2	墨母片岩	全面研磨化。
5	HT r	石板	(30)	(17.7)	6.8	(4.2)	粘板岩	表面に研磨面が残る。
6	S板	石斧	26	17.1	8.4	8.6	滑石	
7	N区	丸棒状研磨品	(20.3)	8.5	7.9	(2.7)	白色チャート	上下両端折損。
第56図8	東ヤグラ、ヤグラ門間	円盤状研磨品	79.3	77.2	14.7	108.2	灰白色頁岩	表面は平滑面。裏面に凸凹と縦筋による目盛りも認められる。
9	H-10	砥石	120	(33.8)	24.2	(76.1)	粘板岩	細かな線状痕が認められる。
第63図	外丸、B-1-b区、I層	鉛鉄石	(146.8)	55.1	33.8	(329.1)	ホルンフェルス	両端片面側を折損。

第12表 石器類観察表

擇図	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量(g)	観察所見
第56図10	鉄製品	土器トレント新Ⅲ期	(46)	9	11	(10.4)	断面方形。刃?
11	鉄製品	土器トレント新Ⅲ期	(31)	9	9	(6)	断面方形。刃?

擇図	器種	出土地点	外径(縦)	外径(横)	内径(縦)	内径(横)	鍼厚	重量(g)	観察所見
第56図12	古銭	N3-4区	25.56	25.43	20.41	20.34	1.23-1.33	2.6	寛永通宝、裏面:「文」
13	古銭	N4AK-1	23.15	23.21			1.22-1.27	3.4	樹一錢吉備銭 裏面:「大日本」「大正7年」
14	古銭	南区、油舞松原区	22.97	23.01			1.20-1.25	3.3	樹一錢吉備銭 裏面:「大日本」「大正8年」

第13表 金属製品観察表

第6節 炭化物（図版24）

握り飯状炭化物（図版24-1）

本資料は、第2期土塁（第Ⅲ期層）中の23層から出土したもので、今回出土した握り飯状炭化物の中では最大のもので、大きさ約72.1×64.4mm、重量約37.5gを測る。肉眼観察でも粒子状の炭化物の集合体であることがわかるが、分析の結果イネの炭化胚乳であることが確認された。なお、分析の詳細については第7章4を参照されたい。

炭化物（図版24-4）

本資料は上記の握り飯状炭化物の下層、第26層の灰混じり層から出土したものである。大きさは約30.0×28.3mm、重量約2.8gである。この資料についても分析を実施しているので、詳細は第7章4を参照されたい。

第7節 その他の出土品（第57図 図版24）

以下の出土遺物は電気工事立会い時に出土したものである。近・現代の土浦城跡の利用状況を考える資料として収録した。

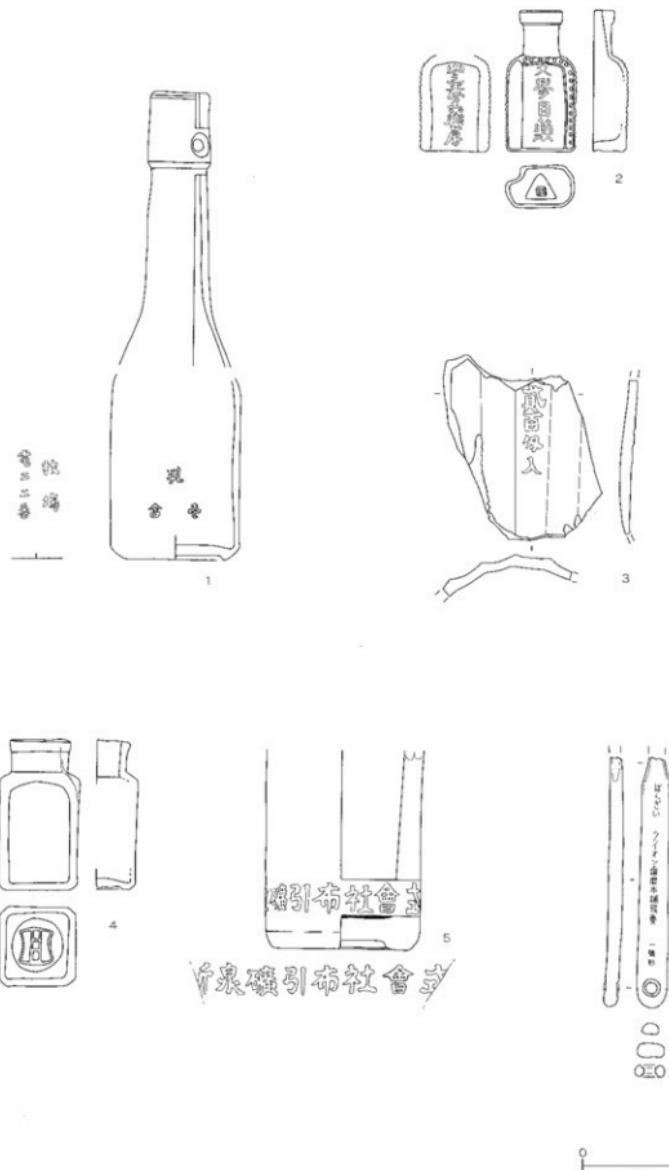
硝子製品（1）は98年時に二ノ丸の高麗門前から出土したもので、牛乳瓶と考えられる。（2・3）は99年時に二ノ丸池西側の公園砂盛土下の暗褐色土から出土したものである。（2）は日薬瓶で、現在の参天製薬株式会社の製品である。（4）は二ノ丸管理事務所脇の同じく暗褐色土から出土したもので、インク瓶と考えられる。（5）は98年時に二ノ丸から出土したもので、「鉱泉水」の表記があるので炭酸水を内容物とする瓶と見られる。

骨製品（6）は（2・3）と同じ場所から出土したもので、歯ブラシの把手部分である。器体が緩やかに反っており、肋骨等を材料にしたのではないかと考えられる。現在のライオン株式会社製品である。

煉瓦（7：写真のみ）は2000年時に二ノ丸の猿小屋前の濠の埋立土中から出土したものである。元々は構造物の一部と考えられ、非常に脆い砂質のコンクリートを沈み目地にして、大きさ約23×11cm厚さ5.5cmの普通煉瓦をイギリス積みまたはオランダ積みにしたものである。なお、このような煉瓦は98年時に二ノ丸の仕切門跡前の濠埋立土からも出土している。このことから、近代に土浦城内に煉瓦構造物が存在したことと、これらの濠の埋め立てが近代に行われたものであることが推定される。なお、古写真によれば本丸内に建てられていた郡役所の門柱が煉瓦造りであるので、この一部である可能性も想定される。

種 類 No.	器 種	出土点	法 面 (長さ×幅×厚さ) mm	色調	性質	形 態	理 化 (%)
第57図1	ガラス瓶	立98 二ノ丸引込	[193] × 53 × 4 ~ 8	明青色	黒糊 「~乳」「壹合」「~吹」と「~番」「~二番」 黒吹きガラスによる気泡を含む	牛乳瓶	60
2	ガラス瓶	東城公園	58 × 28 × 1.5 ~ 5	無色	黒糊 「大樂日第三」「參天紫菊瓶」 黒吹きガラスによる気泡を含む	栄瓶	100
3	多角形 ガラス瓶	立99 東城公園	(7.6) × × 5	明青色	黒糊 「武百友人」 黒吹きガラスによる気泡を含む		10
4	ガラス製 小型角瓶	東城公園	62 × 32 × 3 ~ 6	透明	黒吹きガラスによる気泡を含む	インク瓶か?	100
5	ガラス瓶	東城公園二丸 賀波Trd山砂中	82 × 64 × 8 ~ 12	深緑色	黒吹きガラスによる気泡を含む 黒糊 「~式會社有紀源~」	サイダー瓶か?	20
6	骨製品	立99 東城公園	(103) × × 6	乳白色	動骨を加工 黒糊 「ばんざい ライオン海苔本舗 発光 一分形」	歯ブラシ	50

第14表 その他の出土品観察表



第57図 その他の出土品実測図

第6章 考 察

第1節 遺構

1. 土壘の構築方法

今回の調査によって確認された土浦城跡の基本層序を整理すると、土壘部分では約6期の土層から構成されることがわかった。状況を整理すれば下記の通りとなる。

- ・基底部（陸化はしているが、まだ人の生活は確認できない）
- ・第Ⅰ期（今回の中では土浦城の場所に人が住んでいたと考えられる最も古い層）
- ・第Ⅱ期（今回確認された中では最も初期の土壘〔第1期土壘〕）
- ・第Ⅲ期（拡張された〔第2期土壘〕）
- ・第Ⅳ期（より拡張された〔第3期土壘〕）
- ・第Ⅴ期（土壘整備最終段階と考えられる葺石を伴う〔第4期土壘〕。建物跡《SB-1》，堀跡《SAH》を作り）

これらの土層は、基底部および第Ⅰ期の土層は砂やシルト分などを含む、大別すれば水成土と推定されるものである。それに対し土壘の盛土は、第Ⅱ・Ⅲ期の土層が砂やシルト分を含まない陸成の上で、その後拡張による第Ⅳ・Ⅴ期の土層ではまた砂やシルト分などを含む水成土が使用されていることが確認された。一般にいわれる漆を掘削した土で土壘を造る『搔掲城』であるならば、土壘の盛土、特に初期土壘に当たる第Ⅱ・Ⅲ期の上層は、漆を掘削した水成土が盛り上げられるはずであるが、土浦城の場合今回の調査からはこの時期の土壘は『搬入土』によって構築されたということになり、いわゆる通説とはだいぶ異なる可能性が想定される訳である。

この土壘の構築について、まず①どこから運んできたか、②どうして運んでくる必要があったのか、の2つが問題として考えられる。①の「どこから運んできたか」であるが、今回の調査で、弥生土器・土師器・須恵器等の細片が土層中から検出されており、また88年の調査時にも縄文後期の土器片が出土していることが手がかりとなる。これらの時代の遺跡が存在する場所が、土壘の盛土の搬入元として最も可能性が高いと推定されるが、現在のところ北東側の木田余台、西南の宍塙・上高津周辺などではこれらの時代の遺跡が存在することを確認しており、搬入元の可能性も想定される。ところで土浦城本丸はこれらの場所とは約3km、最も近い下高津や真鍋台でも約1km離れており、城まで大量の土砂(註1)を運んでくるのは決して容易なことではなかったろうと推測される。そこで②の「どうして運んでくる必要があったのか」であるが、それは漆の掘削土を土壘の構築に使用できない何らかの理由があり、遠方からでも運んでこなければならなかつたためと考えることができる。後述する公園内の工事立会いの結果、城跡内特に二ノ丸南側等では想像以上に土地が軟弱であることが確認されたことから、城跡周辺の地盤が非常に軟弱で、漆の掘削土は初期土壘の構築には使用できなかつたのではないかということがまず理由として考えられる。ただしⅣ・Ⅴ期の土壘は水成土を用いていることから考えれば、単にそれだけの理由であるとは言い難い。そこで、初期土壘構築以前に漆は掘削されており、掘削土はその時期の城内整備等で既に使用されてしまっていたのではないかと推測することも可能ではあろう。ただしこの場合、例えば第1期に城の前身が存在したと仮定した場合は、



第58図 土壙構築方法概念図

濠はあるが土壙の存在しない施設を想定しなければならないことが欠点として考えられる。いずれにしても今回の調査だけでは確定的なことは言い切れないが、上浦城の築城に関わる問題提起ができるだけでも成果があったと考えている。

また今回の調査状況で見る限りでは、本丸東側の土壙の整備・拡張にあたっては、東（濠）側の土壙端部の位置を変えずに、次第に西（本丸内）側に拡張していったことが土壙断面から読み取れる。このことから、今回の調査部分である本丸東側においては、最も占い第1期土壙と濠の頭から濠と土壙の位置関係は連続しており、大きな変化がなかったことがわかる。どうやらこの部分については、築城から廃城に至るまで城内の繩張り等の改変に該当するような、大きな改修が行われたことはなかったのではないだろうか。

2. 土壙の「葺石」について

今回の調査によって確認されたもののなかでも、当初まったく予想がされなかつた最大の発見が、この土壙の「葺石」である。この葺石状造構は第4期土壙の濠側斜面上部に握り拳人の円碟を貼り付けたもので、最上部は土壙の濠側天場端部の跡跡《SAH》の石敷と一体化しているのが特徴である。

この遺構は、拳人の円碟を材料にしていることや、裏込めを持たない構築法などの特徴において古墳に見られる「葺石」とは共通点が見られるが、城郭施設に用いられる、いわゆる「石垣」の石の使い方とは大きな相違点がある。石垣の場合、防御上の見地から斜面を登り難くするために角度が45度～75度程度までの急峻になっていることが多いが、本葺石部分の斜面角度は下の土壙部分と変わらず約40度のままであり、また葺石部分の斜面長もせいぜい2m程度であることからも、防御上の見地から石垣の代用として採用されたものとは考え難い。他の何らかの理由で整備されたものと考えたほうが自然である。

そこで遺構の周囲に目を向けて見ると、この葺石の上部、土壙の天場端には塀基礎が存在していることに着目される。塀基礎がここにあるということは塀が土壙の天場端に建てられていたということになり、通常土壙の塀の外側にあるべきいわゆる「犬走り」部分がこの調査された土浦城の土壙部分には存在しないことになる。犬走りは、土壙上の塀の場合には塀基礎の安定のために必要なものといわれているが、石垣の場合には石垣の端部に塀が建てられるため犬走りは存在しない。このことを考えれば、上浦城の塀のあり方は土壙上の塀のあり方というよりも石垣上の塀のあり方に類似しており、この葺石によって石垣と同様の役割を果たすことができたものと推定される。

この堀との関係において、葺石が土壘よりも優れていると考えられるものにまず法面の保護が挙げられる。表面が土である普通の土壘の場合、堀の屋根などに降った雨が土壘の表面に落ちると落ちた場所の地面が洗掘されることがある。特に法面周辺部分では平坦地より洗掘が進みやすく法面の崩壊に繋がるため、犬走りなどの平坦部で堀の雨落ちを受ける必要が出てくるが、斜面に葺石することによって堀からの雨落ちを法面で直接受けることが出来たのではないかと推定される。ただしそれだけの理由であれば、犬走りがなくなったことによって得られる利点は土供天場の武者走りが約50cm程度拡がることしかない。そこで次に考えられるものとしては意匠上の利点がある。復元整備された古墳の葺石を見ると、まるで石垣と見紛うばかりの威容を見せているものも少なくない。その点から推定すると、この土壘上の葺石によって、通常の土壘の景観ではなく鉢巻石垣に似せた景観を生み出そうとした可能性が想定できるのではないだろうか。関東の城の場合、地質上の理由もあって石垣が少ないので以前から指摘されていることではあるが、石垣に対するオマージュとしてこのような整備手法を採用したとするならば、これは非常に興味深いことである。高田徹氏によれば、このように石垣を葺石で代用している事例としては、愛知県西尾城の天守下の石垣下段が平石の貼り付けになっていることを教示いただいた。また状況や年代は異なるものの、つくば市の大田城跡の本丸南西虎口においても、門の左右に多量の円碟の集積が発見されている。他にこのような事例が存在するのかどうか、また土浦城の他の部分ではどうだったのか、今後の調査・研究を待ちたい。

3. 推定される堀

今回の調査目的の1つであった堀に関する資料収集として、遺構・遺物の両面から幾つかの資料を提示することができる。

まず、遺構の面であるが、土壘上から発見された一連の堀遺構《S A D》から確認できる情報がある。概述すると

- ①堀は土壘の濠側天場端にあり、濠側に犬走りが存在しない。
- ②確認された部分の堀は全体としては直線状であるが、細かな屈折もある。
- ③堀の基礎として円碟の石敷が用いられており、その幅は約60cm程度である。
- ④石敷基礎の中に柱の痕跡は確認できない。
- ⑤堀に付随する控堀及び控柱と考えられる遺構が確認されている。
- ⑥控柱跡の中に、漆喰塗り角柱状の柱痕跡が濠側や斜め向きに検出されたものがある。

などがある。これらのうち①・②は設置場所及び外観・意匠等について、③～⑥は構造についての資料となる。まず①の情報については、葺石などとともに土浦城の外観の特徴になる可能性がある。詳細は前項を参照されたい。②は城郭の堀に良く見られる「屏風折れ」が土浦城にも存在していたこと、及びその屈折場所・角度等についての情報を提供している。なお、通常の土壘の場合は土壘に細かな屏風折れを設けることは出来ないため、直線状の土壘を造って土壘上の堀だけに折れが設けられるが、今回確認された土浦城跡の場合は土壘法面の葺石が堀基礎と一体的になっていることから見れば、葺石面にも堀と同様に細かな屏風折れが存在していた可能性も考えられる。今後検証の必要性があるが、確認できれば土浦城の堀を考えるうえでの意匠的な大きな特徴であろう。

次に③～⑥の構造についてであるが、まず③からは、堀の下部幅が約2尺を越えないことが、④か

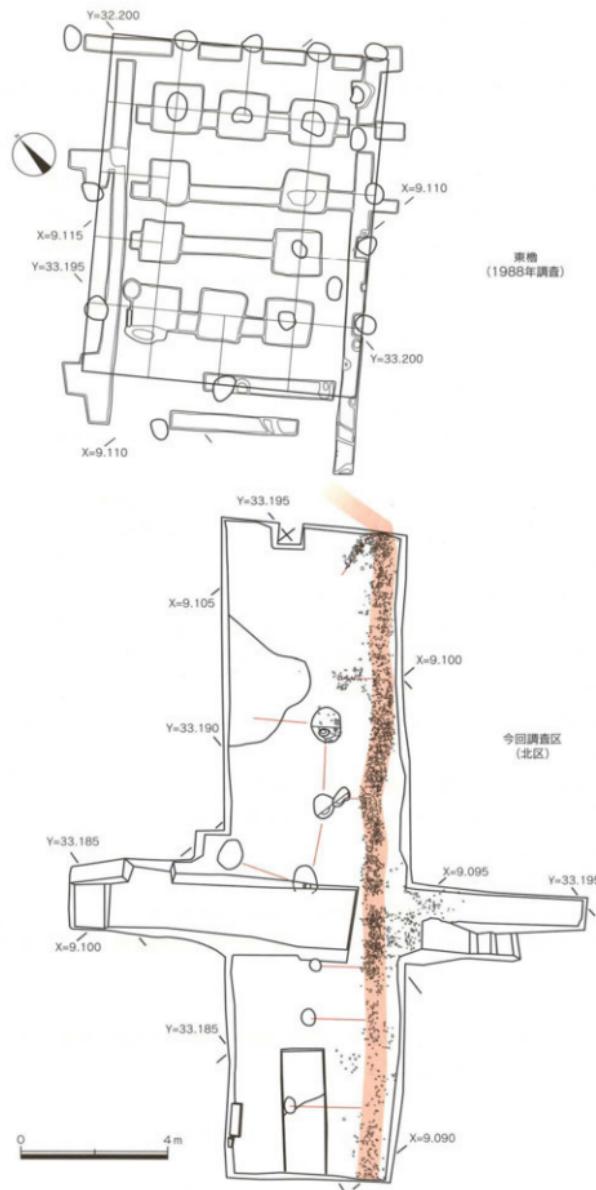
らは親柱が存在しないか、または掘立柱でないことがわかる。そして次の⑤からは控堀・控柱が存在していたことがわかる。のことから土浦城の堀は築地堀や練堀のような親柱を持たない形式のものではないことがわかり、④についても掘立柱ではないことに絞り込むことができる。推定ではあるが本来は石敷の上に礎石があり、その上に土台が敷かれているか、あるいは礎石上にほぞ穴をあけて親柱を固定する形式のいずれかであろうと考えられる。また⑥の控柱が斜めになっていることからは、堀親柱との間に貫を設げず、直接に親柱を固定する方法の可能性が想定される。

次に遺物から確認できる情報であるが、出土瓦から得ることのできる情報がある。概述すると、

- ①出土瓦の中に軒瓦が極端に少ない。
- ②板塀瓦の出土が多い。
- ③丸瓦は比較的多く出土しているが、棟瓦と考えられるものは1点（124）しか見られない。
- ④板塀瓦には右棟・左棟どちらも存在する。
- ⑤板塀瓦の裏面に出桁固定用の突出部があるものがある。
- ⑥小型板状の瓦（板塀熨斗瓦）がある。

などがある。まず、①・②からは堀の屋根に使用されている瓦が板塀瓦で、半瓦・丸瓦で構成される本瓦葺ではないことが推定できる。③からは、棟の部分の瓦は棟瓦が使用されているのではなく、丸瓦が利用されている可能性が推定できる。④からは屋根は方屋根ではなく、棟を真ん中にした両屋根であることが推定される。⑤からは板塀瓦を縱方向に重ねた状態では使用しないことはもちろんのこと、出桁から先の軒の張り出し具合及び堀の上部幅を推定するための資料となる。概ね軒の張り出しは出桁を含め10cm程度ではないかと推定されるほか、腕木の長さが片側30cmを超えないことがわかる。⑥の板塀熨斗瓦の存在は、堀の瓦の葺き方及び意匠上の特徴になると考えられるが、平瓦も出土していることから見れば平瓦も熨斗瓦として転用されている可能性も想定され、双方を組み合わせて使用したこととも考えられる。

このように堀の構造については比較的いろいろな資料を収集することができたが、今回の調査でも以下の点については不明な点が残されている。はじめに、今回確認された部分では控柱と控堀がどちらも存在していたと考えられるが、なぜこの短い長さの間に2つの工法をあわせて用いなければならなかっただけかということが挙げられる。可能性としては堀の構造の違いや、堀内側に存在する何らかの施設・造作等による違いが堀の支持構造に違いを与えたとも考えられる（註2）が、断定することはできない。そして非常に大きな問題としては、堀は東櫓にどのように取り付いていたのかという疑問がある。確認された堀の位置は土壘の外側端であることから見れば、堀は東櫓の南東角付近に取り付くと考えるのが一般的であるが、調査区の北端の堀跡及び控堀の確認状況からは堀が大きく内側に屈折している可能性が高いと推定され、その角度を延長すると堀は東櫓の南側中央部に取り付くことが考えられる。ただし延長線上にある88年の調査トレンチでは堀の基礎痕跡が確認されておらず、この部分の取り付けを断定することができない（第59図参照）。これらの点については復元するためには避けは通れない問題であり、充分な調査・検討が必要であろう。



第59図 検出された堀跡と東牆の関係

4. 文献史料・古絵図等との整合

歴史時代の遺跡の移り変わりを検証する方法として、古文書や古絵図、古写真などの文献史料と、発掘調査によって得られた資料を整合させてみるという方法がしばしば行われている。土浦城跡についてもいくつかの史料が残されていることから、これらと発掘資料との整合を考えてみたい。

まず古文書であるが、改修記録等については第1表のとおりである。今回の調査区に関係するものとしては1620（元和6）年の東櫓建築、1664（寛文4）年の土塁上の扉を瓦葺に改修、1707（宝永4）年の東櫓修復、1766（明和3）年の東櫓・扉の修理などがある。施設の概要・詳細についての記録としては長島家文書『御城内外御定法書』〔成立：1853（嘉永7）年〕中の「御城内外御ほり幅並上居塀高之事」に、

- ・「太鼓御門 土居高七尺五寸 塀高七尺」
- ・「東御やぐら台巻丈 土居九尺 塀七尺五寸」
- ・「同石落之辺 土居八尺 塀七尺」

の記載が見られる。また、閑家所蔵『秘公滿律』〔成立：19世紀前半。ただし18世紀前半（正徳期頃）からの内容も含まれる〕中には

- ・「御本丸大筒狭間鍾鎗？」口が14口ある、「霞御門北十三番」「太鼓御門脇十四番」。
- ・「同所（御本丸）石落口」が5ヶ所ある、そのうち1つが「御東櫓脇」。

といった記載もある。

次に古絵図であるが、参考になるものとしては、

①『常州土浦城図』(註3)〔作成：1645（正保2）年頃〕(卷頭図版1)

- ・狭間のある白い扉。折れ表現なし。扉南東のコーナー部は曲表現。
- ・扉と櫓門の屋根は茶色、東・西櫓の屋根は暗灰色。
- ・鐘楼が表現されていない。
- ・霞門拝形の表現なし。

②『常州上浦城図』(註4)〔作成：元禄期（1688～1704）〕

- ・狭間のある白い扉。折れ表現あり。コーナー部は多角表現。
- ・扉の屋根は暗灰色。
- ・「鐘樓 二間半」書付あり。

③『土浦御城之図』(註5)〔作成：1817（文化14）～1820（文政3）年〕

- ・白い扉。狭間表現なし。折れ表現はあるが、東櫓一櫓門間は直線表現。コーナー部は直角表現。
- ・扉の屋根は暗灰色。

などがある。

古写真については明治以降のものとなるが、東櫓を東側から撮影した写真（図版1-1）によれば、

- ・東櫓と鐘楼は写っているが、扉はまったく見えない。
- ・鐘楼は6本柱。本瓦葺か？
- ・東櫓の基礎部分は土壇状に一段高く、犬走り状の平坦部がある。

などが確認できる。

これらの内容を今回の調査記録と整合してみると、まず基本的なことではあるが、土塁上に扉及び

鐘楼が存在することが整合する。また、堀の屋根が暗灰色の瓦葺きであることも今回板塀瓦が多量に出土していることと合致する。鐘楼については古絵図では4本柱表現であるが、古写真と合致する6本柱の可能性が高いことが発掘調査から確認できたほか、長辺が約2間半であることも史料と一致する。堀の位置形状については、今回の発掘調査区内では全体としては直線的であるが、いくつか折れがあることが確認されている。古絵図に見られる直線表現・折れ表現は、折衷的表現ではあるがどちらかの特徴を強調したものと考えられる。なお「東櫓脇」に存在したとされる「石落」について詳細は不明であるが、位置的には今回控堀が確認された東櫓南隣である可能性がある。あるいは堀に設置した石落の何らかの構造的問題のために、この部分を控柱ではなく控堀にしていた可能性が考えられる。また同様の想像が許されるのであれば、南区で確認された基礎地業跡も、「御本丸大筒狄間銛縫口」の「太鼓御門脇十四番」に伴うものである可能性も想定されるかもしれない。

次に史料に基に造構の年代等を推定してみたい。今回の調査の結果土塁は1~4期に大別されるが、このなかで堀及び鐘楼の遺構が検出されたのは最終の第4期土塁のみである。このことから、現在確認される史料中の堀及び鐘楼の建築を示す文書や絵図表現については、すべて第4期土塁の時代のものと判断することができる。古文書によれば鐘楼の建築は1620(元和6)年、土塁上の堀を瓦葺きに改修したのは1664(寛文4)年の事とされている。また古絵図では1645(正保2)年頃作成と推定される『常州土浦城図』に堀の描写が確認される(註6)。これらより考えれば、まず第4期土塁の櫓塀は鐘楼が建築される1620年以前ではないかと推定することができる。また堀の建築については、まずは古絵図に描かれた1645年以前と考えられるが、1664年の瓦葺きに改修した記録も考慮しなければならない。今回の調査で確認された堀跡には大規模な改修跡が見られず、また斜面の葺石直上からも板塀瓦が出土していることから考えれば、確認された堀跡は①1645年以前に瓦葺きの堀が存在していた。扱って造構の年代は1645年以前。または、②1645年以前にあった堀を1664年に大改修して瓦葺きにした。扱って造構の年代は1664年。の2通りが考えられる。史料をそのまま読めば②の方が自然であり、堀の屋根の色が東・西櫓と違って茶色になっている点とも合致するが、この場合は櫓門の屋根も茶色になっているため、堀と同様の瓦葺きへの改修を、次の絵図の年代である元禄期以前に想定しなければならなくなる。しかし現在確認されている史料にはそれを示すようなものは見られず、1987年に実施した櫓門の解体調査でも屋根葺きの変更は確定できていない(註7)。

最後に、発掘調査では確認されたが史料上には記録のないものについて紹介したい。

堀の控柱、控堀についても史料上の記載・表現は確認されてはいないが、最も大きなものとして土塁外側法面で確認された「葺石」の問題がある。この葺石状造構については前述のとおり土浦城の意匠・技術的な特徴になることが推定されるが、葺石について記載した古文書・表現した古絵図とともに現在のところ確認されていない。これらの状況を優先した場合、堀の建築後かなり早いうちに葺石面は「濠側土層」によって被覆されてしまい、そのため古絵図などには葺石が描かれていないとする考え方もある。ただし葺石直上からやや摩滅気味の板塀瓦(80)が出土していることを考えれば、濠側土層による葺石被覆までには、少なくとも瓦葺の堀建築後遺棄された瓦片が摩滅する位の時間があったと推定するほうが自然である。何らかの理由のために表現されなかったのではないかだろうか。

第2節 遺物

1. 板塀瓦について

板塀瓦は通常の建物の瓦葺きなどでは使用せず、堀の屋根や住宅の霧除け庇、上蔵の窓庇など限定された部分に使用される瓦である。土浦城跡に板塀瓦が存在することは、88年の土浦城跡の発掘調査でも確認されており、今回の調査目的の1つである堀資料の収集という観点から見れば、板塀瓦は非常に重要な資料ということができる。そこで今回確認された出土品から得られた新たな情報などをもとに、土浦城跡の板塀瓦について考えてみたい。

板塀瓦の基本形は、平板的な平瓦部と棟部から構成されているシンプルなものである。現在見られるものは、このほかに平瓦部に「水返し」と呼ばれる棒状の突出部が存在し、棟部との隙間を埋める事によって雨仕舞いに対応しているが、土浦城の出土品にはこの水返しが存在しない。推定ではあるが、土浦城跡の板塀瓦は水返しが設けられる以前の古い形態を示しているものと考えられる。大きさについては88年出土のものが38.7×32.2cm、今回出土した中で最も状態の良い（86）が35.1【現存値】×31.5cmで、概ね大差ないことがわかる。「圓錐瓦屋根」によれば板塀瓦の大きさは、長さは30.0（1尺）・36.0（1尺2寸）・39.0（1尺3寸）・45.0（1尺5寸）cm、幅が24.0（8寸）・27.0（9寸）cmとされており、土浦城跡のものは長さ1尺2寸に該当するものと考えられるが、幅はやや広く、1尺または1尺1寸に相当すると思われる。これ以外の基本的な形態的特徴としては、共通なものとして頭部近くの平瓦部に2ヶ所の釘穴があることや、平瓦や棟瓦に比べ瓦厚が厚いことなどが挙げられる。そのほかには一部前節の3にも示したが、

- ①右棟・左棟どちらも存在する。
 - ②裏面に出桁固定用の台形の突出部があるもの〔(106)など〕がある。
 - ③釘穴が斜めに穿孔されているもの（102）や、瓦が反りを持つもの（98）もある。
 - ④棟部と重なる平瓦部にV字形の水切り溝が設けられているもの〔(93)など〕と、存在しないもの（86）がある。
- などを確認することができる。また製作上の共通特徴としては、棟部と平瓦部の接合部に喰い付きを良くする為に粗い櫛目による調整が行われていることが挙げられる。

これらの特徴とは別に、基本は同じであるが形状に特徴的な差異が確認されるのが角棟部の断面形である。観察してみると（A）棟部の上面の角部がややなだらかな曲面を持つもの〔(79)など〕と（B）四角く角張っているもの〔(86)など〕の2種類が存在することが判る。上記の特徴についてこの分類を元に再確認してみると、（A）の曲面タイプの瓦には裏面の突出部やV字形の水切り溝が存在していることが確認できる。それに対し（B）の角張るタイプの瓦については遺存状態の良いものが少ないため判断は難しいが、少なくとも（86）については裏面の突出部やV字形の水切り溝の存在を確認できない。

他にこの瓦を分類するための特徴となりそうなものに胎土の違いがある。胎土については比較的砂質のもの〔(80)など〕と、粘土を中心とし、やや生焼け気味で粉っぽく感じられるもの〔(79)など〕、その中間的形質を持つもの〔(83)など〕、そして緻密で焼成も良好なもの〔(86)など〕が存在していることがわかる。先ほどの棟部形状による分類をこの胎土についても合わせてみると、（A）タイ

ブには砂質・粘土質・中間質の3種類が、(B) タイプには緻密なものが使用されており、胎土の面からも同様の区別が可能である。

ところで、このように瓦の形状や胎土が異なる理由としては、製作された場所（生産地）が異なるか、あるいは生産された時期（年代）が異なることが考えられる。ただし板堀瓦の場合は、軒丸瓦や軒平瓦の瓦当面のような年代判別・産地傾向などが観察できる特徴的な部位が存在しないため、これらの判断は非常に難しい。そこでまず産地の問題についての資料を得るためにパリノ・サーヴェイ（株）に依頼し、理化学的な胎土分析による検討を実施した。資料は(B) タイプのサンプルとして(86)を、(A) 一粘土質タイプのサンプルとして(96)を用い、分析を実施した結果、この2種類の瓦については細かな成分組成は異なるものの、どちらも土浦城跡周辺の地質学的背景とは調和していることが分かったため、断定はできないものの生産地についてはどちらも土浦近郊である可能性が想定された。分析の詳細は第7章4を参照されたい。

次に年代であるが、手がかりとなりそうなものとして(86)で確認された『前澤』刻印がある。この刻印は平瓦などでも確認されているが、この前澤氏は江戸後期に藩より「瓦師」を任命した（註8）家で、明治期以降も瓦商を営んでいたことが史料や記録に残されている。古写真から看は1884（明治17）年の東櫻焼失以前に破却されていたことが確認されるため、瓦の年代がこれより新しくなることはないと考えられることから、『前澤』瓦については概ね江戸後期～幕末頃の年代を示すものと考えられる。

ところで、この板堀瓦の使用が確認されている城郭としては、現存建物では長野県小諸城、滋賀県彦根城、京都府二条城などが、出土が確認されている城跡としては栃木県壬生城跡、埼玉県忍城跡、愛知県挙母城跡などがある。これらで使用されている板堀瓦を今回の分類と照ら合わせて見ると、(A) タイプは挙母城跡、(B) タイプは小諸城、壬生城跡（註9）、忍城跡などと形態が類似している。よく見るとこのうち壬生城跡、忍城跡出土瓦には上浦城跡出土のものと同様のV字形の水切り溝が確認でき、また小諸城使用瓦にはこれらの中で唯一水返しが存在している（註10）。これらの瓦については壬生城跡出土瓦が17世紀前半から1870（明治3）年以前、忍城跡は18世紀頃（註11）、挙母城跡は1785（天明5）～1870（明治3）年（註12）のものと考えられており、概ね18～19世紀の資料として捉えられるものが多い。土浦城跡出土板堀瓦は文献史料から見た場合17世紀半ばまで遡る可能性が想定されるが、前述の通り(B) タイプの『前澤』瓦は19世紀頃のものと推定される他は形態的特徴にも乏しく、現状で瓦の年代を推定することは難しい。消去法で見れば、残された(A) タイプの瓦のどれかは当初の瓦である可能性があると推定される。

今後の調査研究の方向としては、これら板堀瓦の分類の再検討をはじめ、その他の瓦を含めた製作年代や産地の特定を進める必要がある。今回板堀瓦の比較資料として、土浦城跡以外で出土例が確認されていない中心飾りが二葉文の瓦についても胎土分析を実施したところ、予想とは異なり土浦城跡周辺の地質には確認されていない結晶片岩が含まれていることが明らかとなった。この瓦は現在土浦城跡で確認されている軒平瓦の中では最も古式と考えられているもので、比較的出土量も多く近世土浦城の初期の施設整備にまとめて使用されたと思われる瓦である。のことから、江戸前期に行われた土浦城の施設整備に使用された瓦については、地元生産ではなく搬入品である可能性が新たに想定されることとなった。それに対し板堀瓦はいわば地元の粘土を使用した地元生産の瓦であると推定さ

れるが、文献史料から見た場合、堀が瓦葺きに改修された年代と三葉文系軒平瓦を使用している建物の年代（註13）はほとんど違わず、近世土浦城に伴う瓦の生産と流通に新たな疑問が提起されることになった。もちろん板堀瓦のすべてを分析したわけではないので、今回分析を行わなかった資料の中に三葉文系軒平瓦と同じ組成を持つ「古い」板堀瓦が存在する可能性もある。今後の研究の課題としている。

追記

今回出土した軒平瓦（18）は江戸遺跡で確認されている加賀氏分類のIAa類と推定される資料である。IAa類の瓦は加賀藩本郷邸跡出土例などから1650～1670年頃のものと考えられており、今回の三葉文系軒平瓦と同じく江戸前期の瓦の流通を示す資料として非常に重要である。

2. かわらけについて

今回の発掘調査では、土壟やその下の上層より比較的まとまった数のかわらけが出土している。これらのかわらけについては各層位ごとの帰属は比較的明確であることから相対的な先後関係については判断しやすいが、各層位ともかわらけ以外の遺物に乏しく、特に陶磁器などの年代判定の基礎になるような資料がほとんど共伴していないので、今回の出土資料から年代を判定することは難しい。そこで、今までの土浦城跡の出土資料や周辺遺跡の出土資料などから、今回出土したかわらけの位置付けを考えてみたい。

まず今回出土した一群の基本的特徴としては、体部がロクロ成形で底部が回転糸切り無調整、体部は直線的ではあるが軽い稜を持ちやや内湾する器形であることが共通している。なお、このような基本形態は下縁から常陸南部で確認されるかわらけとは共通する特徴と考えられる。大きさについては、口径からは概ね大（約10cm超）、中（約8～9cm）、小（約7cm弱）の3グループに大別できるが、ただし人に該当する資料は少なく分布の中心は中と小である。底径については概ね4～5cm前後のものが多い。形状については各層位ごとのあまり大きな変化は見られないが、下層の第1期層出土資料より上層の第V期層出土資料に向かって体部の直線化及び口縁部の肥厚傾向が増す方向へ進んでいるものと考えられる。なお、亀城のシイ表採資料（第49図-52・53）は他の資料に比べるとやや口径対底径の比率が大きい。また葺石面出土資料（第45図-2）は逆に比率が小さく、形態も他のものとは大きく異なる。

次に他の出土資料との対比について考えてみたい。まず、今までの土浦城跡の出土資料との比較であるが、土浦城跡では1985年の本丸・二ノ丸調査、86・87年の櫓門下の調査、88年の東・西櫓等の調査、93・94年の外丸御殿跡の調査時などにかわらけの出土が確認されている。その中でも櫓門下から出土した一群は、今回の調査場所に非常に近いことはもちろんのこと、前記第2章2の年表にも記載した1656（明暦2）年の櫓門の地鎮祭祀に伴うと考えられる点で非常に重要な資料である（註14）。この一群は、体部ロクロ成形や回転糸切り無調整の底部はもちろん、全体的なプロポーションや細部の調整も今回の出土かわらけとは非常に良く似ている。詳しく観察すれば特に直線的な体部や口縁部が丸めでやや肥厚する形状等には、第V期層出土かわらけとの共通点が見られる。

次の比較資料としてはつくば市の小田城跡の出土資料がある。小田城跡は鎌倉時代初期に常陸国守

護であった小田氏の居館に始まり、その後北畠親房を迎えた南北朝の戦いや、佐竹・結城氏などの戦国期の争乱を戦った小山氏の居城として常陸南部の主要な城館である。1997（平成9）年度より整備のための発掘調査が継続して行われているが、その結果6面の遺構面が存在することが明らかとなっている（註15）。このうち3面以下の階位においては手捏ねかわらけが共伴しているが、上層に当たる1・2面からはロクロ成形で底部回転糸切りのかわらけが共伴していることが確認されている。昨年真壁町において行われた真壁城跡・小田城跡等中世出土遺物の検討会において、この第1面および第2面の池跡覆土から出土したかわらけの一群の中に、今回の土浦城の第I期層及び第II期層出土のかわらけとほぼ同一と考えられる個体が存在することを確認することができた。小田城跡の第1面及び第2面についてはどちらも多量の炭や焼土を含み火災痕跡を示す面で、戦乱・落城などを想起させる遺構面である。これらの面にはかわらけのほか陶磁器等の出土が確認されており、それらの遺物の年代として概ね16世紀中葉から後半頃の年代を示すものと考えられている。

この他の遺跡としては、同じくつくば市の手子生城跡出土かわらけも今回の土浦城跡出土かわらけと類似した資料である。この遺跡については共伴する陶磁器から16世紀末から17世紀前葉の年代が推定されている（註16）。それに対し真壁城跡出土かわらけについては形態に類似する点も見られるが、胎土の特徴が大きく異なることが確認されている（註17）。また概ね16世紀前半頃の年代を持つと考えられる近隣遺跡出土のかわらけと対比した場合、ロクロ成形で底部回転糸切りである点には共通点があるが、比較的小さな底径や、やや丸みをもつ部などは今回の出土かわらけとは明瞭な差異がみられる（註18）。

これらの遺物の様相より類推すれば、今回の土浦城跡出土かわらけのうち第I～V期層出土かわらけについては、年代が16世紀前半以前になるとは考え難く、広く捉えれば16世紀中葉から17世紀中葉頃に収まるものと考えてはほ間違ないと考えられる。細かい年代を想定すれば、まず第I・II期層出土のかわらけについては小田城跡第1・2面出土のかわらけと同様と考えられることから、年代については同じ16世紀中葉から後半頃のものである可能性が想定される。次に第V期層出土のかわらけについては櫓門下出土かわらけと近似していることから、櫓門の建てられた1656（明暦2）年とあまり変わらない年代と想定することができる。史料から見れば第V期層が土壘に盛られる可能性は、鐘楼が建てられたとする1620（元和6）年頃か、本丸の崩が瓦葺きに改修された1664（寛文4）年が考えられる。今回のかわらけを比較してみると、どちらかといえば櫓門下出土資料のほうが第V期層出土資料より口縁端部の肥厚傾向がやや強いと思われるの、第V期層出土資料は櫓門下出土資料よりも年代的に先行する可能性があるものと思われる。そしてIII・IV期層出土資料については、この両者の考え方には誤りがなければ、これらの間である16世紀末から17世紀前葉と推定することができる。この想定の欠点としては、小田城跡第1・2面出土資料の中には17世紀初め頃の可能性を持つと思われる遺物も少量混入しているため、もし小山城跡第1・2面の年代に見直しが行なわれたり、比較対象とした遺物が混入と考えられた場合には、今回の第I・II期層出土資料の年代についても動く可能性が残されていることである。それでも最新年については変わないと考えられるので、いずれにしてもこの各層出土かわらけの一群が17世紀前半から中葉までの年代から外れることはないと考えられる。

最後に層位出土資料以外の資料について考えたい。まず亀城のシイ表探資料については第1期層位出土資料と共に存在するが、より後が明瞭で口縁端部の肥厚傾向が少ないので、第I期層位出土資料に先行する可能性が残されている（註19）。ちなみにこのシイの樹齢は約450年と推定されているので、この年代が正しければ16世紀半ばということになる。葺石面出土については、形態はもちろん胎土の特徴も大きく異なるので、ほかのかわらけと同一の系譜で考えることは不可能である。推測ではあるが、江戸及びその周辺などの上浦城周辺地域以外で生産され、搬入されたものではないかと思われる。この遺物は葺石面の存続年代を推測するための重要な遺物であるが、今回類似資料が確認できなかったため年代その他については今後の課題としたい。

（註1）非常に大雑把な計算であるが、本丸（約100×50m）全周に今回の1・2期土壘（基底幅約6m、天端幅約3m、高さ約2m）があると推定すると土壘は約2,700m²、東側だけに存在するとしても約50m程度が必要ではないかと想定される。

（註2）文献には「石落」の記載があることから、理由として可能性が考えられる。

（註3）土浦市立博物館蔵、本坂久仁子氏によれば紙質・描写方法等からいわゆる『正保絵図』の原本に近い写本と思われるのこと。詳細は巻頭図版1写真参照。

（註4）独立行政法人国立公文書館蔵。

（註5）国立国会図書館資料部蔵土家文書。製作年代については城廻邊に居住する土主の名前から本坂久仁子氏が推定。

（註6）『常陸土浦城図』には築堤の表現がないが、必要がなかったためなど「あるものを描かなかつた」可能性が高い。ただし「ないものを探すこと」には、基本的にありえないと考えられる。

（註7）櫻門の解体修理を担当した一色夏氏は「水切長押」の位置から棟梁さくから瓦葺きへの改修を推定しているが、東・西側の復元設計書を担当した神戸信重は「肯定的見解」をしている。

（註8）前澤家は氏臣船封以降より土浦に居住していたと思われる家で、海上として土浦藩に仕え人工や魔術などを評している。『諱十年譜』（土浦安藤家所蔵）、に掲げれば、前澤忠吉が1608（文化5）年に、忠平御子に後の前澤源治が1640（天保11）年に竟り「瓦師」を持命している。村松公子氏教示。

（註9）工生城跡ではこの角柱板瓦足のほか、丸柱板瓦も出土している。報告によれば角柱のほうが近世でも新しい時期の遺構から出土する傾向があり、新しい様相の1つとして捉えている。詳細は『下野壬生城』参照。

（註10）板壁瓦は三之門左右の崩に使用されている。板壁瓦については筆者実見。なお三之門は明和年間（1764～72）に再建されたものであるが、明治20年頃に板根等が改築されたと伝えられるので、あるいは扉の板壁瓦はこの時期のものか？

（註11）忍城の板壁瓦は本丸堀の築造から出土している。この第8番の下部に浅間八幡石室の堆積が確認されていることから、埋没年代は1783（天明3）年以後と考えられる。なお忍城跡出土の板壁瓦には軒飾り状の垂れがあるものが見られる。詳細は『行田市郷土博物館研究報告』第1号参照。

（註12）半井城の存続年代。詳細は『草薙城』参照。

（註13）三葉文系斜平瓦の使用が確認されているのは現存する櫻門、西側である。これらの建物の建築年代は東・西側が1630（元和6）年、櫻門が1636（元和2）年である。前の年代は1664（寛文4）年または1645（正保2）年以前と考えられる。

（註14）詳細は『土浦城址内 櫻門保存修理工事報告書』1988参照。

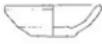
（註15）詳細は『史跡小田城跡』1999参照。

（註16）詳細は桃崎祐輔『つくば市丁子生城跡』第17回遺跡研究発表会資料』1995参照。

（註17）真壁城跡出土からいわゆる胎土には風化化開拓を起源とする雲母や長石の粗い粒子が多く含まれている。詳細は『真壁城への説』1998参照。

（註18）ただし小島島のうち比較的大きめの遺物と直線的な体調を持つ資料については、上浦城跡出土のタイプと比べても差異が少ない。

（註19）なお、この亀城のシイ出土資料は他のものに比べて直径の比が大きい。

今回の出土資料	参考とする資料	位置付け（年代）
		
(亀城のシイ表採)		
		
(第Ⅰ期層)		
		
(第Ⅱ期層)	(小田城跡 第1・2面)	16世紀 中葉～後半頃 (小田城跡)
		
(第Ⅲ期層)		
		
(第Ⅳ期層)		
		
(第Ⅴ期層)		
		1656(明暦2)年 (土浦城櫓門)
	(土浦城 櫓門)	

第60図 土浦城跡出土かわらけの位置付け

第7章 付 編

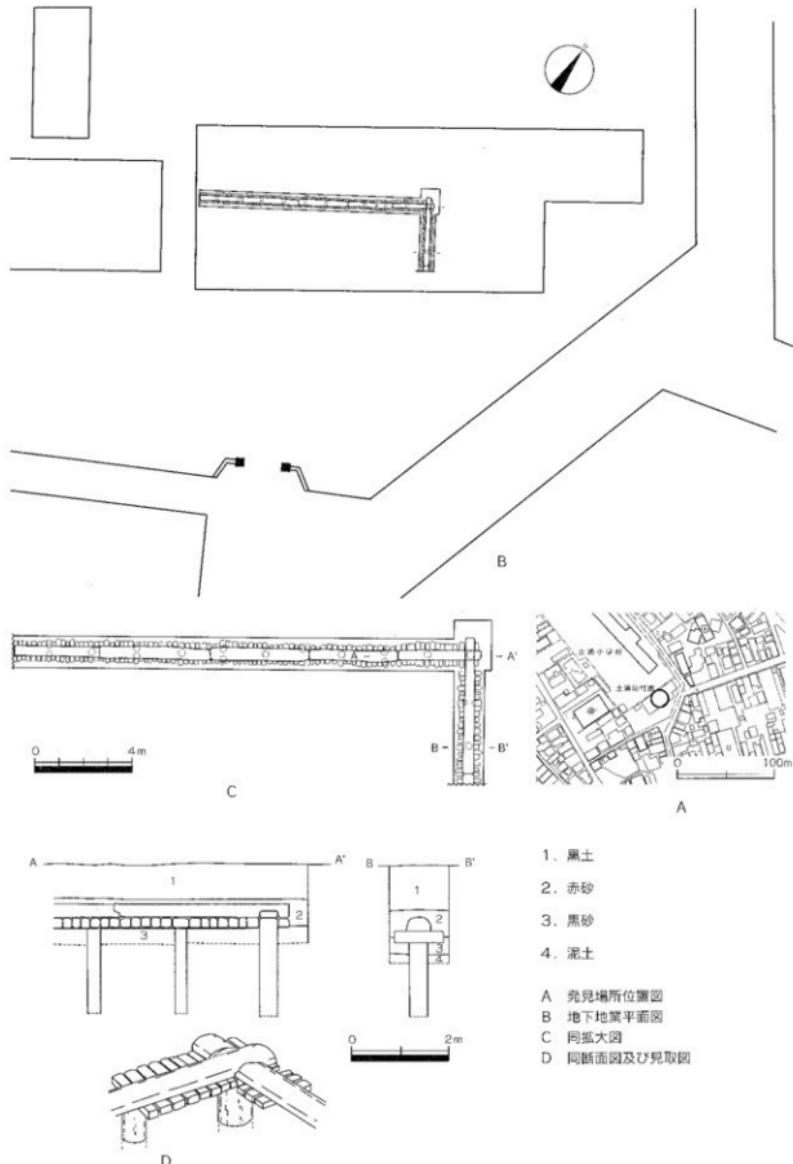
第1節 土浦城大手門跡で発見された地下地業について

現在土浦市立土浦幼稚園が建てられている市内大手町13番1号は、古絵図などの古記録から土浦城の大手門跡と比定されている場所である。大手門は全体としては2つの門および内側形から形成され、設置年代は不明であるが江戸時代初期のうちに整備されたものと考えられる。大手門は『土浦城記』によれば1622（元和8）年に櫓門に改築されたと伝えられており、このことは古絵図に描かれている内側の門が2層の櫓門であることからも確認することができる。この建物の規模は、関家『秘公満御』によれば平面が3間×6間、高さは冠木下まで1丈1尺5寸、2階下に同板敷より梁下まで冠木下まで1丈1尺と記されており、現存する本丸の櫓門（2間×4間）よりも一まわり規模が大きい。この大手櫓門は1810（文化7）年に幕府に修理料が出されているが、修理の詳細および実際に修理がされたかどうかは不明である。最後は廃藩置県に伴い、北門・南門などはかの城内の主要な門と同様、明治初期（注1）のうちに取り壊されたようである。その後この大手門跡には1885（明治18）年土浦幼稚園が設置され、それに伴う整地等により地形はだいぶ改変されたものとも考えられるが、旧建物の正面にあった築山などは門に取り付く土塁の一部とも伝えられていた。

1979（昭和54）年11月16日、幼稚園園舎の建て替え工事に伴う掘削作業中に地下から丸太材などの建物基礎と思われるものが発見され、同日市文化財保護審議会委員（当時）の永山正、金子宏両氏らの確認のもと現地調査がおこなわれている。

遺構が発見された場所は幼稚園敷地の中央部にあたり、新築建物部分の中に東西約19m、南北約6mにわたってＬ字形に遺構が確認されている。この遺構は1間置きに松杭を継杭として打ち込んだ上で杭頭を切り揃え、川砂で土盛りを行い、その上に長さ60～90cm、径15～20cmの太鼓落しをした枕木を敷いて、その枕木の上に長さ3.2～5.6m、径50cm前後の半割松丸太を載せ、最後にまた川砂で覆ったものであった。当時のメモや写真を見ると、まず継杭はＬ字の角にあたるものは他のものに比べやや太くなっている、また継杭の上部についても、角のものは半割丸太に直接接続しているが、他のものは枕木に接続しているなどの差異が認められる。他には横に並べられた半割松丸太についても単に敷き並べたものではなく、角などには継手仕口加工が見られる。なお、建物基礎および蟻蟻石のように半割丸太と基礎石を接続する石は発見されていない（注2）。

この幼稚園で発見された基礎地業については、以前より丸太が発見されたことは伝えられていたため、所謂『筏地業』であろうかと推察されていたが、今回確認された当時の記録から、この遺構は木材を駆き並べて面で上部構造を支持する典型的な筏地業とは構造的に異なるものであることが分かった。ただし、今まで土浦城関係で確認された基礎事業は、総て柱1本づつの独立基礎型の地下事業であったのに対し、今回発見されたものは列状に繋がっており、ある程度建物基礎地業を点（柱）ではなく線（棒状）で支えたものである点は注目される。これは大手門の立地が今まで発掘調査がされた場所に比べても比較的軟弱であることに加え、大手櫓門の建物荷重が大きいことが原因として考えられる。なお、継杭の上に枕木を置いた基礎地業としては、独立型ではあるものの東櫓などと類似する点もある。



第61図 大手門跡で発見された地下地業

また今回新たになった疑問点としては、確認された地業の平面プランが確認された部分では東西に長いL字形であり、明らかに柱がないと思われる門の部分にも地業が確認されたことあげられる。これは前記のように地業を接続させて基礎全体を同様に支持するためのものである可能性が考えられるが、他には建物が柱のように点で支えられているのではなく、壁構造のように線で上部を支えているものであったか、あるいはこの地業は『大手櫓門』本体の基礎ではなく、大手門を形成する内枠形の土壘の基礎である可能性も考えられる。この土壘の基礎であったと考えた場合、確認された地業が東西約19mと、大手櫓門（東西3間）よりもかなり長いことが根拠になるが、土壘の基礎としては枕木の幅が60~90cmしかないため、土壘基底部の幅としてはあまりにも狭すぎることが難点である。古絵図には大手門周辺に瓦葺の廓が廻っているため、この廓基礎と見ることもできるが、この廓は古絵図では土壘の上に建てられたものであることが確認できるため、現地盤下に基礎があるとは考えにくい。

以上のように今一つ不明な点も残るもの、この地業は土浦城内の施設に伴うものであることにはほぼ間違いくなく、その点においては非常に貴重な資料である。今後他の事例や調査が進めば大手門についてもより明らかになる可能性が残されている。

〔註1〕大手門については、明治4年と伝えられる絵図にはまだ大手門の存在が確認できるが、明治7年に解体されたと伝えられている。

〔註2〕記録によれば、石面に使用されたと考えられる30cm×40cm×15cmの直角錐状の御影石と、25cm×30cm×40cmの袖台石が各1個出土している。
※この文書は社会教育課(当時)日下部和宏氏の作成した報告文をもとに作成した。



発見時の状況

第2節 土浦城跡内施設整備工事に伴う工事立会いの概要

1998（平成10）年の東櫓復元を1つの契機として、土浦城跡（亀城公園）内の老朽化した公園施設の整備が進められている。の中でも電気設備工事は、電線の地中埋設や電灯の建て換えなどの地下造構の現状変更が伴うことから、毎年埋蔵文化財担当者立会いの元で工事が進められている。これらは正式な調査ではないが、工事範囲が広く、かつこの立会いによっていくつかの新知見も得られることから、まとめてここに収録する。

1998（平成10）年度

この年は東櫓建設に伴う東櫓への電気引込工事の一環として、公園東側（高麗門前）→プール脇→櫻門前上橋→櫻門東側土塁横断→東櫓に至るルートおよび東櫓周辺のライト・電灯の電気埋設工事が行われた。埋設工事は東櫓工事と調整の上で行われたため、期間は5月20日より9月4日までと長いが、実立会い期間は4日間である。

このときの状況としては、まず、公園東側（高麗門前）では公園整地土である薄い砂層の下に比較的良質の暗褐色土の堆積が確認された。のことから、この部分は城の整備に伴う埋立て地ではなく、自然地形による高まりである可能性が想定された。また二ノ丸中央の高まり東側下では、粘性の強い黒褐色土とともに煉瓦等の近代の残滓が多数出土した。古絵図よればこの高まりは仕切門の場所であり、門前には濠があることから、この黒褐色土は濠の埋立て土であり、これらの遺物からこの部分の濠は近代には完全には埋まつてはいなかったものと推定することができる。

1999（平成11）年度

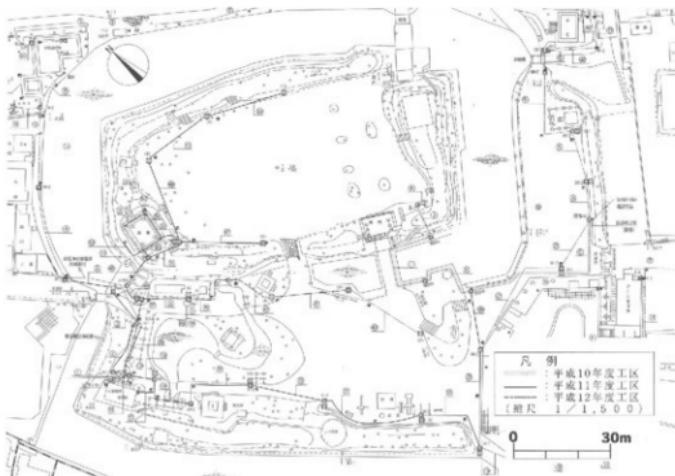
この年は公園の電気設備の根本的な改善が行われ、公園西側から管理事務所までの電気引込工事と、公園南側の電気埋設および電灯建て換え工事、本丸西半分の電気埋設および電灯建て換え工事が行われた。立会い期間は2000年2月29日より3月14日までである。

このときに新たになったこととして、まず土浦城跡の基本層序に違いがあることが挙げられる。工事範囲の本丸西側では、公園整地土である薄い砂層の下に公園東側と同様暗褐色土の堆積が確認されたが、公園南側の二ノ丸部では、亀城のシイ周辺を除き砂層の下は粘性の強い黒褐色土であった。のことから、本丸部は公園東側と同様自然地形の高まりであると考えられるが、二ノ丸の大半は埋立て地であると推定することができる。なおこの自然地形と考えられる暗褐色土は、1994年の外丸御殿跡発掘調査の際に調査区西端でも確認されていることから、土浦城周辺の自然の高まりは本丸一公園東側一外丸御殿西側に続く東西に細長い範囲で存在するものとも思われる。それに対し二ノ丸の黒褐色土は仕切門前の濠の埋立て土と変わらないような軟弱なもので、今回の立会い部では深さ約0.6～1mの湧水直前までの範囲において造構面と考えられるような安定した面を確認することができなかつた。このことから考えた場合、二ノ丸部分においては現代の砂層の直下が近世の造構面であることになってしまふが、出土遺物的には近現代ものであるため、近世の造構面の認定はもちろんであるが、中世の造構面の存在についても、今後検討を重ねなければいけない疑問を提起することとなつた。

出土遺物としては、板敷瓦が本丸側のいくつかの場所で発見されたことから、本丸土壁上の場に使われていた瓦である可能性が高まった。また二ノ丸の「亀城のシイ」は樹齢450年以上と考えられている樹木であるが、表掲ではあるものの根元においてかわらけを発見することができた。

2000（平成12）年度

この年の工事は二ノ丸（猿小屋前）から亀城の泉の北を通り、櫓門前土橋西側電灯までの部分である。立会期間は2001年2月6日より13日までである。古絵図等より、この部分の大半は二ノ丸と本丸の間の濠跡と推定されていたが、立会いでも軟弱な黒褐色土が大半を占めていた。二ノ丸広場部分においては一部に砂層が存在していたものの公園整地土と思われるものであり、近世の遺構または遺構面と考えられるものは確認できなかった。出土遺物も近代以降のものが大半である。



第62図 工事箇所及び実施年度

第3節 土浦城・外丸御殿跡出土の「独鉛石」

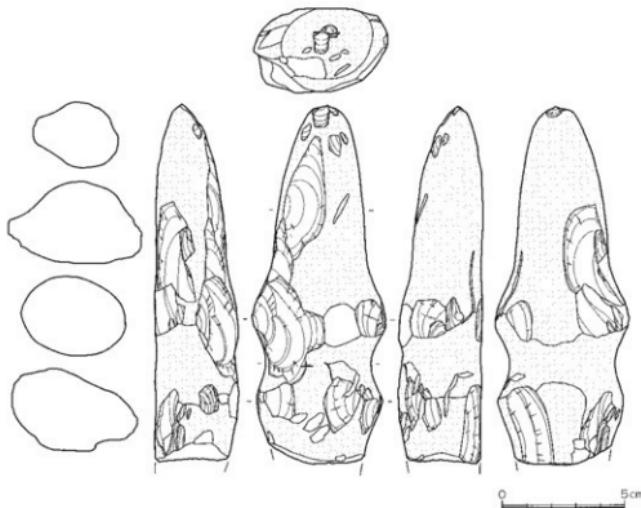
ここでは1994年に調査が実施された外丸御殿跡出土遺物を再整理中に発見した縄文時代の石器「独鉛石」をここで紹介する。

検出地点は、注記によるとB1b区1層からとなる。

この石器の規模は、長さ146.8mm、幅55.1mm、厚さ33.8mm、重量329.1gを測る（すべて現存値）。使用石材はホルンフェルスである。中央にある2条一対の隆起帯から片側の刃部端までが残存する。もう一方の刃部は折損していて、その折損面の風化作用の進行程度が低く、新しい折損面であると判断した。器体表面には隆起帶付近を中心に、大小の剥離面が分布している。正面図に見える大きな剥離面はやや新しい様だが、その他の剥離面は器体整形時の剥離面で、研磨作業による研ぎ残しと考えられる。器体全面に研磨痕が認められることから、風化はあまり進行していないと考えられる。器体表面に認められる線条痕の状態から、研磨作業は隆起帶間の抉り部分が器体長軸に直交する方向に施し、隆起帶外側から刃部端に至る範囲は長軸に平行して研磨を施している。刃部端には表裏に剥離

面が生じ残存状況は悪い。その剥離面末端部は階段状剥離となっていることから、衝撃剥離による損傷と考えられる。特に顕著な敲打痕は認められない。

土浦市内では1980年から1983年にかけて実施された市内遺跡分布調査【茂木1984】で確認された手野町原の内遺跡例（閃緑岩製）1点（註1）とあわせて2例目の確認となる。なお独鉢石は本来縄文時代後期～晩期の遺物なので、この資料は外丸造當時に土とともに運び込まれたものである可能性が高い。



第63図 外丸御殿出土の独鉢石

（註1）他の内遺跡例はやや形態が異なり、別品種となる可能性も考えられる資料であることを記しておく。

【参考文献】
茂木雅博 1984「土浦の遺跡－埋蔵文化財包藏地」 土浦市教育委員会

第4節 土浦城跡出土品の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

土浦城跡では、これまでの調査により城郭・濠・土塁などの遺構が検出されている。今回、土塁構成層中に灰層が認められ、握り飯状炭化物が出土した。そこで、握り飯状炭化物の種類を明らかにするために種実同定、灰の由来を調べるために植物珪酸体分析を実施する。

また、遺物では板瓦や軒平瓦が出土している。このうち、板瓦は屈折部の形に違いがあることから、2種類に分類できると考えられている。一方、軒平瓦は中心飾りの形態から2種類に分類されると考えられており、土浦城跡以外では出土事例が見られないとされる。今回は、これらの板瓦と軒平瓦について胎土薄片作製観察により瓦胎土中に含まれる鉱物・岩石片の種類を捉え形態的な差異との関連を調べる。さらに、既存の周辺地質の情報や近世の瓦胎土資料との比較を行い、本遺跡をめぐる瓦の製作や流通について検討する。

1. 握り飯状炭化物と灰の種類

1. 試料

炭化物試料は、中世末から近世初頭の土塁の盛土中（N3区トレーナー 23層・土塁トレーナー）から検出された、塊状の炭化物2試料（試料番号125・127）である。このうち、試料番号125中には炭化物の大きさに応じて3点（No.232・233・234）、試料番号127では同様に2点（No.230・231）が認められる。詳細は、結果・考察とともに表1に記す。

一方、灰試料は塊状の炭化物が出土した、焼上や灰を含む土層（26層）から採取された（試料番号126）。試料中には、主に灰だけで構成される明色部、これに炭化物が混じる暗色部が見られた。そこで、これら2つについて分析を行った。

2. 分析方法

（1）種実遺体同定

試料を肉眼または双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴および現生標本との比較から種類を同定する。

（2）植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壤化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

明色部と暗色部は、珪化組織片の観察に障害となる有機物がほとんど含まれていなかった。そのため、明色部と暗色部から微量を観察用試料として分け、400倍の光学顕微鏡下で観察した。

イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由來した植物珪酸体を包含する珪化組織片について近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて調べた。

3. 結果

(1) 種実同定 (図版24)

結果を表1に示す。

表1 握り飯状炭化物の種実遺体同定結果

試料名							種類名
125	No.232	大	OOTT	土墨トレンチ	23層	010112	イネ (炭化胚乳、現状)
125	No.233	中	OOTT	土墨トレンチ	23層	010112	イネ (炭化胚乳、現状)
125	No.234	小	OOTT	土墨トレンチ	23層	010112	イネ (炭化胚乳、現状)
127	No.230	大	OOTT	土墨トレンチ	26層	010112	イネ (炭化胚乳、現状)
127	No.231	小	OOTT	土墨トレンチ	26層	010113	イネ (炭化胚乳、現状)

試料番号125の3点 (No.232・233・234) と試料番号127の2点 (No.230・231) は、全てイネ (*Oryza sativa L.*) の胚乳である。完全に炭化しており、長さ3.5~5.0mm、幅2.5mm程度の長楕円形で、やや偏平。焼けぶくれや発泡した個体が多い。一端に胚が脱落した凹部があり、両面には2~3本の縱溝がある。胚乳表面に、頬の一部が残るものもみられる。

(2) 植物珪酸体分析 (卷頭図版3)

結果を表2に示す。

表2 出土灰の植物珪酸体分析結果

明色部と暗色部からは、珪化組織片が数多く認められる。

明色部では、稲初穀に形成されるイネ属穀珪酸体や葉部に形成される短細胞列・機動細胞列の産出が顕著である。また、ヨシ属短細

試料名					種類
126	OOTT	土墨 トレンチ	23層	明色部	イネ属 (頬) +++ イネ属 (葉部) +++ ヨシ属 - ススキ属 -
				暗色部	イネ属 (頬) +++ イネ属 (葉部) +++ 不明 (木材?) +

+++: 極めて多い, +: 多い, -: 稽に見られる

胞列やススキ属短細胞列が稀に認められる。

暗色部でも同様に、イネ属に由来する珪化組織片の産出が顕著である。この内の幾つかでは、有機物が残留し、暗色化している。また、炭化した木材の微細組織片と見られる不明組織片も認められる。

4. 考察

握り飯状炭化物は、炭化したコメ (胚乳) の塊であった。炭化した頬は脆く壊れやすいので、稻穀は脱落したことがうかがえる。おそらく、脱穀前の頬に入った生米の状態で火を受け、胚乳のみが残ったものと思われる。

一方、灰層での珪化組織片の産状から、灰層は稻粉殻や稻藁といったイネ属の植物体を主体とした灰で構成され、ヨシ属やススキ属、樹木の灰も混在していたことがうかがえる。稻藁は、周辺での稻作により容易に手に入れることが出来たと考えられる。

これらの点から、脱穀前の頬に入った生米や稻藁が焼失した後に、土墨が構築される過程で廃棄された可能性が考えられる。

なお、検出されたススキ属やヨシ属、樹木が土墨を構築する過程で稻藁などと一緒に燃やされたも

のか、周囲に生育していた植物に引火して灰が混在したのか、現段階では混入した要因が不明である。この要因については今後、握り鉢状炭化物や灰層の検出状況や土壌の構築過程も含めて検討したい。

II. 瓦胎土中の鉱物について

1. 試料

試料は、板塀瓦 2 点と軒平瓦 2 点の合計 4 点である。いずれも、17世紀中頃から19世紀後半頃までの時期とされている。

板塀瓦の試料には、それぞれ 86 と 96 の番号が付けられている。出土地点は、N1 区、南区とされている。これらは、屈折部の形に違いがあることから、2 種類に分類できると考えられている。また、塀板瓦 86 には「前澤」の刻印が認められている。

軒平瓦の試料には、それぞれ 5 と 8 の試料番号が付けられており、出土地点は土壌第 3 トレンチおよび東槽 W 7 トレンチとされている。これらは、中心飾りの形態から 2 種類に分類されると考えられている。(なお、8 は今回出土した第 19 図-18 と同汎と考えられる)



第 1 図 分布に使用した軒平瓦 (1988 年調査時出土資料)

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は重鉱物分析や薄片作製など主に用いられており、後者では蛍光 X 線分析がよく用いられている。

本分析では薄片作製観察を行う。この方法は、瓦のような比較的粗粒の砂粒を含む胎土の試料において、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすくなるなどの利点がある。

以下に、薄片作製観察の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また素地の状態については鏡下で観察される孔隙の程度とその方向性、焼成による粘土のガラス化の程度および含鉄量を記載することにより、各試料の胎土の特徴を把握した。

3. 結果 (巻頭図版 2)

各試料の観察結果を表 3 に示す。

表3 瓦試料の胎土薄片観察結果表

種類	試料番号	出土地点	刻印など	砂粒		鉱物の片						岩石						持石		成片	
				全体量	淘汰度	最大径	石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	黒雲母	白雲母	チャート	泥岩	莎岩	安山岩	花崗岩類	軽石	火山ガラス
板塀瓦	86	N1区	「前澤」	○	○	0.4	○	△	○	△	+	△	+	(+)	+	(+)	+	(+)	△	+	
	96	S区		△	○	0.5	△	+	+	(+)	+	+	(+)	(+)				+			
軒平瓦	5	十五第3トレンチ		○	△	1.0	○	△	△	+	△	△	-	△		+	(+)	+			
	8	東側W7トレンチ		○	○	0.6	○	△	△	+	+	△	(+)		(+)	(+)	(+)	(+)		(+)	

種類	試料番号	出土地点	刻印など	孔隙度	方向性	始士残存量	含鉱量	備考		【凡例】		【量比】	
								淘汰度	孔隙度	(+): 多い	(+): 中程度	(+): 少量	(+): 微量
板塀瓦	86	N1区	「前澤」	×	×	×	△						
	96	S区		×	×	×	△	シルト粒多く含む					
軒平瓦	5	十五第3トレンチ		△	×	×	○						
	8	東側W7トレンチ		×	×	×	○	シルト粒多く含む					

以下に、各試料の特徴を述べる。

板塀瓦86: 砂粒を非常に多く含む。砂粒の主体は石英と斜長石の鉱物片であり、これに少量のカリ長石や輝石および黒雲母などの鉱物片も認められる。また、岩石片ではスponジ状に発泡した輝石が少量認められることが特徴であり、これに微量の安山岩片や火山ガラスなども認められる。

板塀瓦96: 砂粒は少量しか含まれず、より細粒のシルトサイズの粒子（おそらく石英片）が多く含まれる。砂粒の主体は石英片であり、他に鉱物片では長石類や角閃石、黒雲母など、岩石片では花崗岩片などが認められる。

軒平瓦5: 砂粒を多く含む。砂粒の主体は石英片であり、他に少量の長石類、角閃石、黒雲母などの鉱物片とチャートなどの岩石片が認められる。なお、岩石片の中には微量の花崗岩や結晶片岩なども認められる。

軒平瓦8: 砂粒は中程度含まれ、より細粒のシルトサイズの粒子（おそらく石英片）が多く含まれる。砂粒の主体は石英片であり、他に鉱物片では長石類や黒雲母など、岩石片では花崗岩片などが認められる。また、軒平瓦5で認められたチャートや結晶片岩も、極めて微量であるが、含まれる。

4. 考察

今回の分析により、板塀瓦および軒平瓦はそれぞれ異なる特徴を有する胎土からなることが確かめられた。

詳細に見れば、板塀瓦の2点の試料間では、砂の量比が大きく異なる。また、軽石や火山ガラスなど、一方の試料には全く認められない碎屑物も存在する。一方、軒平瓦の2点の試料間では認められた鉱物片および岩石片の種類に共通性があり、異なるのはその量比であると言える。

胎土中の鉱物片や岩石片の種類構成の違いは、素材となった土（粘土や砂を含む）の採取地の地質学的背景を反映しているとすれば、生産者（地）の違いを表すと考えて良い。

したがって、上記のような胎土分析の結果から、近世の土浦城の瓦に缶としては、1) 板堀瓦と軒平瓦という種類間で生産者が異なっていた、2) さらに板堀瓦と軒平瓦のそれぞれにおいても複数の生産者(地)から供給されていた(これは板堀瓦では崩折部の形態の違いとして、軒平瓦においては中心飾りの形態の違いとしても表れている)、3) ただし、軒平瓦では胎土に共通性が見られることから、異なる生産者(地)ではあっても近隣地域であった可能性がある、という事情が推定できる。

次に、これらの試料の生産地について検討してみたい。現時点での手がかりは、胎土中に認められた岩石片の種類である。主なもとしてチャート、安山岩、花崗岩、軽石、結晶片岩を挙げることができる。土浦城の地質学的背景は、茨城台地を構成している地層である。しかし、それらの地層は小貝側や鬼怒川、桜川などの水系により形成されたものであるから、これら水系に碎屑物を供給した地質が土浦城の地質学的背景となる。日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)などにより、それに相当する地質を概観すると、上記の岩石片のうち、結晶片岩を除く4者については、それぞれ由来となる地質の分析を認めることができる。すなわち、チャートは八溝山地や足尾山地に広く分布する主に中生代の堆積岩層中にあり、安山岩は男体山をはじめとする日光火山群や高原山などの第四紀の火山、花崗岩は筑波山や加波山などがある八溝山地南部に比較的広く分布し、さらに軽石は茨城台地表層のいわゆるローム層中に含まれている。結晶片岩については、関東地方では関東山地に分布する三波川帯があり、その碎屑物を供給する水系としては荒川水系が考えられる。したがって、結晶片岩の存在は、土浦城跡の地質学的背景とはやや異質である。

ここで、各試料の岩石片の産状を見ると、板堀瓦試料はいずれも土浦城の地質学的背景と調和するが、軒平瓦試料はどちらも土浦城跡の地質学的背景とやや異質であると言える。

現時点では、茨城県における近世の遺物の胎土分析例およびそれに関連する考古学事例が少ないため、各試料の具体的な生産地まで推定することはできない。土浦城跡の地質学的背景に調和するとした板堀瓦も、生産地が土浦周辺であると言うまでには、さらに検討を要することは言うまでもない。また、軒平瓦の生産地が荒川水系の地域に限定されるかと言うことについても同様である。なお金子(1996)は、近世の軒平瓦・軒棟瓦について、その文様形態から、「江戸式」・「大坂式」・「東海式」の3種を識別し、それぞれ名前が示す生産地で作られたものと考えた。そして、江戸式は江戸近隣の関東圏にも分布すること、東海式の瓦が高崎城にも認められることを述べている。このような考古資料から、土浦城の瓦にも江戸近郊で生産されたものや場合によっては東海地域で生産されたものが混在する可能性もあることは充分に考えられる。

今後は、重鉱物分析も含めて資料を蓄積することにより、これらの問題を検討することができると思われる。

引用文献

- 金子 賢(1996)
江戸造跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棟瓦の地方色. 古代, 101, p.144-160. 早稲田大学考古学会.
- 近藤謙三・佐藤 隆(1986)
植物組織形分析. その特性和応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 日本の地質「関東地方」編集委員会(1986)
- 日本の地質3 関東地方. 335p. 共立出版.
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1993)
自然科学研究からみた人々の生活(1). 慶應義塾渋沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南渋沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p.347-370. 慶應義塾.

第8章 調査のまとめ

今回の発掘調査は約3ヶ月間という短い調査期間であったが、土浦城の歴史を解明するための資料を予想以上にたくさん収集することができた。まず、検出された遺構については、堀跡や鐘楼跡と考えられる建物跡が検出され概ね古絵図などと整合したほか、斯や鐘楼など建造物についての資料を収集することができた。また上塁が都合4回にわたって拡張されていることや、濠側斜面に葺石が存在することなどを新たに確認することができた。特に初期の土塁に使用されていた盛土が濠の掘削土ではなく陸生の搬入土と考へられる点については、整備時期とも兼ね合わせて初期土浦城の施設整備に伴う問題として今後も研究の必要があると考えられる。また、濠側斜面の葺石についても土浦城の意匠上の特徴となるものであり、類似事例を含め今後の調査・研究が必要であろう。

次に出土した遺物については、まず瓦では板瓦が多量に出土したのに対し、平瓦・丸瓦の出土が少ないうことから、堀に使用されていた瓦は板瓦であることが推定された。これは検出された堀の遺構とともに、土浦城の本丸斯の意匠・構造について大きな資料となるものである。また板瓦の中に「前澤」の刻印を有するものが確認され、櫓門などでも確認されていた「前澤」銘瓦の年代を考える重要な資料となつた。かわらけについても上塁中の各層より良好な状態で出土し、かわらけの形態変遷を考える良好な資料となつたことに加え、小田城跡や櫓門などの既調査遺跡の資料と対比することにより土浦城跡の遺構の年代が中世末に遡る可能性があることを、初めて遺物の面から証明することができた。

しかし、今回の調査では明らかにできなかったこともある。まず堀跡についてであるが、北側調査区内では概ね全体を確認することができたが、南側調査区では擾乱等のために遺構を確認することができなかつた。そのため土塁南東角から櫓門側に当たる部分についての堀の形態は不明である。南東角部については古絵図にも直角表現と多角表現のものがあるが、今回の調査からは不明である。同様に、櫓門東側の堀にも北側調査区で検出されたような細かな屏風折れが存在したかどうかも不明である。また今回の調査で確認した葺石面上に存在する「濠側土塁」が、いつ頃盛られたものであるか確定することができていないう。この葺石面がいつ頃まで露出していたかは、濠側から土塁を見る際の意匠に関する問題であるが、今後葺石面直上から出土した遺物を基に年代を考える必要がある。いずれにしてもこれらの問題を解明していくためには、今後も計画的に土浦城跡についての調査研究を進めていくことが必要不可欠である。

また今回の調査を通じた反省すべき点が2点ほど存在する。まず1つめは、今回調査部分はいわば1988年に一度調査した場所であるが、再調査の結果土塁の葺石をはじめ盛土の状況など新たな発見があつたことである。遺跡の保存を優先した調査の場合、遺構保存のために調査区を限定せざるをえないが、充分な資料収集のためには調査区の設定や調査方法などもよく考える必要があることを痛感した。2つめには、先に東櫓が復元されていたため、堀と東櫓の取り付き部分を確認しようとしても調査区を北側に拡張することができなかつたことが挙げられる。本来はこのようなことがないよう、調査と整備についてはもっと計画性が必要であったことを暗示している。これらの反省点は今後も土浦城跡の復元整備を進めていくのであれば、必ず改善されなければならない問題である。

今回の調査からはこのようにたくさんのこと学ぶことができた。今回の成果や反省をもとに、明らかとなつた資料やあるいは課題となつた資料の更なる調査研究が進めば、土浦城の新たな歴史を明らかにすことができるであろう。

参考文献

国学院大学実験調査団

土浦市史編さん委員会

坪井利弘

茨城大学史学第6研究室

坪井利弘

土浦市遺跡調査会

石川功・岡林孝作・高沢誠・東庵章

加藤 美

行田市郷土博物館

上浦市遺跡調査会

土浦市遺跡調査会

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

土浦市文化財委員会

土浦市遺跡調査会

テラ・インフォメーション・エンジニアリング

加藤 見

小林謙一

小瀬市教育委員会

土浦市遺跡調査会

上浦市立博物館

雨谷 昭

石川 功

小森正明

(財) 茨城県教育財団

小林謙一

土浦市遺跡調査会

土浦市教育委員会

永川 強

桃崎祐輔

金子 智

木下 良編

山武考古学研究所

土浦市遺跡調査会

(財) 愛知県埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

土浦市立博物館

鹿島市教育委員会

西ヶ谷恭弘

真壁町教育委員会

石川 功

石川 功

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

つくば市教育委員会

三浦正幸

桃崎祐輔

(財) 千葉県文化財センター

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

壬生町教育委員会

江戸遺跡研究会

香川元太郎

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

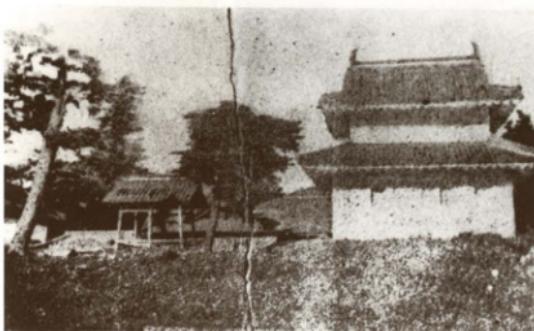
神戸信一・石川功・ほか

土浦市立博物館

- 1971 『常陸宍塙』
1975 『土浦市史』
1976 『日本の九城』 理工学社
1985 『土浦の遺跡』 上浦市教育委員会
1986 『國宝 瓦笛』 (改訂版) 理工学社
1987 『般若寺遺跡 (西宮敷地内)・竜王山古墳 故若寺遺跡 (宍塙小学校境内)』 発掘調査概報
1988 『第5章地下遺構の開闢』
『茨城県指定文化財 上浦城址内棺骨保存修理工事報告書』 土浦教育委員会
1989 『江戸時代の五にあける江戸式の展開』
『史料研究叢書』 第14号 国学院大学日本史学帯刀学会
1990 『行田市郷土博物館研究報告』 第1号
1990 『木田余台』
1990 『茨城県指定史跡 土浦城址発掘調査報告書』
1989 『寺崎誠直 土浦史備考 第1巻』
1990 『木田余台1』
1990 『むかしの町更土浦』
1991 『土浦市八幡丘遺跡発掘調査報告書』
1991 『県指定史跡 千浦城址地内レーダー探査報告書』
1992 『江戸丸の変遷』『国学院雑誌』 第93卷12号
1992 『Ⅲ-3 皿型土器類』
『江戸城址上器研究グループ』
『江戸城址上器研究会』
1992 『小諸城郭鉱銅』
1992 『田村・沖宿地区遺跡調査現地説明会資料』
1992 『松原の世界』
1992 『常陸史の研究』 滝波吉林
1992 『西櫛地下遺構の調査』
1992 『茨城県指定史跡 土浦城址内 上浦城西側復元工事報告書』 上浦市教育委員会
1993 『常陸國富丁人注文の基礎的研究』
『茨城県史研究』 第71号
1994 『(仮称) 上高津町地建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 喜居遺跡、うぐいす平塚跡
1994 『江戸在地土器生産の成り立ちに関する予察』
『考古学研究』 第41巻2号
1994 『上高津貝塚A地点』
1994 『寺崎誠直 土浦史備考 第3巻』
1995 『国宝・重要文化財日本の城』 別冊歴史読本7 新人物往来社
1995 『つくば市手子生城跡』
『第17回遺跡研究発表資料』 茨城県考古学会
1996 『江戸遺跡出土資料に見る近世瓦平瓦・軒丸瓦の地方色』
『古代』 第101号 早稲田大学考古学会
1996 『古代を考える 古代遺跡』 吉川弘文館
1996 『六十原A遺跡』 上浦市教育委員会
1996 『上浦城 (外久御殿跡) 発掘調査報告書』
1997 『茨洲城下町遺跡Ⅷ』
1997 『金沢城石川門前七櫓 (通称石川橋) 発掘調査報告書』
1997 『埋蔵財の物語』
1997 『中世の霞ヶ浦と律宗』
1997 『幕母城』
1998 『土浦城』 の丸・本丸探査 計画調査 発掘調査報告書 土浦市教育委員会
1998 『真壁城への説』
1999 『土浦城の近世瓦・土浦城出土・使用的な軒平瓦を中心として』
『江戸遺跡研究会報』 No.72
1999 『土浦市内で発見された中世埋蔵鏡の新資料』『菟波波』 第3号
1999 『常名台の古代のむら』
1999 『焼き物にみる中世の世界』
1999 『史跡 小田城跡』
1999 『城の鑑賞基礎知識』 至文堂
1999 『千葉県文化財センター研究紀要』 20号
2000 『古代霞ヶ浦事情』
2000 『下野王牛込城』
2001 『国説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
2001 『よくわかる築城学入門』 第9回『歴史占群像』 No.45 学習研究社
2001 『土浦の旧石器』
2001 『茨城県指定史跡 土浦城跡内 土浦城東塙復元工事報告書』
土浦市教育委員会
2001 『土浦古地図の散歩道』

図版 1

1. 東櫓周辺古写真
(撮影: 1884(明治16)年以前)
(南東より)



2. 調査前現況
(西南より)



3. 北区北壁 東側
土層断面及び
塙跡検出状況
(南西より)



図版 2



1. N 1区跡
及び遺物出土状況
(西より)



2. N 1区北側
遺物出土状況
(南西より)



3. N 4区
遺物出土状況
(南西より)



1



2



3

1. 堀跡 (N 1・2 区)
(南西より)

2. 堀跡 (N 1・2 区)
(北東より)

3. 堀跡 (N 3・4 区)
(南西より)

図版 4



1. SAH · 挑拂 1
検出状況
(北東より)



2. SAH · P-2
土層断面
(北東より)



3. SAH · P-3
検出状況
(北東より)

図版 5



1. SAH・P-4

検出状況

(西より)



2. 建物跡 (SB-1)

全景

(南西より)

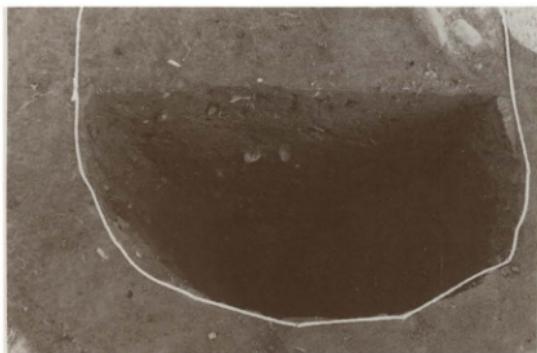


3. SB-1・P-1

検出状況

(西より)

図版 6



1. S B-1 · P-1
半截及び土層断面
(南東より)



2. S B-1 · P-2 及び
S A H · P-1
土層断面
(北より)



3. S B-1 · P-3
土層断面
(南東より)

図版 7



1. 莢石状遺構
検出状況
(北東より)



2. 莢石状遺構及び
埠跡検出状況
(南東より)



3. 莢石状遺構上面
遺物出土状況
(北東より)

図版 8



1. 南区土層断面
(東より)



2. 南区全景
(西より)



3. 南区P-2
検出状況
(南より)



1. 土壘トレンチ
土層断面全景
(西より)

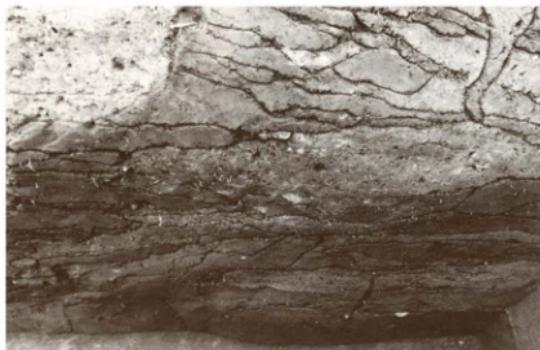


2. 土壘土層断面(1)
(第V期及び第IV期層)
(南より)

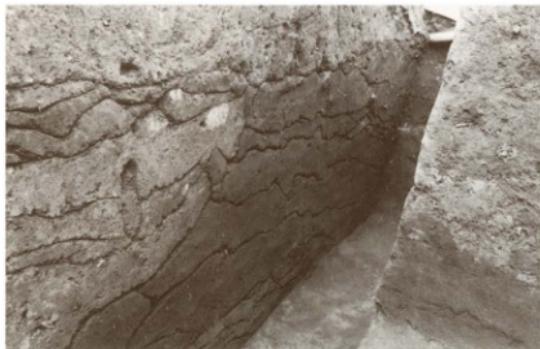


3. 土壘土層断面(2)
(第IV期～第II期層)
(南より)

図版10



1. 土墨土層断面(3)
(第Ⅱ期及び第Ⅰ期層)
(南より)



2. 土墨土層断面(4)
(第Ⅱ期層)
(南より)



3. 土墨土層断面(5)
(第Ⅴ期・塙基礎及び
葺石状遺構)
(南より)

1. 土壌土層断面(6)
(濠側土層)
(南より)



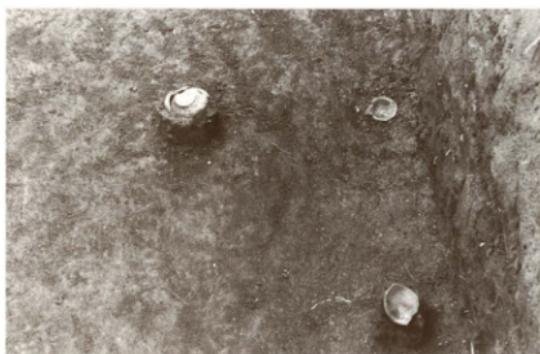
2. 深掘部全景
(北西より)



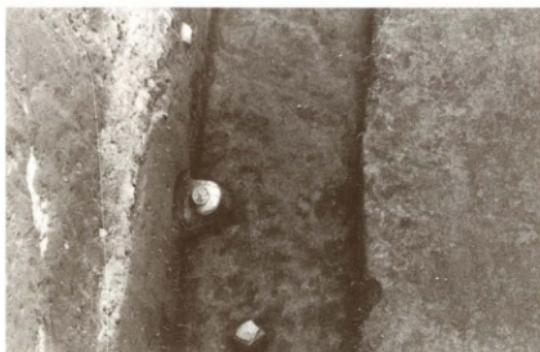
3. 炭化物
出土状況
(西より)



図版12



1. 遺物出土状況(1)
(第Ⅳ期層)
(北西より)



2. 遺物出土状況(2)
(第Ⅳ期層)
(北西より)

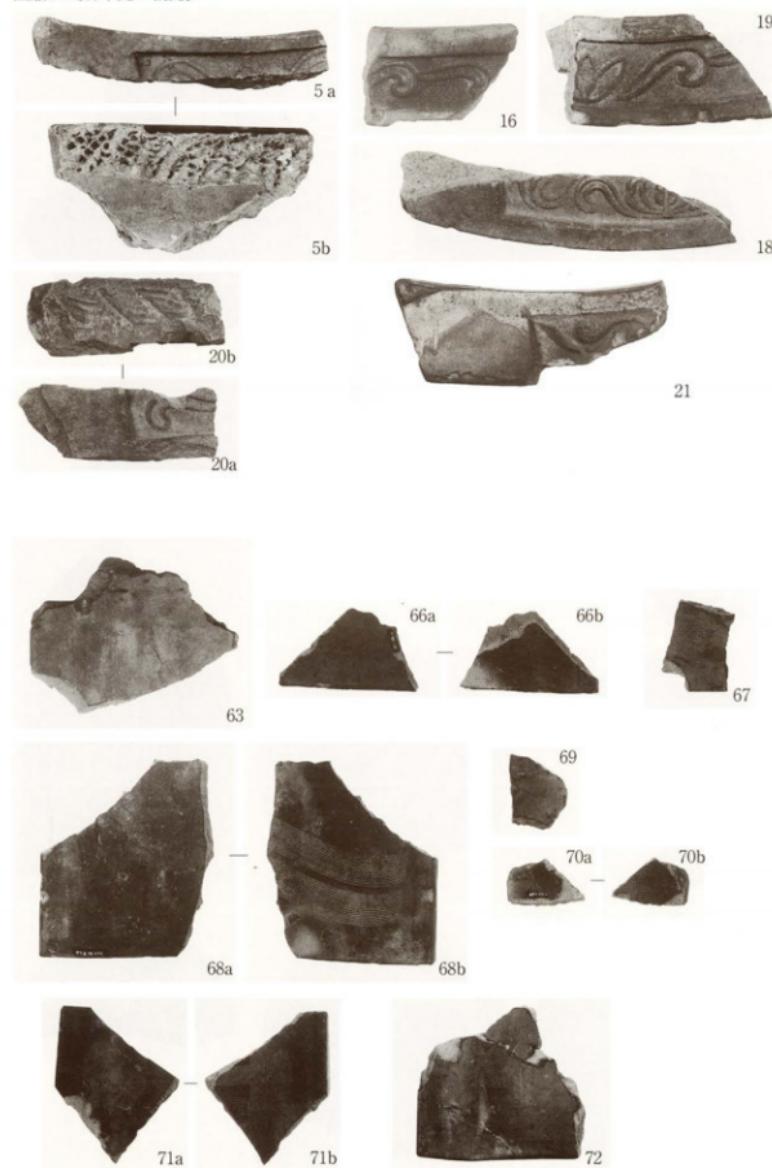


3. 遺物出土状況(3)
(第Ⅰ期層)
(北西より)

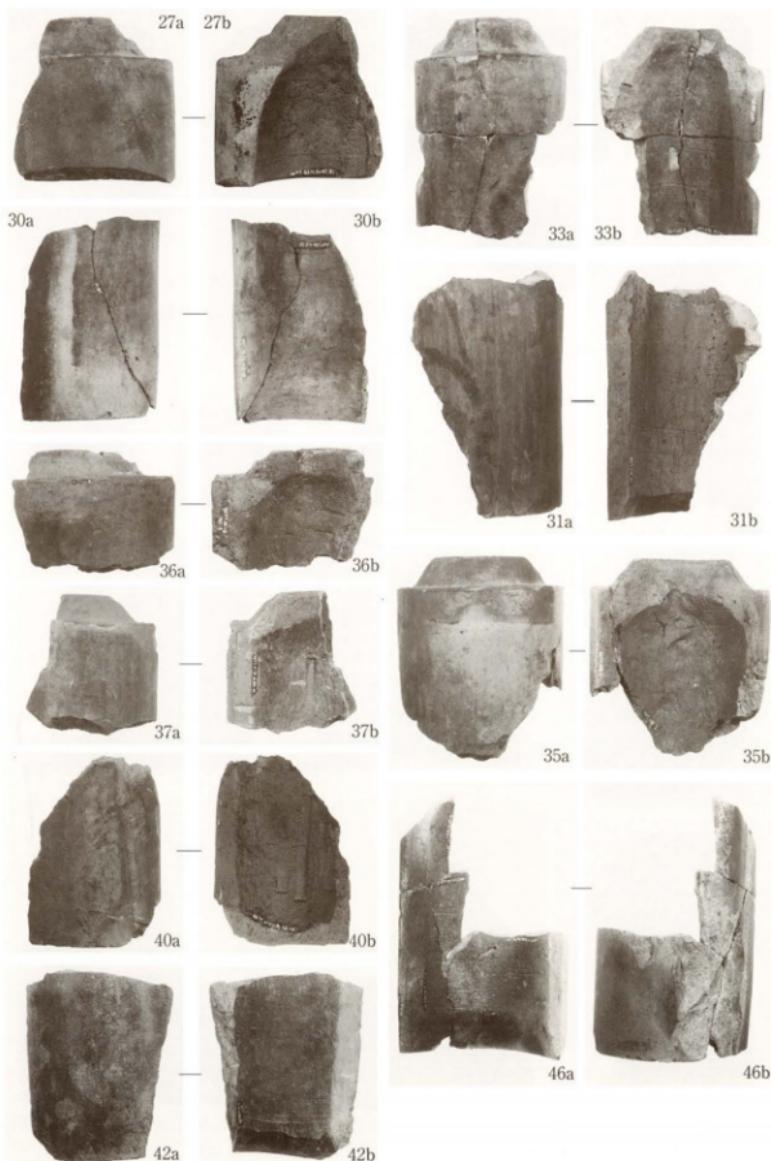
図版13〔軒丸瓦〕



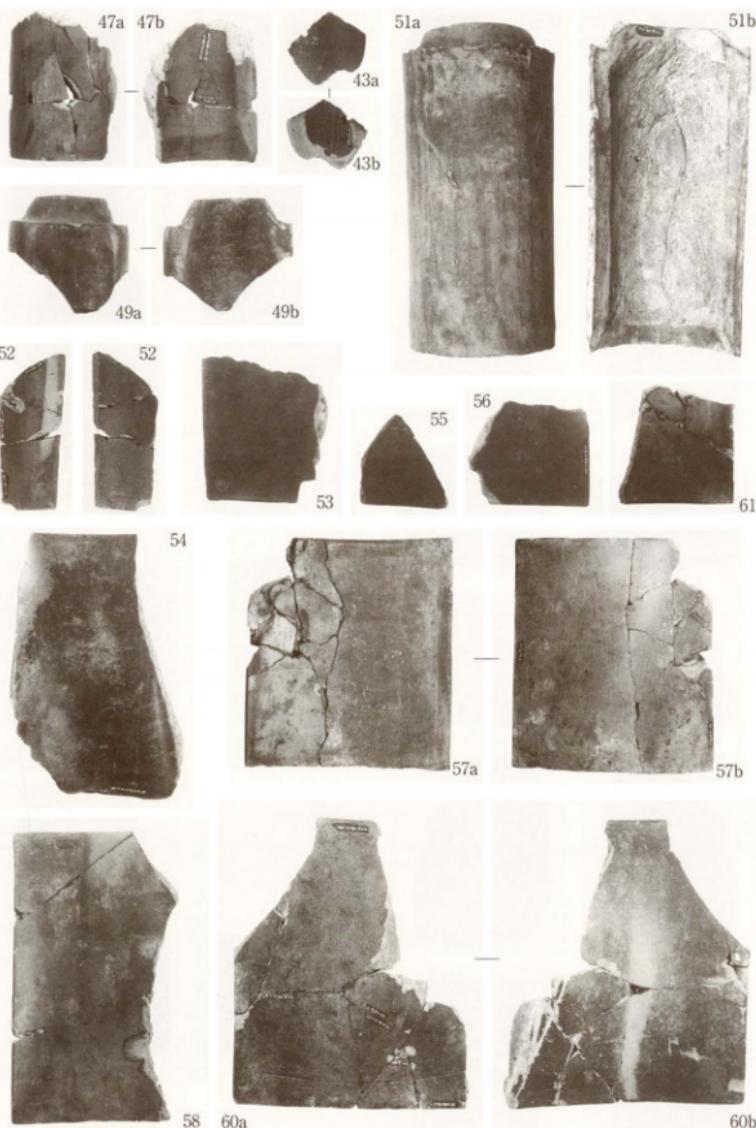
図版14 [軒平瓦・棟瓦]



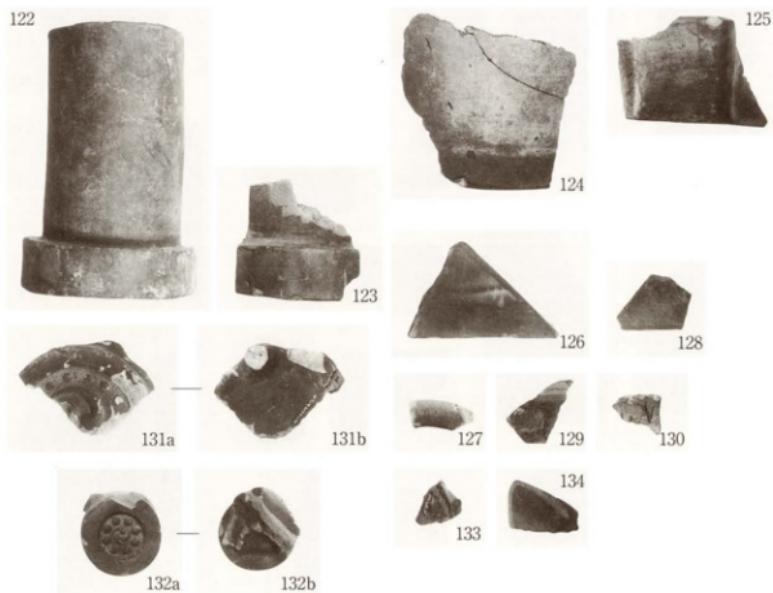
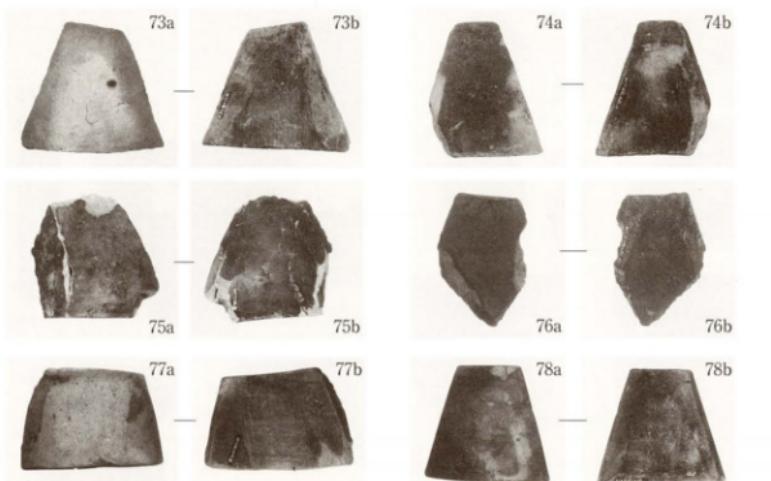
図版15【丸瓦】



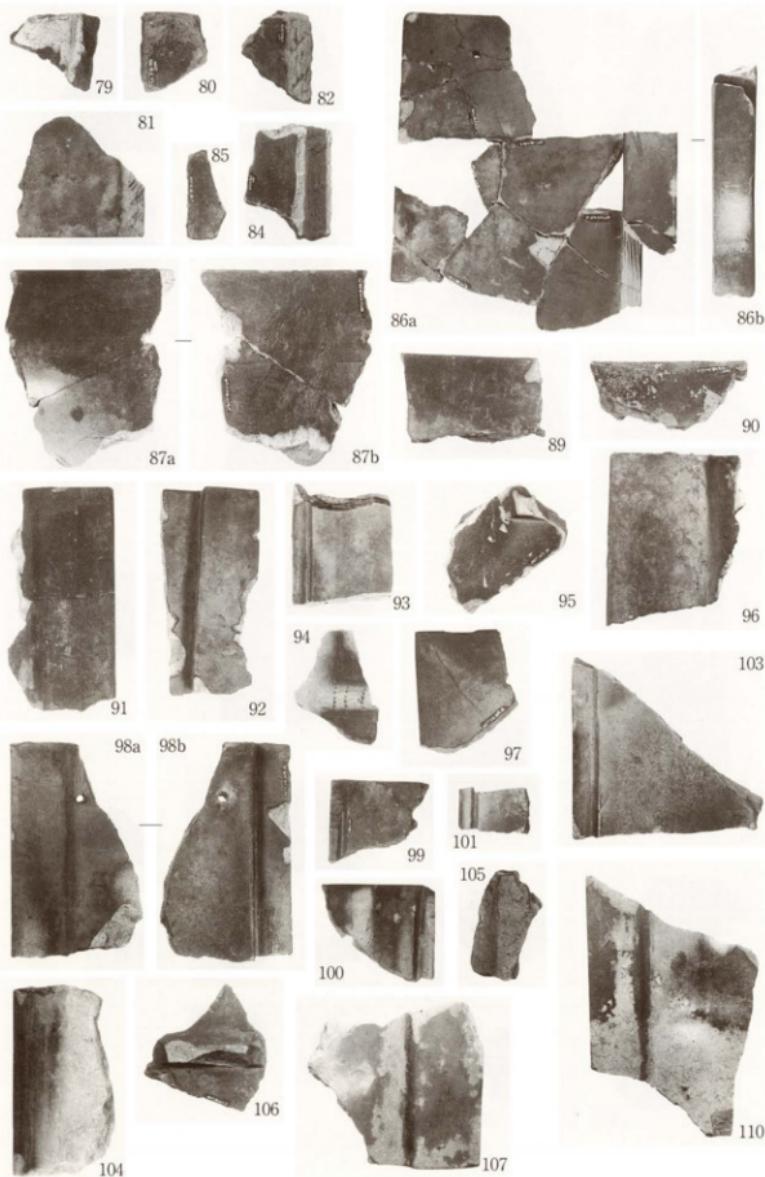
図版16 [丸瓦・平瓦]



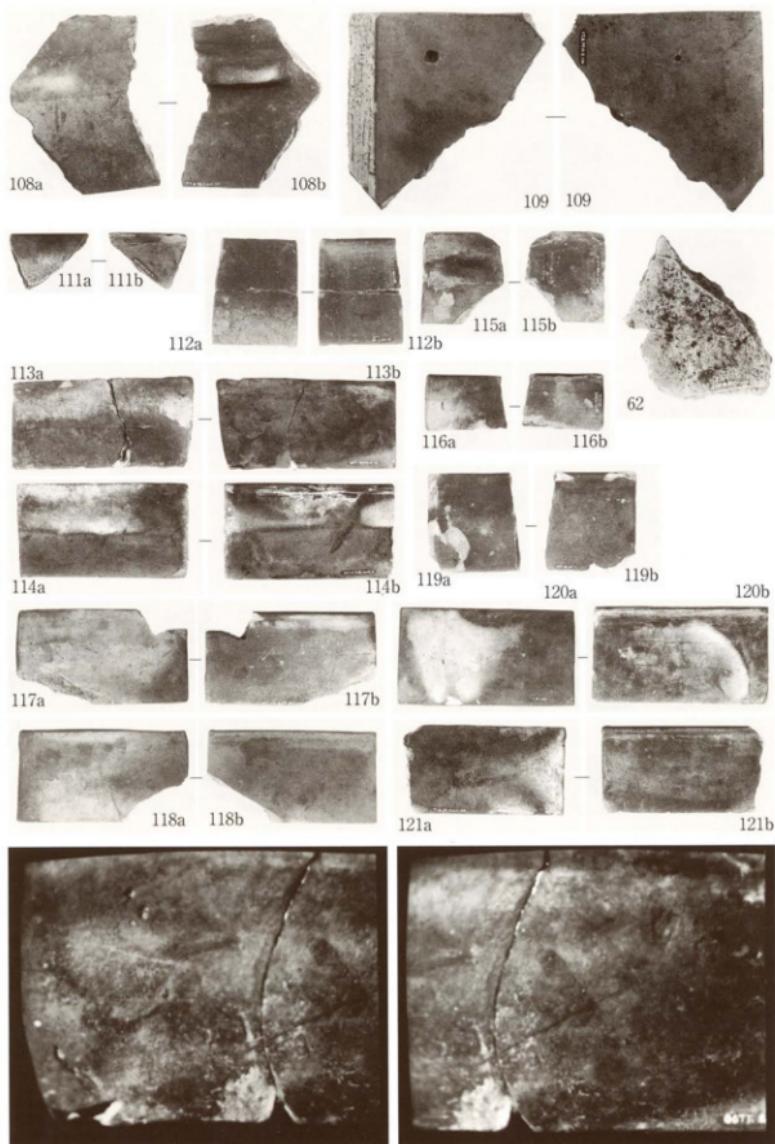
図版17 [輪違瓦・不明瓦・特殊瓦]



図版18 [板堀瓦]



図版19〔板堀瓦・板堀熨斗瓦〕



113bの赤外線写真

図版20 [かわらけ類]



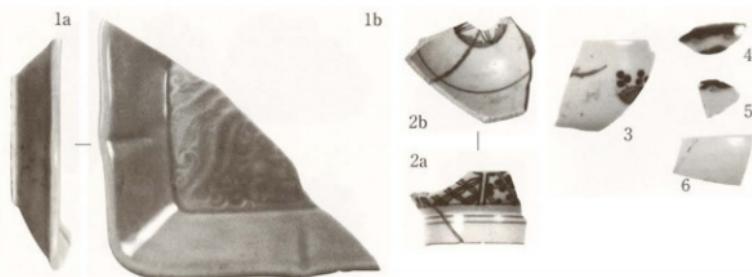
図版21 [かわらけ類]



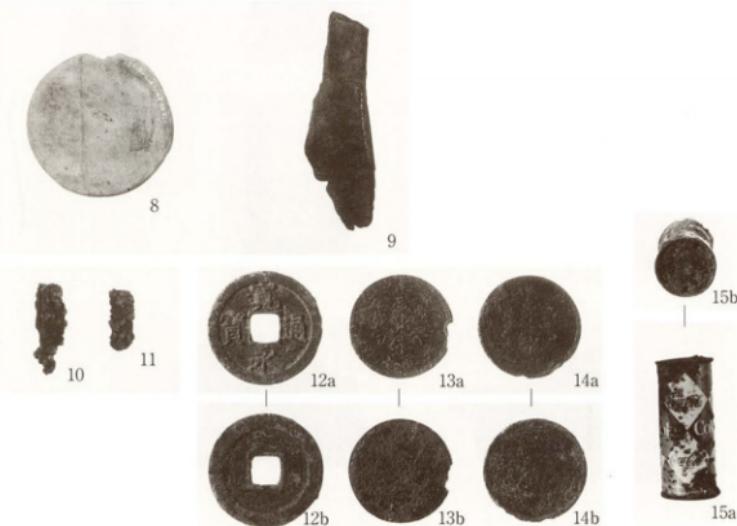
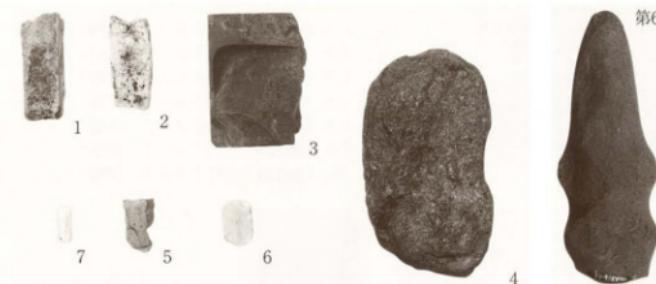
図版22 [土師質土器・瓦質土器・土製品・その他の土器類・陶器]



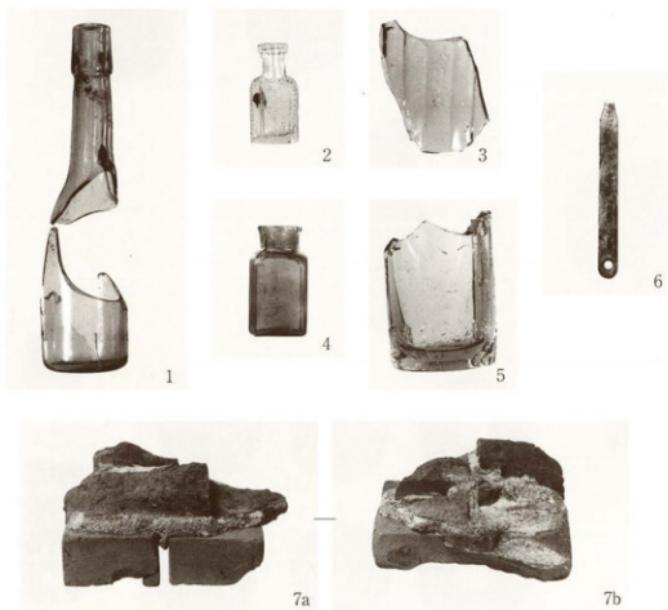
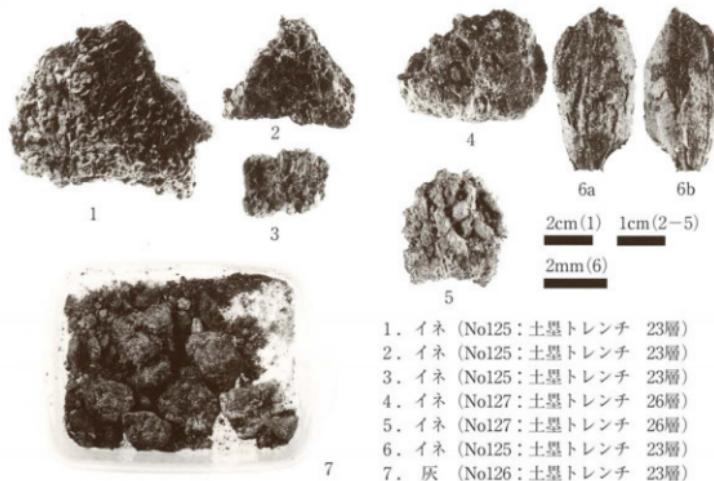
図版23 [磁器・石器類・金属製品]



第61図-1



図版24 [炭化物・その他の出土品]



報告書抄録

ふりがな	しせき つちうらじょうあと							
書名	史跡 土浦城跡							
副書名	茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	石川 功	著者名	石川 功 湯田恵一					
編集機関	土浦城跡調査会							
所在地	〒300-0812 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 TEL 0298 (26) 7111							
発行年月日	2002年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
つちうらじょうあと 土浦城跡	つちうらし 十浦市 中央一丁目	08-203	266	36度 4分 55秒	140度 12分 10秒	20011108 ~ 20020217	約140m ²	上浦城跡の整備 にともなう資料 収集のための学 術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
土浦城跡	城館跡	中・近世	土壘 堀跡 建物跡 その他地業跡	1条 1条 1棟 2基	瓦類（軒丸・軒 平・板堀その他） かわらけ、陶磁器、 炭化米	上壘より概ね古記録と 一致する建物跡、堀跡を確認。 土壘は都合4回の拡張が 確認でき、そのうち最も 古い2時期の上壘は盛り 土が陸生の搬入土。 また、堀などを伴う時期 の土壘濠側の斜面では葺 石を検出。 堀に使用されていた板堀 瓦が多数出土。 かわらけは16世紀中葉か ら17世紀前半に位置付け られると考えられる。		

史跡 土浦城跡

—茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2002年2月28日
編集 土浦城跡調査会
発行 上浦市教育委員会
問い合わせ先 上高津貢塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811
茨城県上浦市上高津1843
TEL 0298(26)7111
印 刷 株式会社 横山印刷